

---

# 緋の剣士に捧ぐ交響曲

槇田理奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋の剣士に捧ぐ交響曲

### 【ZPDF】

N1631M

### 【作者名】

楳田理奈

### 【あらすじ】

「俺は真実を知る為にこの道を選んだ」

尊敬する父の死、周りで起きている奇怪な出来事、親友達の悲しき恋心、厳しい掟に翻弄され、それでも真実を追求し続けた者達の葛藤から結末までを唄う、悲劇の交響曲。…聞こえるは、憎しみを抱く者達の呻き声と断末魔の叫び。

## 序文

### 序文

“俺は誓う。眞実を知るために、仇を討つために、悲しみを絶つた  
めの手掛けかりを残すために。”

これは、ある男の…たつた1人で眞実を突き止めようと奮闘した悲  
劇の物語である。

勇敢なる男の名はシャール…シャールは眞実を知るために、救うた  
めに、悲劇を絶つために孤独な闘いを続ける。

悲劇の前奏曲とも言えるであろう物語を今此處で紡ごう…死を恐  
れず、悲しみすら乗り越え、様々な苦悩を抱えたシャールの悲しみ  
を。

様々な人々が関わってゆく物語を。

シャールに関わった者達の物語を。

シャールは何故危険を承知の上で眞実を知ろうとしたのだろうか。

## 第一節・悲劇の序章

いつも、疑問に思っていた。何故、父は怯えた表情をしているのだ  
らひ。

大きな仕事場を持ったのだから嬉しい筈なのに。出世して、人々の役に立つ、少しでもそれに報いる事が出来ると喜んでいた。アルティ家の監視下でより自由になつた事に、援助も受ける事が出来ると喜んでいたのに。

どうしてそんなに辛そうな表情をしているの?父さんの技術を活かせるんだよ?

もう、父さんが疲れきった表情をしなくていいんだよ、俺、知っているよ。

父さんがずっと苦労して、一生懸命色々な人と話していたり励ましてくれていたり…。

もう、苦労や悩みを分かち合ってくれる人がいるんだよ、父さん。幼い俺はまだ何も知らなかつた。父さんが沈んでいる理由もアルティ家の専門医師になつた本当の理由も。

\* \* \* \* \*

「ただいま、母さん。シャールもただいま」

「お帰りなさい、あなた」

「父ちゃん、お帰りなさいーー!」

シャールは父の帰りを知ると母の腕を引っ張つて玄関まで走つた。

「シャール、ダメだろ。廊下を走つて転んだら痛いんだから」

父が優しくたしなめるのを見た母は穏やかな笑みを浮かべながら

「ずっと早く戻つて来ないのかつて言つてていたのよ、あなた」

「シャールには寂しい思いをさせてくるからなあ…いつもはじめんな

父が少し寂しそうな表情をして呟くが、シャールはニッコリ笑つて

「俺も父ちゃんみたいになりたいもん。だから大丈夫！」

本当は全然違うのに大丈夫だなんて…シャールの笑顔を見る父の眼差しはどこか悲しそうだつた。

その眼差しにシャールは首を傾げたが、どう父に聞いたら良いのか分からず、ぽかんとした表情で見ていただけだつた。

「ああ、すまんな。イザベラ、悪いが晩飯出来ているかな？」

「アクロイド、出来ているわ、早速一緒に食べましょ」

イザベラがニッコリ笑つて父であるアクロイドとシャールに言つた。するとシャールは満面の笑顔を浮かべ、足音を立てながらリビングに向かう。一見和氣あいあいとしたイザベラとアクロイド…そして、シャール…。

技術等も優れ、有名になるが、それに満足する事もなく病気等で困つている人がいたという事が分かつたら自らそこに向かう。

けれども個人では全く出来ない事もあるのだ…アクロイドは医師であると同時に有名な学者でもある。それがアルディ家の幹部が聞き、アクロイドの対応や容姿等を見て、心惹かれたという…そして、幹部との対談等を経てアクロイドは専門の医師としてアルディ家に雇われた。

しかし、それはアクロイドの誇りや理想を打ち碎く無惨なものだつた。

だが、この時はイザベラもシャールも何も知らなかつた。

「あなた、明日から大聖堂に行くの？」

力チャ力チャとナイフとフォークの音を響かせながらイザベラはアクロイドに質問するとアクロイドは頷きながら

「当主様の直属の部下の一員として明日から早速大聖堂に行かねばならない」

アクロイドの答えにイザベラは驚きを隠しつつ、

「まあ！最高幹部に…？」といつ事は明日から早速大聖堂に行くの？」

と、聞くとアクロイドは首を振つて

「本當は今日の夜には出なればならないのだが、今日は仕方ない」

そう言いながら苦笑した…つまり幹部に無理を言って帰宅したという事だ。それを聞いたイザベラの表情が曇る…アルディ家の幹部に無理を言ってまで帰宅したといつ事は嬉しいが幹部に逆らつたらどうなるのかと考えると不安になるのも分かる。

「母ちゃん、顔が怖いよ…」

イザベラの隣で食事をするシャールの瞳にはイザベラの不安そうな表情が怖く映つたのだ…それに気が付いたイザベラは慌てて笑いながら

「シャール、大丈夫。怒つてなんかいないわ」

シャールを安心させるように言った。

幼いながら父は何かとんでもない事をしてしまったのではないかとシャールは内心不安に思っていた。

「シャール……」

アクロイドは寂しそうな表情を浮かべてシャールを見ていた。自分のような医師になりたいと本氣で思っていることを聞いたが、彼の心は複雑だった。

アルディ家の最高幹部になるという事はシャールの目指している医師になるという目標とは正反対なものであるという事を何と無く知つていていたのだ。

金と自らの保身の為ならどんな手段も選ばない幹部の中でも一番上の地位に立つという事である。シャールが目指しているのは苦しんでいる人々全てに手を差し伸べたいという目標とは正反対である。自分達の利益になるような事しかするな、自分達を不利な状況に追い込んだら反逆者扱いし、無礼打ちや処刑をされるという事だ。しかし、そんな薄汚れた事実など幼いシャールに理解出来るわけがない。

アクロイドは困ったように笑うだけだった。

イザベラもアクロイドが最高幹部になるという事に戸惑いを隠せないが、断る事が出来ないという事も知っていた。しかし、アクロイドは後々大きな過ちを犯す事になるが、この時は僅かな不安が心の中に渦巻くだけで、はつきりと形になることはなかった。

言葉少なに食事を終え、アクロイドは申し訳なさそうな表情でイザベラを見た。

イザベラは黙つて首を縦に振り、目でアクロイドにまつむるよう云えた。

言葉にするとシャールが頬を膨らますに違いないし、アクロイドもシャールと遊んでしまい、明日の早朝に大聖堂には行けないだろう。アクロイドが田でお礼を言つてそのまま去つていくのをシャールは首を傾げ、イザベラに向かつて

「父ちゃん、部屋に行くの？」

と、イザベラに聞いた。

イザベラはシャールの問いかけに

「お父さんは忙しいから今日はもうお休みよ、シャール」

と、言った。

シャールは少し残念そうな表情を浮かべたが、仕方ないと無理矢理納得し、イザベラの後を追つて寝室まで向かつた。

アクロイド達の心を表すかの如く月と星は雲に隠され、うつすらとしか見えなかつた。

\*\*\*\*\*

次の日、シャールは早朝に起きた。

今日は家庭教師がやつてくる日なのだ…アクロイドも起き、早速準備を整え始める。

その間にイザベラは台所で朝食の準備を開始する。

まだ夜は明けきつていないが、アクロイドの都合ならば仕方ないし、昨日はシャールもアクロイドを見送りたいと言つて聞かなかつたのでシャールも早い時間に起こしたのだ。今日で事實上最後の家族の団らんの時間である。大聖堂に行けば最低数週間、忙しい時は数ヶ月も帰る事が出来ないので。

「よし…シャール、着替えたか？」

アクロイドの隣で着替えるシャールはニッコリ笑つて

「もう少し！」

と、言つた。アクロイドは笑いながら「早く着替えないとな」と、シャールに言つた。

シャールは頷き、ブラウスのボタンを止める。

シャールがボタンを止めるのに手間取つている間にアクロイドは準備を完了させ、シャールがブラウスのボタンを止め終えるのを待つていた。

「出来たーっ！」

今までボタンを止める事が出来ないでいたシャールだが、初めてブラウスのボタンを全部1人でしたのだ。

「お、出来たのか？偉いなーシャールは

「えへへ」

アクロイドが褒めるのをシャールは照れくさそうな笑顔で聞いていた。

「シャール…母さんが朝ご飯を作り終えているのかも知れないな、行こうか」

アクロイドはそう言つて微笑むとシャールは大きく首を縦に振る。リビングへ向かうアクロイドの手を握り、シャールも向かう。

「父ちゃん、昨日顔色悪かつたね、大丈夫？」

シャールが何気ない様子でアクロイドに聞いたが、アクロイドは笑いながら「大丈夫だよ、気を遣つてくれて有難う」と答えた。きちんと見て「いる」という事を思い、アクロイドは苦笑するしかなかつた。

シャールには悟られないよう感情をなるべく表情に出さないようになしたが、子供は意外と鋭い…子供だからこそ、鋭いのかも知れないとアクロイドはますます心を痛めた。

シャールには…「どうかシャールにはこのような辛い思いはさせないよ」、アルティ家の幹部に田をつけられないよう、ただただ心の中で祈る事しか出来なかつた。

「2人ともー！」飯出来たわよー。」

イザベラのはきはきした声を聞いたシャールは満面の笑みを浮かべて「はーい！」と、答えた。

「父ちゃん、早く行ー！」

「やうだな、シャール」

アクロイドも一ヶ「リ笑つてシャールの手を繋ぐと、早歩きでコビングまで向かう。リビングに着くと、イザベラが用意を済ませていた。

「母ちゃん、俺今日ボタンを全部一人で止めたんだよー。」

シャールはピースをしてそつとつとイザベラは驚いたように田を見

開き、笑いながら

「まあ！いつも父さんにしてもらっていたのに一人で出来たの？偉いわね～シャール…」

「だらう？イザベラも驚いただろう…私も驚いたよ

アクロイドも誇らしげな表情でイザベラに言うと、彼女も頷き、思わずアクロイドの隣にいるシャールの頭を撫でた。

「えへへ、ちょっと成長したでしょ、俺」

シャールは照れくさそうに笑いながらもさう言つとイザベラもアクロイドも頷いた。

「ああ、昨日まで父さんに泣き付いていたのにな」とアクロイドが返すとシャールは頬を膨らませ、アクロイドに「そ、そんなことないもん！」と、言った。

そんなアクロイドとシャールのやり取りをイザベラは微笑みながら、しかし寂しそうな表情で見ていた。

明日からはアクロイドは大聖堂でアルティ家のために働き、滅多に帰つて来ることはない。やはり内心イザベラは最高幹部になることを反対していたが、アクロイドが何故最高幹部になつてほしいという推薦を受け入れたのかということも知つていたので、無闇矢鱈と反対出来るはずもなかつた。

「もー、早く食べないと」飯が冷めちゃうわよ

イザベラは氣を取り直し、笑いながらアクロイドとシャールに向かつて言うとアクロイドもシャールも慌てて手を合わせた。

「いっただきまーす！」

3人で声を揃えて言つた後、シャールはパンを一気に頬張る。アクロイドはパンを千切りながら食べていたが、シャールが物凄い勢いで口に頬張るのを見ると、くすりと笑つた。

力チャヤカチャ…またナイフとフォークの音が響き渡るが、昨日は少し陰険な雰囲気が漂い、話しかけられなかつたシャールが母や父に話しかける。

「今日はねーお隣のレディシア君と遊ぶんだよー！レディシア君が此方へ来てくれるって！家庭教師が一緒らしいんだ」

「まあそつなの？レディシア君も来てくれるならシャールも大丈夫よね」

と、イザベラが言つとシャールはペースをしながら

「僕はレディシアの兄だからしつかりしないとー！」

胸を張つて言つた。それを見たアクロイドは微笑みながら、シャールの頭をぐわしゃつーと撫でた。

「シャールもお兄さんになつたのかあ…父さんは嬉しいよ

アクロイドの言葉にシャールは胸を張つて

「うんー、レディシア君のお兄さんになるんだよー！」

と、シャールは**怠慢**気に言つてアクロイドは少しだけ真剣な表情で

「じゃあ、何があつてもレディシア君を守らないとダメだぞ？」

と、言つてシャールは大きく首を縦に振つて

「勿論だよー」

「ツコリと微笑んだ。

それを見たアクロイドは頭を撫でた。

イザベラもアクロイドもシャールの成長を見守りながら2人で笑つた。

そんな微笑ましい時間は終わり、父はいよいよ大聖堂に向かつて旅立つ時が来た。

イザベラは用意していた鞄をアクロイドに渡し、アクロイドの肩を叩いた。

「有難う」

シャールはアクロイドに向かつて手を振りながら

「行つてらつしゃーーーー！」

と、元気な声で父に言つてアクロイドは

「行つて来る、シャール」

笑いながらも何処か真剣な表情を浮かべて返した。

しばらくシャールの小さな手を握つていたが、やがて手を離し、イ

ザベラから鞄を受け取ると改めて

「行つて来ます」

と、言つてドアを押した。

青い空が広がり、アクロイドはゆっくりした足取りで玄関を出で、ドアを閉めた……。

ガチャン……。

アクロイドの寂しそうな後ろ姿をイザベラは見送りながら身を案じていた……。

アクロイドが無事に帰つて来るよつこ。

しかし、アルティ家の幹部が何故アクロイドを推薦し、彼を最高幹部にした本当の理由をシャルもイザベラもまだ知らなかつた。

この朝が悲劇の序章へと繋がる第一歩であることもまだ知らなかつたのである。

## 第一節・少年達（前書き）

命の重みと儂さを知つた少年達は涙を流し、反逆を誓つ。

それは、大人の理不尽で傲慢で身勝手な理由を知らない純粋な心から生まれた感情だった。

怒り、憎しみ、悲しみ、恐怖。

純粋で無垢な少年達は黒い感情を持て余していたのだ。

## 第一二節・少年達

あれから何年か経ち、シャールはすくすくと育っていた。

「まだかなあ…レディシア君」

シャールはそわそわしながら待っていた。  
今まで守られていただけの彼にとってレディシアの存在は特別だった  
のである。

「レディシアを守らなきゃダメなんだ」

自分よりも年下である彼を守ることが使命であり、生き甲斐でもある  
と、幼いながらに感じていた。

「あの子を守ることが出来るのは俺だけなんだ」

そう、あの日から…アクロイドが大聖堂に行つた後、彼が自分を頼  
つて来た時からシャールはそう感じていた。

アクロイドが出ていった後、イザベラと二人きりで片付けをして  
た。

とは言つものの自分は小皿やスプーンを渡していただけだったが。  
最後に残つたアクロイドの分を片付けていると

「コンコン

玄関の扉から響く音…イザベラはせきしそうだ。

「「めん。シャール、手が放せないの…出でくれる?」

「任せたよ。」

シャールは胸を張つて、元気良々返事をし、玄関に向かつて走った。

「まあ…シャールつたら」

イザベラはどこか寂しそうな表情を浮かべてシャールの後ろ姿を見守っていた。

この子も何時かアクロイドと同じ運命を歩む事になるのだろうか？  
そんな事をぼんやりと考えながら。

イザベラの寂しそうな表情を見ていらないシャールは玄関の扉を開けた。

「あ、シャールさん…」

おじおじしながら話しかけるのはレーティシア・キース。

アルティ家に仕える牧師一家「キース家」の一人息子である。

「レーティン、よく来てくれたね。わあ早く入りなよ、退屈だら？

「あ、はい…ありがとうございます」

たどたどしい言葉遣いで感謝の言葉を述べるレーティシアにシャールは頭を搔きながら手首を引っ張つてレーティシアを中に入れて、リビングまで走る。

「シャールさん…」

「なんだよ、遠慮しなくていいよ。お母さんも歓迎してくれるし。

大丈夫だつて

「う、うん…」

そつ言いながらもレディシアはどこか不安そつな表情を浮かべていた。

レディシアがこんなにも内気になつたのには理由がある…彼はキース家の一人息子ということで両親から愛情を受けた一方で、両親の期待も背負つて育つってきたのである。

将来はアルディ家の有望な最高幹部として活躍するべき人間としてこんなにも幼いうちから様々な教養を身につけなければならぬのだ。

彼は、誰に対しても控えめな態度を崩さない…いや、崩せないのだ。絶対に崩すわけにはいかないのだ。

だから、シャールはレディシアを守りたい、少しでも彼の力になりたいと思っていたのだ。

この孤独な少年の心を守らなければならぬと彼は思い、そして、支えになつて壊れないように守らなければならぬと…それが自分の役目だと思っていた。

「レディン、今田の勉強はどうだつた?」

もう彼も幹部実習生としてアルディ家の中枢に建つ大聖堂で学ばなければならぬ…そのため、今から読み書き、礼儀作法なども習得しなくてはならない。

「うん、疲れたかな…特に分からぬといふはなかつたけれど…あ、でもここは分からぬや。どうすればいいの?」

レディシアは持つてきたマニュアルを開き、シャールに見せた。

その内容は当主や現最高幹部、上流階級の者たちに対する振る舞いや言動についてだつた。

「…当主に会つた時には如何なる場合でも跪かなければならぬ…  
上流階級、現最高幹部に対する最敬礼…か」

「跪くつてどうやるの?」

レディシアには跪くといつ動作が分からぬのだ。

「えつとな…いつするんだ」

シャールはレディシアに向かつて片膝をつき、腰を折つた。  
その姿を見たレディシアは左右に首を激しく振つてシャールに向かつて懇願した。

「…シャールさん、やめてよ…やめて」

レディシアにはその様を見るのが耐えられなかつた…自分はそんなに立派な人間じやない、ただ、両親の事があるだけでこんな事をされなければならないのか、しなければならないのかという怒りと虚しさを子供ながらに感じたのだろう。

どんなに差があつても皆は同じで、それぞれに才能や可能性があつて、それを高めて發揮すること…それが生まれなどで区別されるとに悲しさを覚えてしまつた…皆が賞賛される権利があるのにレディシアは思つたのだろう。

…穢れの知らない少年、正義感が強く、清らかな精神…シャールはこの子が将来、アルディ家の最高幹部になる事などできない、したくないという思いがわき上がつた。

キース家の長男でなければ彼は自分の信念を貫き通せるのかもしけ

ないが、アルディ家の最高幹部になつたらしきたりや規律、聖職者独自の決まりを守ることを強要されるだらう。

「レティン…俺には何もできないんだ…君の両親を止める」とも…」

俺も君も子供だから。

シャールは父を思い出した…あの時は素直にうれしく思つたものだ、父の医師としての信念や実力、成績を認めてくれたから何のコネもない父が最高幹部に抜擢され、自分達もその恩恵を受けたと思つてゐる。

だが、レディシアは自分がアルディ家の恩恵を受けていることをどう思つてゐるのだろう。

両親のことも知つてゐるのだから最高幹部のことも知つてゐるのではないかと推測した。何らかの事情で人に跪かれるのを拒絶してゐる…大聖堂に行つたことがあるのかもしれない…最高幹部とは言えアルディ家に昔から仕えていないので、事情が分からぬ。精神的なものだけではない…きっと様々な事情もあるのかもしれない…それを知る必要がある。

シャールは知りたいという好奇心に駆られ、レディシアに聞いていた。

「ねえ、レディシア…お父さんとお母さんと最近話した?」

突然のシャールの問いかけにレディシアは少しだけ顔色を変えた…シャールの真剣な声と両親のこととを聞かれたからである。

「…うん」

レディシアは戸惑いながらも頷いたが、その先について答えることはなかつた。怖かつたのかもしれない…両親に話すなと言い付けら

れでいるのか…自分が怖くて話せないのか…しかし、シャールはレディシアが話してくれるのを待っていた。

「シャール」

レディシアは怯えているようにも憤つているようにも捉えられる表情でシャールに向かつて懸命に答えようとした。  
幼いながらに…いや、幼いからこそなのだろう。

両親や周りの理不尽な生活や考え方、やりきれないほど疲れと激しい怒りを感じているのかも知れない。

「なんだい？レディシア」

シャールはレディシアの肩を掴み、真っ直ぐと彼の目を見ていた。  
レディシアは狭間でさまよっていた。

両親の言い付けを守るか、シャールの手を取るかの狭間に立たされた。  
怖かったのだ、1人になつてしまふのではないかと…そんな恐れを彼は抱いていた。

「レディシア…大丈夫だよ、君はもう自分で判断しなきゃならないんだ…5歳だろ？」

シャールは優しい光をたたえながらレディシアを見つめていた。  
あと1年もしたら彼は幹部実習生として大聖堂に行かなくてはならない。  
もう、彼には大人になつてもらわなければ困るのだ。  
酷な事を言つているのかも知れないが、あと1年でレディシアにはもつと過酷な使命を背負つていかなければならぬ。

「…シャール…」

意を決したレディシアが言葉を紡いだとしたと…。

「いやあ…」

「………」

イザベラの悲鳴が庭から聞こえた。

「シャール…」

レディシアは顔を歪め、シャールの手を握り締めた。

「レディシア、行くぞ」

シャールは震えるレディシアの手を強く握り返し、母がいるであろう庭に向かつて歩いた。

＊＊＊

庭ではイザベラとアルディ家の幹部が話していた。

「残念ですが…アクロイド卿は…」

「いや…そんなの嘘よ…あの人… そんな…つ…」

イザベラは悲鳴を上げながら何度も首を横に振つて否定した。

「…お気持ちは分かりますが、アクロイド様は昨日…毒を飲んで自殺を…」

話の内容は大聖堂で医師をつとめていたアクロイドが毒を飲んで自殺したという報せだつた。

大聖堂には一般人は立ち入る事ができない… イザベラはアクロイドを助ける事ができなかつた事と、アクロイドが自殺するはずがないという思いがあつた。

しかし、幹部の口から告げられたのは残酷な真実。

「……イザベラ様…此方に…」

イザベラがアクロイドの死を頑なに否定したので、幹部達が彼女を連れて立ち会わせようとしていた。

「……！」

それをこつそりと聞いていたシャールは愕然とし、レディシアはシャールの背に隠れ、幹部達を睨み付けていた。

幼いながらに叩き付けられた現実… 厳しく育てられた故に身に付いた現実を見る力…。

2人とも幼かつたが、アクロイドの事が分からぬほど幼くない。

「シャール…」

レディシアはギュッとシャールの手を握り締めたまま、じつと耐えていた。

「…大丈夫…大丈夫だよ、レディシア…」

今にも崩れそうな程、悲しいのに。

それでも耐えようとする…レディシアにはシャールが痛々しく見え

て仕方無かつた。

「…」めんね

レディシアは謝つた。

ただ、目を潤ませて謝つた。それ以外に何が出来よつか。幼すぎる心に残酷な真実が受け入れられるものか。

「シャール、ごめんね」

レディシアはシャールの背中に顔を押し付け、涙ながらに謝罪の言葉を口にした。

「レディシア……」

耐えよつとしていたのに、レディシアが泣きながら、何度も何度も謝罪の言葉を口にしているのを見るのも聞くのも辛かつた。耐えられない…憧れていた父の死を受け入れろ…だなんて。

「レディシア……」

シャールはレディシアの方を向いて胸に顔を埋め、すがるように泣いていた。

レディシアは戸惑いながらシャールを全身で受け止めていた。

熱い…体が熱く感じる。

シャールが顔を埋めて泣きじやくつているのだから無理はないが、もう一つ…様々な感情が込み上げる。

(悲しませる事が母さん達の仕事なの?)

両親は知らないだろ？…両親達が上の地位に立ち、名譽と得て私欲が満たされているとき、組み敷かれた大勢の人々が怒りに震え、涙を流し、悔やむ姿を。

レディシアは何の躊躇いもなく、シャールの背中に手を回した。

「シャール…僕も協力するよ」

何を戸惑う必要があるというのか。

自分は泣いている人々の為に上の地位に立たなければならぬのに。

「大丈夫だよ、シャール」

シャールは泣いており、何も答えなかつたが、行き場のなくした手を動かしてレディシアの背中に回した。  
まだ、昼夜がりの事であった。

\* \* \* \*

それから夕方になり、ようやく泣き止んだシャールはレディシアの手を握り締めていた。

「シャール、また明日」

もう帰らないといけない時間らしい…シャールは名残惜しそうな目でレディシアの手を見つめていたが、仕方無いと手を放して別れを告げる。

「またな」

涙声でレディシアに向かつて言った。

側についてと言えればレティシアは側についてくれるだらうか。  
でも、言わなかつた。

アクロイドを奪われた悲しみ、怒り、憎しみ…抑えがたい感情と何もかもを滅茶苦茶にしてしまいたい衝動をレティシアにぶつけるのは酷だ。

彼を傷付けてはならない…彼を守らなければならぬ。

シャルはアクロイドを失つた悲しみを堪えながら家に入った。

「ただいま…」

「お帰り」

イザベラが妙に明るい声で返してきた。

「…お母さん」

シャルは今にも泣きそうつな声で母を呼んだ。  
それを聞いたイザベラはハッとして、リビングまで歩いてきたシャー  
ルの方に駆け寄つた。

「シャル！」

アクロイドの事を聞いたのだろう…イザベラは泣いていたシャル  
を抱き締めた。

「シャルルッ…」

声にならない…イザベラはシャルをひたすら抱き締めていた。  
シャルは一度目の涙を流し、母に体を預けて泣いた。  
でもレティシアの時とは違う涙…。

アクロイドの死を突き止めようと、母を守ろうという堅い決意と自身を含むアクロイドの死を救えなかつた者達への怒りと悔しさから、流れる涙だった。

## 第三節・十字架（前書き）

君は知つてゐるかい？

俺は知つてゐるよ。

薄らと感じていたなんて言つたら君はきっと怒るだらうから。

田の前に広がるのは血で真っ赤に染まつた残酷な世界。

## 第三節・十字架

シャールはイザベラに知られないよう、こつそりと勉強を始めた。一般の人間がアルディ家の小姓になるには、難しい試験に合格しなければならない。

レディシアに頼れば彼の護衛としてアルディ家に潜入出来るかも知れないが、まずは実力でアルディ家に認めてもらわなければ彼の力を借りても有力な情報を得る事は難しいだろう。

「はあ……」

溜め息が出た。もう何回目だろ？ 溜め息をついたら幸せが逃げると叫うではないか。

（せつからく聖書やら歴史書やらを貰つたんだ。勉強しないとな）

アルディ家の小姓になるならば必要だろ。後は炊事雑用をきちんとこなしたら良い。あと3ヶ月しかないが、必死に勉強したら何とかなる。

（今度、キース家に行つてみよつかな）

キース家に行つて挨拶でもしようかなとシャールは思つたが、イザベラの事を考へると心苦しいものがある。それに噂では任務に行つていたカインが帰つて来るらしい。

「兄貴……」

アクロイドの親友であつたソフィアとシリウスの息子で家族ぐるみ

の付き合いをしていた。

「ソフィアさんとシリウスさんはどうしているかな」

シャールはカインと遊んでいたのでシリウスやソフィアとはあまり面識がない。唯一知っているカインも任務でなかなか帰って来ない。だから余計にカインが帰つて来るという知らせは嬉しかったが、それはカインと再会した瞬間にかき消されるとは思わなかつただろう。

「母さん、カインさんのところに行つてもいいかい？」

シャールは何の躊躇いもなくイザベラに向かつて出掛けの許可を得ようつと思い、問い合わせた。

「…ええ、なるべく早く帰つて来るのよ」

肝心のイザベラの返事はどこか濁つていた。  
イザベラの濁つた返事にシャールは少しうれいながらも

「…？…うん、分かつてゐるよ」

と頷いた。

カインは任務を終えて帰つて來たのだから忙しい…だからイザベラはそう言つたのだ。

シャールはカインに会いに行くのが楽しみで何故突然カインが帰つて來たのかという事を全く想えていなかつた。  
いや、予想もつかないだろ？

まさか、こんな展開になつてはいよ？

「母さん！父さん！」

カインの声だ…シャールはカインの悲痛な声を聞いてしまい、身を強張らせた。あの声は少し離れた刑場から響く声ではないか。

この村は元々アルティ家の刑場として使用されており、今でもここで凄惨な死に様を目の当たりにする事が多い。この村に名前がないのはそのため、アルティ家の都合のいいように蹂躪されるだけの哀れで寂れた村だった。今は此処から3キロぐらい離れているので救われる事が多かつたが、蹂躪されるだけの存在であることに変わりはない。

シャールはこの村が嫌いだった、蹂躪されようとも抵抗せずに黙つたままにいるこの村が。

「兄貴はどうしているのだろう」

カインはどうしているのだろう。

この村はどうなってしまうのだろう。

蹂躪されたまま、悲惨な運命を背負うことになるのだろうか。

カインを探しながらもシャールは全く別の不安が心に過ぎていた。

この村は近い将来、消えてなくなるだろうと。

カインの帰還はいったい何を意味するのか、シャールの心には不安だけが膨らむばかりだった。

「…あああっ！」

悲鳴？

シャールは後ずさつた…この声はレディシアの声ではないか。自分よりもはるかに幼いレディシアが悲鳴を上げている…シャールはいよいよ焦り、恐怖が芽生える。

「レディシア…っ！」

掠れた声しか出ない…誰か、誰でもいい。

シャールは震えた声で助けを求め、渴望するがこんな人気のないと  
ここに人は現れるわけもなく。

「…待つて…」

シャールは一步踏み出した…レディシアを見捨てるのか。カイン  
もレディシアも見捨てるものか、助けるんだ、必ず助けて見せるん  
だ。

アクロイドの言葉が蘇る…。

『シャール、レディシアを守らないとなあ

それに頷いた幼い自分…そうだ、我が身可愛さに逃げ出すなんてレ  
ディシアの兄貴分失格ではないか。

恐怖心を堪えながらシャールはひたすら刑場の周りを歩いた。危険  
すぎる冒険をしているということが分からぬほど子供ではない  
もう直ぐ自分は1桁を卒業する年齢なのだから。

「兄貴！レディシア！」

少しも怖く無かつた…レディシアを思えば、アクロイドを思えばこ  
んな暗闇など少しも怖くなかったのだ。

…この刑場に踏み入れた事が、後の彼の幼い心をズタズタに引き裂  
くきっかけにもなろうとは知る由もない。

「…怖くない」

そうだ、怖くない。怖くないのに足が縛れて動かない。シャルは悲鳴を上げて逃げたくなる心を懸命に抑えながら歩く。昼なのにこの場所は刑場と言う名前の影響なのか人気がなく、どこか不気味えあつた。

「…誰か、誰か…」

思わず助けを求めたくなる。何と言つても彼もまだ10に満たないのだから当然と言つたら当然なのだがアクロイドの後を継いでアルディ家に向かおうとしている彼がこんなことで泣き事を言つている場合ではない。

必死に走りながら深い深い森の中に入つていく。

刑場は直ぐ近くにあるが、刑そのものは人が寄り付かない場所で行われる。しかし辺りには血生臭い香りと赤で染まっているため、やはり誰も顔を真っ青にして近寄らずに刑を行つた後の始末を行う担当となつている人が護衛をつけて向かうだけだ。

「レディシア……！」

こんな場所に来るのは御免だがカインとレディシアを探して事情を聞かなければという思いが彼を駆り立てる。ありつたけの声で自分の弟分の名前を叫び、返答を待ちながら走る。暫く走つているとレディシアの悲痛な叫びとカインの怒鳴り声が聞こえてくる。

「カイン様！ もうやめて！」

「つむさーーお前に何が分かるんだ！」

何やらもめているようだ…シャールはカインの身に何かがあつてレディシアがそれを制止していると思い、走る速度を上げた。走れば走るほど2人の声が近くなる。

「お前だつてアルティ家の幹部の息子のくせに…」

「やめて、やめて下さい…カイン様」

「離せよお前に俺の何が分かるんだ、この愚か者め…」

「やめて…離して…離して…」

「裏切り者が…」

カインが怒りのあまりにレディシアに襲いかかろうとしているのではないか?

「兄貴…」

シャールは走つて走つて…そして。

「兄貴、レディシア…」

レディシアの方を揺さぶるカインのところへ辿り着いた。

しかし、そこに広がる凄惨な光景が幼いシャールの心を容赦なく抉つた。

「ソフィア様?！」

グロテスク…そして悲劇。

カインの母親だつた女が倒れている。幸いにも彼の妹であるレイと弟のイザは共に修道院にいるからいいのだが。

「どうして…どうしてなんだ!？」

シャールも錯乱しそうになつた。

あんなに優しく誰からも慕われて、そして元々は孤児であったレイとイザを引き取り、まるで我が子のように育てていたの。」  
イザが病弱で良かった。レイもイザもそのためにこの惨劇から逃れたのだから。

犠牲者が少なくて助かつた。

そんな事を考える自分は冷たいのだろうか。

「母さん！ ねえ母さん！」

恐らく彼は母の事で慌てて帰つて来たのかもしないとシャールは察し、彼を宥めようとするレティシアの手を引いた。

「シャール？」

「…帰るんだ」

無惨な姿にした者達に対する怒りと憎しみ、母を助けられなかつた嘆き、これからどうすればいいのか分からぬといつ不安、どうする事も出来なかつたという絶望。

負の感情で冷静になれないカインに何を言つても意味がない… 今の彼は何をするにも顔色すら変えず行つてしまつたのだろうから。

「うん…」

納得がいかないと叫わんばかりの表情を浮かべるレティシアにシャールは少しだけ苦笑した。きっとこれが彼なりの優しさなのかもしない。

しかし、優しさは時に凶器となることだってある事をレティシアは

知らないのだ。

「父さん…」

アクロイド…彼も自分達を守るためにして自殺を図ったのだ…確信はないのにそんな気がする。やはり自分は真実を知る必要がある。

「レディシア、帰るよ。帰つて母さんに話すから  
…シャール！」

レディシアは田を見開いた。確かにシャールは並はずれた能力があるけれど、無謀過ぎる。

「大丈夫さ、お前と一緒に何だつて出来る

危険な場所へ丸裸で飛び込もうとしているのに、いつもと変わらぬ自信満々な表情で言ったシャールにレディシアは思わず頷いた。

彼はこうした人なのだ。

例え、残酷な結末が待ち受けっていたとしても、真実を知る事を断念しそうとはしない。

家を田指しながらシャールは「ぐうと睡を飲んだ。

#### 第四節・別離（前書き）

焼け付くような感情が全身を駆け巡る。

凍り付くような寒さと焼け付くような熱さが支配し、交錯する。

様々な感情が入り乱れるこの時、この空間で一人、失われていく温もりに悲しみを覚える。

嗚呼、もう戻れない。

故郷とも別れを告げる時が刻一刻と迫るばかり。

煌めいた瞳だけが、唯一の光。

#### 第四節・別離

ちつぽけな存在。

直ぐに踏みつけられて終わってしまう悲しい存在。

それでも立ち向かうのは無垢で純粋で建前を知らないから。

純粋無垢な清らかな心が最大の悲劇だと、後に彼等は知ることになる。

枷のない清らかな心は時に仇となり、悲しみを生み、破滅へ導かれる。

「ただいま

重々しい声でシャールはいつもの挨拶をした。

「お帰りなさい」

母もまた返した。しかしつもの弾んだ声ではなく、重々しくて真剣な声だった。

シャールは戸惑つた。

母の弾んだ声だけが支えだったのに、それすらも聞く事が出来ないということに深く傷付いた。

慰めてほしい、励ましてほしい。  
自分の心は悲鳴を上げている。

「シャール、此方に来なさい」

呆然とするシャールの耳に透き通るような声が響く。

それは酷く冷たい声。

シャールは怯えたような表情を浮かべてリビングへと向かつ。

ガチャリ

シャールはゆっくりとドアノブを回して入った。

静寂が怖い。

「シャール…」

怒られると思った。無謀な真似をしようとしたことが暴かれて怒られると思った。

恐る恐る母の元まで歩いた。

「シャール！」

母の発した声は怒りに満ちた鋭い声でも何でもなかつた。

「母ちゃん…」

「どうして泣いてるの？」

シャールは苦しくてそれ以上何も言えなかつた。

もういい歳しているのに赤ん坊のように抱き締められて頬擦りをされた。

「お父さんを守れなくじめんね、怖い思いをさせじめんね、シヤール」

恐らく刑場の事だと思つた。

レディシアが何か言つたのかも知れない。

「母さん…」

背負つには重すぎた悲劇。

追い詰められて痛めつけられた。

「いめんなさい」

いつも自分は心配させてばかり。

シャールは目の前に訪れた悲劇に立ち向かえないしつぽけな存在である自分を責めた。

母もレディシアも守れない、カインの支えにすらなることが出来ない自分を責めた。

責めて、責めて、極限まで責めた。

「母さん、俺は」

母の温もりを感じながらシャールは告げる。

「立ち向かう」

母は何も言わない。

「シャール…つ…」

嗚咽を漏らすだけだ。

「残酷な結末が待ち受けようとも、俺は立ち向かう

シャールは母に甘えることを捨てた。

捨ててしまった。

「『めんなさい、母さん』

やはり母は何も言わない。何も言わないが、それ以上に確かなものがある。

母も共に行くと言葉以上のものでシャールに伝えている。  
シャールの脳裏には先ほどの赤い世界が過った。

残酷で凄惨で醜い世界。

自分達は逃げる事を赦されない籠の鳥。

そんな籠の鳥にも等しい子供が絶対的な権力に立ち向かうなんて無謀にも程がある。

「許してね」

それでも、血のようになに真つ赤な世界へ向かわなければならぬ理由  
がそこにある。

シャールはイザベラにしがみ付き、延々と己の未来を考えていた。

\* \* \* \*

「イザベラさんに言つたらしいけど……」

その頃、レディシアは一人で家の中にいた。シャールが自暴自棄にならなければいいのだがと思い、イザベラに刑場へ行つた事を友人に伝えてもらつたのだ。

カインに強く搖さぶられたせいか、体中が疲れてしまった。痛いほ

どに肩を掴まれて揺さぶられて罵声を浴びせられて。

「カインさん…」

両親を失つてしまつた彼の悲しみを誰が拭う事が出来ようか。  
妹？弟？

いいや、幼い2人にカインの悲しみを拭う事なんて出来ない。カインの殺気に怯えるだけだとレディシアは考えた。  
でも…。

「何で刑場で…」

カインの両親が特別な何かを背負つてているのだろうか。

「少なくとも事故ではない」

事故ではない… そうなれば残された結論は一つ。

「抹殺された…」

殺されたんだ、ソフィア様は。  
レディシアは確信を抱いた。

アクロイドの死も氣になるしソフィアの事も氣になる。

「此処はやるしかないよね」

シャールも自分と同じ小姓になつてアルディ家に潜入して調査すれば真実が掴める。しかも自分の両親はアルディ家の中にいるし上手く言えば無条件でシャールも…。

「母ちゃん達に言えれば無条件でシャールを……」

レディシアは希望を得た。

子供が絶対的な存在に立ち向かう事なんて出来ない。しかし、子供だからこそ見えるものもあると彼は思っていた。

(建前と云つて文字を知らない僕らが何よりも深みにはまる)

レディシアは息を呑んで母が帰つてくるのをずっと待つていた。

これは、禁忌。許されざる禁忌を犯せうとしている。

ふと、レディシアの脳裏には禁忌と言葉が思い浮かんだ。シャールをアルディ家のところへ行かせうとする事が禁忌と思われたからだ。

後ろめたい事をしたわけでもないのにレディシアはずつと怯えた。

(シャール、君に会いたいよ)

怖いもの知らずの勇ましい少年に会いたい。

レディシアは孤独に耐えながら両親の帰りをずっと待つっていた。

「母ちゃん、何処へ行くの」

涙声でシャールは母に問い合わせる。

「貴方の望んでこるとこ」

イザベラはシャールの手を強く握り締めながら答える。

彼女もアルティ家に行くと決めた。 そう、 決めた以上向かう場所はただ一つ。

「キース家…か？」  
「そうよ」

冷たい声で母は答えた。  
ぞくりとするような凍てついた声にシャールは再び恐れ戦おののぐ。  
背中に戦慄が走つたがシャールは懸命にそれを抑え、 黙つて大地を踏みしめる。

そこから先はイザベラもシャールも無言だつた。 言葉など要らない。 ただ黙つて目的を果たす為に動くだけだつた。

握り締める手に力が籠り、 シャールもそれに応えるように握り返す。 重苦しい沈黙のまま暫く歩いていると、 小奇麗な家が見えてくる…

キース家である。

「ヘレン様、 ジェイソン様、 いらっしゃいますか？」

淡々とした声でイザベラが尋ねる。

レディシアの両親の名前であることをシャールは把握しつつ黙つていた。  
すると…。

「はい、 どちら様でしあうか」  
「…レディシア様、 ね？」  
「…もしかして…！」

ガチャリ

レディシアはイザベラとシャールであることが分かり、扉を開けた。

「イザベラ様にシャール様」

「レディシア様、突然申し訳ございませんわ」

「…いえ」

レディシアはイザベラ達の訪問に最初は驚いたが彼女達が何故ここに来たのかを直ぐに理解した。彼も悶々としていたので丁度良かつたのだ。

「どうぞお入り下さい…母も父も不在ですが」

か細い声でイザベラ達を中心に招き入れた。

「有難う」

相変わらず淡々とした声で返すイザベラ。

シャールとイザベラの強張つた表情を見たレディシアは内心オロオロとしていた。

アクロイドを奪われた怒りと悲しみと憎しみが混じった気が体中から放たれていたからだ。申し訳なさが募るレディシアの耳に聞こえてきた声。

「只今、レディシア」

甲高くて耳に付く女性の声。

「……お母様、お帰りなさいませ」

レディシアはシャール達の激しいエネルギーに圧されながらも母に

言葉を返した。

ガチャリ

「まあ、イザベラ様にシャール様」

突然の訪問に驚いた女性は更に甲高い声を発した。  
イザベラは全く気にする様子もなくニシ「コ」と笑つてヘレンに向か  
つて恭しく頭を下げた。

「ヘレン様、貴方の帰りを待つておりました。本当はジョイソン様  
にお話があるので…」

「ま、まあジョイソンに…でも今は任務で家には帰つて来ないので  
すよ。私でよろしければ…」

ヘレンは笑みを浮かべてイザベラに座るよう促し、話を切り出した。

「何か御用ですか？」

「ええ、レディシア様とシャールの事で少しお話があるのでよ。

ヘレン様」

「そうなのですか…」

このやり取りをシャールとレディシアは慌てふためきながら聞いて  
いた。恐ろしい程のエネルギーが部屋中に迫る。少しでも触れたら  
このエネルギーによつて千々に引き裂かれてしまいそうだ。

「是非とも息子シャールをレディシアと同じじろに入ってくれま  
せんか？レディシア様も一通りの講義を受けるのでしょうか？シャー  
ルも是非アルディ家のお役に立てたいのです。シャールもそう望ん  
でいますから、そのためにも貴女の御力が必要なのですわ」

と言つて申請状を突き付けた。傍から聞いたら何と冷徹な女だと思うだろう。アクロイドの仇打ちに息子を利用するとは何事かと思つに違ひない。

「…シャール様も望んでいるのですか？」

ヘレンの間にかけにシャールは口角を上げて頷いた。

ぞくりとするよつた笑み。

レディシアは顔を強張らせた。

こんな凍てついたシャールの笑みを見た事がない…口だけで笑みを作つた彼にレディシアは恐怖を覚えた。

「ええ、是非とも勉強を重ねてアルディ家に貢献したいと思つておられます」

淡々と、感情のない言葉。

「…レディシア、お前はいいの？」

ヘレンの問いかけがレディシアに向けられる。  
こくりと首を縦に振るレディシアにニッコリと笑つたヘレンはイザベラの方に向かつて

「分かりましたわ。推薦状を送つておきますね」

と言つた。

推薦状と言つるのはアルディ家の最高幹部のみが良き人材を見つけ、決定権を持つ王家の当主に向けて推薦する人物について詳細に記載して送ると言つもの。

「有難うござります。くれぐれも確実に送つて下さいね?」

レディシアはヘレンに見えないように頷いた。それと同時にヘレンもこくりと頷いた。

そんなことよりも仇打ちに捉われてしまい、正気を失いそうになるシャールとイザベラの身を案じていただけだった。

変わつてしまふ、悪い方向に物事が動き出す。

じわじわと何かが動いて行くのが分かつた。

\*\*\*\*\*

「成功したわね」

「うん」

まだ成功したわけではないこと位イザベラとシャールには分かつている。しかし、何故だか知らないが確実にシャールがアルディ家の幹部になれると言う確かな手応えを感じていた。

アルディ家は確実にアクロイドの息子であるシャールを囮い込んでおこうとするだろう、野放しにしていたらアクロイドを越える存在になるかもしねりない。

そうなつてしまえばアルディ家は更にアクロイドの事を隠蔽し出すだろう。その前にシャールを内部に置いておけば向こうは安心し、油断をするだろう。

「母さん、大丈夫かな」

シャールはイザベラに問い合わせたが、彼女は自信満々にシャールに向かつて

「大丈夫よ、何れ不満が溢れるわ」

と言つた。

イザベラは近い未来を見ているとシャールは思い、母には一生敵わないと苦笑した。

母のように冷徹で逞しくなりたいとシャールは決意し、家に帰つて行つた。

「…あのが、シャール・レイモンド…アクロイドの息子か」

イザベラとシャールの様子を遠くから見ていた男はぽつりと呟いて考へる。すると後ろにいたもう一人の男は

「ホーリア様、アクロイドの息子をどうするのですか?」

と問い合わせる。

勿論答えは一つだ。

「アルティ家の…私の部下として採用しようか」

その答えに後ろをついていた男達は驚きの声を上げる。

「アクロイドの息子ですよ? 内部に入れたら危険です、それにシャー少年…かなりのキレ者です。ヘレン達のところに行つてわざわざ推薦状を書いてもらつようつ申請するなんて!」

普通、ヘレンのような地位にいる人間にわざわざ推薦状を書いても  
らうよう頼まない。口だけで契約を交わし、当主に言えば小姓として採用されるのだ。しかし、シャール達はそれをせずに推薦状を書くように申請した。

申請書を出された以上は書くしかない。それを拒んだら批判されるからだ。只でさえ人手が不足していると言うのに自らアルティ家の小姓として志願してきた人間を拒むことは出来ない。

「良いではないか」

ホーリアは満足そうに言って笑った。  
慌てるのはホーリアの部下達。

「ホーリア様…しかし、それではラーナ様が…」

と言つて説得するがホーリアはすっかりシャールを気に入ったようだつた。

「貴様等はもつと楽しむべきぞ、クックク…」

部下達に楽しめと言つた後、ホーリアは低い声で笑つた。

シャールの決意を。

イザベラの慈愛の心を。

それらをただ嘲笑つた。

唸るように低い笑い声が辺りを震わせる。

「法王様に伝えよつ、シャールを私の部下として採用することをな

やはつ懇のよつて低い声でホーリアは言つた後、身を翻した。

「行くぞ」

「御意、ホーリア様」

ホーリアの命令に頼いた部下達は静かに歩き、あつとこゝにその  
姿は見えなくなつた。

## 第五節・血染めのロザコフ（前書き）

煌めく瞳を見つめた。

何も知らない無垢で純粋な瞳だった。

少年達、お前たちはまだ知らないだろ？

お前たちの恐れを知らぬ心が更なる悲劇を生み出そうなんて考えた  
こともないだろ？

少年達、知らない今まで平和に過ぐせばよかつたのにあこがれの存  
在を失つた事による憎しみが止まりず暴走し始めてくるよつだよ。

それでも恐れないと言えるのかい？

なあ、君にはわかるかい？

残酷な結末を目の前にした者達の辿る結末もまた血に塗れた残酷な  
結末でしかないと分かつて進もうとしているのかい？

## 第五節・血染めのロザリオ

「…法王様、ホーリア様がお戻りになりました」

暗い広間で凜とした声が響き渡る。

「…大方シャー少年の事だらう」

シャールの名前が出たことに周りは驚いた。

「アクロイド・レイモンドの息子!」

アクロイドと同じくかなりのキレ者だと言う噂が広まっている。ホーリアが何故シャール少年を偵察しに行つたのか。

「シャー少年をどうするつもりなのですか?」

その疑問を法王は抑揚のない声で答えた。

「…ホーリアはシャー少年を手下にするつもりだらう」

その瞬間、一斉に声が上がる。

「…なつ!ホーリア様は一体何を考えておられるのか!」  
「我がアルディ家の中に穢らわしい者共を誘つとは!」

ホーリアの行動が読めない魔術師達は焦りと苛立ちから口々に彼を罵る…法王も頭を抱えてしまった。

宥めようにもホーリアの行動が読めない。

彼にとつてシャールは邪魔な存在である筈なのにじつじつこのよつ  
な事を。

(…兄上、貴方は何をお考えになつておられるのですか)

疑問は次々と浮かんでくるが、名前だけの口ではホーリアに意見等  
言える筈がない。

「アイシア様、どう致しましょつか?」

幹部達の問いに法王・アイシアは険しい表情を浮かべながらも凜と  
した声で言い放つた。

「…ホーリアをここに連れて参れ

若々しい顔立ちとは裏腹に法王らしい威厳の籠つた声で命令を下し  
た。

：ホーリアと法王達の亀裂がどんどん広がっていくのみだった…。

＊＊＊＊

野原で語らつれディシアヒシャール。

「大丈夫なの?」

心配そうなレディシアの問いかけにシャールは曖昧に笑うだけだつ  
た…彼はレディシアに嘘をついていた。

アルディ家に行くのは父親の死を追求する為だけではないからだ。  
もつと、もつと先の目標の為にアルディ家に潜り込むのだ。

後戻りできないところまで進んでいて、どんどん冷酷で孤独になつ

ていく。

(レディシアには笑つてほしいんだ)

何も知らないでいい。

無垢な少年の煌めく瞳の輝きを奪う事などしてはいけない。この少年に話すと言う事は共に墮ちてくれと言つていいようなものだが、もしも……もしも、目的を話したら少年はどうするだらう。

……もしも、彼にこの手を差し伸べたら……。

幼いながらに禁を犯す事に対する後ろめたさと逃れようもない快樂を覚えた。

いつそのこと、奪つてしまおうか。自分の未来を映し出す黒い闇の中へ引き摺り込んでしまおうかとも考えてしまつ。

憧れだつた父親と親しみを感じ、尊敬していた男女を奪われたシャールの心は酷く歪んでしまつた。

この歪みを忘れさせてくれるのはレディシアの穢れのない瞳だけだった。

しかし同時に激しい衝動を覚えてしまつ。

滅茶苦茶にしてしまいたい。

負の衝動とそれを止める理性が入り乱れて激しい葛藤が続き、思わず眉間に皺を寄せてしまつ。

「…シャール？」

レディシアはシャールの内なる葛藤に気付くはずもなかつたが、やはり彼の様子が可笑しい事には気付いたのか、首を傾げながら問う

掛ける。

ドキリ。

シャールは動搖してしまい、心臓が激しく動くのを感じた。  
…レディシアは優れている。相手の心を鋭く見抜く能力を持つている…不幸な事に。

アルディ家にはそのような人間は邪魔なだけだろうと思った。何故ならばアルディ家が求めているのは使い勝手のいい抗う術を持たない非力な存在だからだ。そう、血に塗れた上でアルディ家は成り立っている。それは仕方ない、全てを形成する上で血を流す事は多かれ少なかれ必要なのだ。そして重要なのは血を流す多くの儂い存在だ。

抗う術を持たず、感覚が麻痺しきったか弱い存在が欲しいのであって心を見抜く能力を持つ存在は邪魔なのだ。

…相手の思惑をも見抜き、崩壊させる力を持つているからだ。

アクロイドはどうちらなのだろう。

抗う術を持たないか弱くて脆い存在なのか、それとも…。

「イザベラ様に言つたの？」

踏み入れてはならない領域に踏み込んでしまったかもしれないと思惑を感じたのかレディシアは気を取り直して話題を変えた。

先程までイザベラの元にいたシャールは突然飛び出してきた。偶々そこにいたレディシアに「いつもの場所へ行こう」と誘つたのだ。勿論、レディシアがシャールの誘いを拒む理由などなく何の躊躇いもなく頷いたが、イザベラが心配しているのではないいかと心配して

いたのだ。黙つて出てきたなら即座にイザベラの元へ連れて行かねばならないと感じていたが、心配は無用だった。

「母さんは知つてるよ」

淡々とした声で返答してきた。

「…や、 ううなの」

レディシアはホッとしたと同時に新たな不安を覚えた。淡々としたものだったからだ。明るく調子に乗つて余計な事を洩らす彼はどこに行つてしまつたのか…彼はどこじてしまつたのか。

（分からぬよ、 シャール……）

シャールの変わつていぐ姿を見るのが苦しかつた。  
唯、 苦しくて辛かつた。

\* \* \*

「…シャール少年はどこにいるのか」

殺風景な村を通り過ぎて刑場へ向かうのはホーリアである。

「法王が私を呼んでいたみたいだが…後にしよう。今は…アクロイドの息子を揃んでおきたいのでな」

唸るような低い声で笑いながら足音一つ立てずに進んで行く…幼い子供等はいつたいどこにいるのか分からぬが時間は十分にある。何せ子供なのだ、そんなに遠くにはいかないだろ。

アクロイドの息子であるシャール・レイモンド…アクロイドが命を

懸けて守り抜いた息子だ、あの誇り高くて権力に屈しなかったアクロイドが権力に屈して殉死した何よりの理由は幼い息子だ。

「……子供の為なら命をも懸ける事が出来るものなのか？」

ホーリアの脳裏には疑問が浮かんでいた。アクロイドは死をも恐れずに息子達を守り抜き、己の消滅と共に全てを葬り去った事に疑問等が浮かび上がる……どうしてこうなるのか分からぬのだ。

「両親とはそういうものなのか？」

もしも両親が子供の為に命をも懸ける事が出来るとするならば自分は……。

「私は……」

ホーリアの顔に陰が差す……先程までの爽やかな青年の顔は何処につたのだろう、その表情は絶望に満ちていた。

虚無、虚無、虚無……広がっていく底のない無の表情。誰も見る事の出来ない無の表情、何も映さない虚ろでおぞましい表情がそこに浮かび上がる。

「……母上」

抑揚のない声が徐々に広がっていくのみ。

カツ、カツ、カツ……。

雑草を踏みしめながら揺り揺りと漂つて森を歩いていく。

\* \* \* \*

「レディシア、もう遅くなりそうだね」

あまり空が見えない森の中で座つて話していたレディシアとシャル。空がほとんど見えない状況でも時間が分かるようになつたのは幼いころから森の中で遊んでいたからだ。時には虫を捕まえたり花を摘んでは指輪や冠を作つたりしているので自然と時間が分かるようになつたのだ。

「うん、シャル、大丈夫なの？」

意外と鋭い少年の気遣いにシャルは笑いながら頷いた。この笑顔も少年には作り出したものなのではないかと思わせてしまうのだろうかと一抹の不安を覚えながら立ち上がり、歩き始めた。

「…何かあつたら言つてね…僕、シャルの力になりたいんだ」

レディシアの心配そうな目にシャルは相変わらず何も言わずに頷いた。

その後は特に会話をすることもなく黙々と自分達の家を目指して歩いていた…不気味なほど真つ暗で何も見えない。

レディシアは懸命に恐怖心を抑えながらシャルの歩調に合わせて進んで行く。置いて行かれまいと必死にシャルの歩調に合わせて進んで行く。

カツ、カツ、カツ…。

2人の歩調とは明らかに違う…革靴特有の音が反対側から響いてくる。

「…?」

レティシアとシャールはその音に気付き、警戒しながら進んで行く。もしかしたら悪党なのかもしれないと身構えながら進む。シャールはレティシアを庇うようにして前に出て進みながら革靴の音の主を確かめようと音を潜めて進んで行く。

「……シャール・レイモンドか?」

ぴたりと止まり、低い声が彼らに向かつて問い掛けている。

「……誰なんだ」

謎の声には答えずシャールは警戒心を剥き出しにしながら問い掛けた。

「……そこにはシャール・レイモンドとレティシア・キースだわう?」

再び問い合わせながら声の主は徐々に姿を現す。

ザ…ン。

風の流れが一瞬にして止まつたような気がする。

2人の少年たちは風の流れが止まり、時間さえも止まつたような感覚に陥り、目の前に現れた男をじっと見つめる。

気品を感じられる物腰と穏やかな口調。しかし、彼を取り巻く穏やかな空気とは裏腹に隙のなさをひしひしと感じる。

「お前が、アクロイド卿の息子かな? シャー少年」

嘘を許さぬ鋭い目…」の目を前にして嘘を囁つ事はシャールにはとても難しいよつて思えた。

「…ええ、シャール・レイモンドです」

彼らよりも何センチも高い男に向かつて答える。その様子に満足そうな表情で頷きながら薄く笑みを浮かべて彼も名前を囁つ。

「……そうか。私の名前はホーリアだ…本名ではないがな」

本名ではない名前をシャールに向かつて言つた後、じつとシャールを見つめていた。

一番会つてはならない人間と会つてしまつたのではないかとシャールは息をのみながら鋭く切れた目を見つめ返した。

目をそらしてはいけないような気がして、シャールは恐れながらもレディシアの手を強く握り締めてホーリアと名乗つた男の目を見つめた。

全てを凍りつかせる事が出来るのではないかと思わせるような鋭さがその眼差しにはあつた…全身から放たれる穏やかな雰囲気とは裏腹な凍てついた眼差し、目の前の人間の真の姿を映しだせずにシャールは戸惑つていた。

やがて男の方から目を逸らし、シャールの方に歩み寄つて空いるもう一方の手を握り締めて

「君とは近いうちにまた会うかもしれないから一度確かめてみたかったのだ。突然話しかけて済まなかつたな」

そう言つて手を放して、背を向けて去る前に一言

「また会おう、シャー少年」

しばしの別れ際の言葉を彼に向かつて言い放つて立ち去つた。  
シャールは呆然とその後ろ姿を見つめながら先程ホーリアに握られた手をポケットの中に入れた。

人間味を感じない冷たい手の感触が生々しく残つていた。

「…あの人、どうしてシャールの事を知つてるのかな」

レディシアが不意にシャールに向かつて疑問を投げかけたが、シャールは呆然としたまま答えなかつた。ホーリアに近づけばアクロイドの事が全てわかるのではないかと彼は思い、その思考に捉われて動けなかつた。

そして、ホーリアの姿には常に漆黒の闇が漂つてているような気がしてならないとも感じた。

「…せよ、彼は危険だとシャールはぐくつと瞳を飲み込んだ。

「…帰るよ、レディシア」

一刻も早く此処から立ち去りたいと感じたシャールはレディシアの手を引つ張つてずんずんと早歩きで帰路を辿つていた。

＊＊＊＊

「…あれが、シャー少年」

成る程、確かにアクロイドよりもキレている。

彼は自覚がないのだろうが頭の回転は普通の少年よりもずっとといふ気がした。少年ながら思わず尊敬の言葉を洩らしたくなる。

そしてあの瞳。

絶対的な権力に敵わないと絶望しながらも必死に抗おうともがいでいる。彼の瞳には憎悪と正義という相反する光が交錯していた。

「出来つけはならなかつたのかもしけない」

私もお前も別々の世界で生きて行かなくてはならないのかもしけない。逆転した世界で生きる己と少年が今、同じ世界に降り立とうとしている。

「アクロイド卿、貴殿の息子も貴殿と同じ結末を辿るうとしているぞ？貴殿の想い…無駄になるかもしけないな」

残酷な結末を前に少年はどう出るのだろうか…アクロイドのようにな逃れるために死を選ぶだろうか。それとも彼は死をも恐れず戦うのだろうか。

どちらにせよ、悲劇は終わらない。

「…本当に、また会うのかもしれない」

恐らく彼は己にとつて恐れるべき存在であり、尊敬すべき宿敵ライバルかも知れない。銀色に輝く髪の少年の端正な顔を森の中にひつそりと佇む廃墟の教会の中で一人ホーリアは物思いに耽つていた。もう決まっているけれども。

「あの少年は私の部下だ」

そして宿敵であり同志だ。

ホーリアはフツと笑つて持つてきただ紙とペンを取り出して書いた。

推薦状に『採用』と。

そして彼は振り返つて下を見て、一つ転がつてゐる血染めのロザリオを手に取つた。

そのロザリオは血に染まつた己の歩く道を忠実に表現してゐるようにも見えて仕方なかつた。

「…そこにいるのだね?」

ホーリアはロザリオを拾いあげると声をかけた。

「気が付いていたのね」

帰つて来たのは甲高い女の声だつた。

「義母上、私の事は何もかもお見通しなのかな?」

挑むような口調で問い合わせると女はヒールの音を響かせながら笑つた。

「分からぬいわ、何でシャールを引き入れようとするのか

分からぬいわ、何でシャールを引き入れようとするのかながらホーリアに向かつて更に言つた。

「ホーリア、シャールに何を期待しているのかしら？」

甲高くて冷酷な声が響き渡る。

ホーリアはそれには答えず、姿を現した女に推薦状を渡して言った。

「あの少年は偉大さ、アクロイドよりもずっとな

確信を得たような言葉に女はさも可笑しいと笑いながら推薦状を受け取つて言い返した。

「ならば明日、アルディ家に連れて来なさいよ。見せてもらひや、貴方の確信とやらをね」

相変わらず冷酷で勝気な女の甲高い声が響き渡るが、ホーリアは何も言わずに女の顔を見つめていた。

## 第六節・嫌悪（前書き）

何故繫がつてしまつ。繫がつてほしくなかつた。  
僅かな空間だけでもいいから此処にいたかつたのに。  
繫がつてしまつたらもうどこにも居場所がない。  
知りたくない、認めたくない。  
そして、出会いたくない。  
願わくは、時間よ、止まれ。

永遠に時間が止まつて進まなくなればいいのに。

## 第六節・嫌悪

運命とはとても恐ろしく、悲しくて憎いものだつた。出会いは突然に訪れる。

何故、お前と会つ事になるのだろう。

(……イリア)

＊＊＊＊

「法王よ、失礼した。少し用事があつてな」

ホーリアは法王の君臨する部屋に入り、対峙する。

「…大方シャールの事でしょう、兄上」

法王も元を辿れば彼の弟である、兄である彼の行動を理解できず首を傾げていた。理解したいのに出来ず問い合わせる事も出来ず彼は悲しかつた。

「ああ、シャー少年の事だ」

迷うことなく答えた兄の顔はこの上なく悪魔に近い。

「シャー少年はまだ10歳だ、貴方の部下にするという事は事実上最高幹部になると言う事もある。貴方には分かっているのですか」

法王は思わず立ち上がりて兄に向かつて叱咤したが兄はその叱咤さえせせら笑う様に言い放つた。

「10歳? 私には関係ない事だな」

「兄上!」

法王は言葉を遮りつつ叫んだが無駄だった。

「ほひ、お前は私に命令するか。まだ5つだった私を平氣で捨てた色狂いの母に軽蔑の言葉さえ言えないお前が?」

「……兄上」

「母やその息子であるカインはシャー少年を大事にしていたと言つではないか……クックク」

低く、冷たく、唸り、己をこの世に生んだ母や母に関わる存在全てを罵るよつに彼は笑う。

「壊してやるが、カインの大事なものを全て奪つて壊してやる。愛する存在も全て壊して孤独と言つものがどんなものかを存分に味わうがいい。あんな、色狂いした母の息子など無様な姿を晒して破滅すればいいんだ」

そして彼はギリッと歯軋りを少しして法王に向かつて牙を剥く。

「邪魔をするなよ、アイシア・エルヴィ・ノール」

「……兄上……」

法王の呴きも虚しく兄であるホーリアには届かない。牙を剥いた後、呆然とする法王を一瞥して彼は黙つて身を翻して謁見の間を去つた。

「兄上……貴方の憎悪はいつか貴方自身を破滅に導くのに、何故それに気付かないのですか?」

止められなかつた。止める事すら出来なかつた。

兄が憎むと言つなら己も憎むつゝ、兄が邪魔だと言つなら排除しよつゝ、  
彼は口に出してこそ言わなかつたが幼かつたあの日から兄に忠実で  
ありたいと思つていた。だから強く言う事も出来なかつた。  
血は通つていなければ彼は自分にとつて慕つべき唯一人の兄だ。  
でも、兄は知らないのだ。

「無知は罪と、貴方が私に向かつて言つた」

兄は母やカインに心を奪われてしまつた事を知らないままなのだ。  
彼は自覚なしに母やカインに愛してほしいと請うつてい  
る事が出来るなら、変わつてほしい。  
兄に愛する事を知つて欲しい、カインや母を愛して欲しい。  
それが出来ないなら、カインだけでも愛して欲しい。

「兄上、それは……」

＊＊＊＊

「くそつー！」

法王であるアイシアは最近己に対しても煩い。義理の弟であり  
ながら己がつくばずだつた法王の地位を奪われたがその事でアイシ  
アを恨んだ事もない。法王の地位など必要ない、欲しいならくれて  
やる。

ただ、許せないのはアイシアに「己の心を見抜かれ、踏み込まれる事  
だ。

「… ラーナの息子だからああなるのか」

ラーナ。その名前にホーリアは忌々しさを覚え覚える。

ラーナは己の叔母であり母の親友だった。近くにいながら自分に向かって手を上げる母や色狂いになつた父を止めなかつた事が忌々しかつた。

何度ラーナに助けを求められても「私は何もできない」との一点張りだつたラーナが許せなかつた。

そのくせあの女は人の心をまるで自分のもののように詳細に読み取つて入り込む。

不気味でミステリアスな女。

「ラザニア・エルヴィ・ノール。あの女には相応しい名前ではないか」

そう、あの女は女神のように笑いながら近付く人間を虜にしていらなくなつたら平氣で人を斬り捨てる。「己もいつあの女に斬り捨てられるのか分からぬ」

「たくさんだ、振り回されるのもかき乱されるのも

あの女も数か月前に死んだとされるカインの両親に振り回されるのも。

…愛する事も全て疲れてしまった。

「伯父が死んで、私の心は渴いてしまつた」

初めてだつた。孤独で無知な自分を慈しんでくれたのはあの伯父が初めてだつた。勿論あの伯父の正体も知つてゐる、恐らくあいつも知つてゐるだろつ。

「シリウス…何故お前は私を引き取つた、お前は私に何が言いたかつた」

ホーリアは一人で問いかけながら目を閉じて思い出していた。数ヶ月前、彼はいつも通りに伯父のいる離れの部屋へ向かい、惨劇を見たあの日を。

\*\*\*\*\*

「伯父上、私です」

いつものように呼んでくれた。

『お帰り、ホーリア』って呼んでくれたから、今日も優しい声で呼んでくれると思っていたのに。

「……伯父上、私です、ホーリアです、いらっしゃるのでしょうか?」

何度もドアの前で問い合わせる。

（伯父上、私を呼んで?）

期待を込めてずっと待っていたけれど、いつまで経っても沈黙が続くだけで返事が来る事はなかった。

如何して来ない?

何故返事をしてくれない?

ホーリアはすっかり焦ってしまった。混乱し、わけが分からなくなつてしまつ。

どうしたらしい?と誰かに助けを求めるくなる。

でも、誰も助けてくれはしない、誰も手を差し伸べてくれはしない。親さえ自分を放り出して逃げ出したのに赤の他人が厄介な自分に手を差し伸べるものか!ホーリアはそう思い、かぶりを振つて取つ手

を回して開いた。

「……あつ……な、何で……！」

ホーリアはガタガタと身を震わせながらその場に膝をついた。目の前に広がる凄惨な光景、漂う血生臭い香り、流れ落ちる赤く真っ直ぐな筋。

「シリウス……」

体を震わせながら彼はただ恐れた。

「シリウス、何故こんな事に……！」

目の前に広がる真っ赤な光景はまるで彼の進む道を示しているかのよう。

「……こんな事なら、孤独で良かつた……孤独なまま、この家に絶望しておけば良かつた……シリウス」

救い出して、置き去りにして一人で死ぬ位なら。中途半端に手を差し伸べないでくれ、置き去りにして死ぬ位なら救い出さないで孤独なまま彷徨つた方が良かつた。

「シリウス——ツ……！」

泣いた。絶望と、悲しみと、孤独に耐えきれずに泣いた。シリウスが何故死んだのか分からぬけれど、置き去りにされた事が辛かつた。

思い切り泣いた後、フラフラと立ち上がって部屋を立ち去ろうとした。

た時だった。

「……セイシエル、何をしているの」

「……ラーナ様?」

いつの間に部屋から入って来たのだろう。金色の長い髪を靡かせながら暗い部屋の中に佇んでいた女がしゃがみ込んでいた口をじっと見下ろしている。

「何で此處にいるの、やには許可されていないわよ」

いつもと同じように響く厳しい叱責の声がセイシエルにはいつも聞く彼女の声と一線を画していて混乱してしまった。

憂い、悲しみ、苦悩…それらが多分に含んでいたような声だった。

「申し訳御座いません」

混乱してしまった口から咄嗟に出たのは謝罪の言葉。何かいけない事をしたら叱責を受ける、罰を受ける。少しでも受ける罰を軽くするために跪いて許しを請つ。彼にはそれしか術がなかつた。

「出で行きなさい」

何も言わずに彼女はいつひつた。

セイシエルはオロオロしつつも彼女には逆らえず走つて部屋から飛び出した。

\*\*\*

考えないようにしたけれど口を閉じればあの時の光景が浮かび上がる。『えてもらえる筈の無いものを求め過ぎて心が渴いてしまった。

正体の無い、けれども確かなもの。それだけが欲しかった、寧ろそれ以外欲しくなかつた。

「何で求めてしまつのかな」

1人呟いてホーリアは目を閉じると規則的な呼吸をして眠りに落ちた。

まだ終わらない、求めるものを得る事すら出来そうにない。ただ、待つてるのは虚無だけだつた。

闇に呑まれてしまうような気がして、底無しの穴に落ちてしまつような気がして、全てを真つ赤に穢してしまつような気がして。心は荒れ狂うほどに求めているのに、無理をして抑制しようとする。己の女々しさと精神的な脆さに嫌悪し、それに苛まれながらホーリアは意識を手放した。

ガチャリ。

ホーリアが眠つている部屋に入る者がいた。

「ホーリア」

規則正しい呼吸をしながら眠つているホーリアの前に現れたのは彼が恐怖し尚且つ嫌悪する女であつた。

「貴方の母親にそつくりね」

穢れの無い寝顔を見ながらぼつりと呟いた。

もういなくなつた彼の母親に瓜二つの表情を見つめながら悲しそうな顔をしていた。

「ねえ、ホーリア」

悲しそうな声を発して彼女は言葉を紡ぐ。残酷で、恐ろしい結末を。

「シャー少年は何れ死ぬわよ、貴方が密かに希望を託そつとしていた天才少年はね」

シャーールはアクロイドの掴んだ真実を掴もうと背中を追いかけている。もう、彼は後戻りできない。

いや、彼もホーリアも誰もかも後戻りできないところに来た。

「ホーリア、それでも貴方は求めるのかしら？・愛情を」

その問いかけにホーリアは答えずに眉を寄せながら眠つているだけだった。その様子に彼女は真つ赤な唇を薄く開いて笑つた。

「鳴けないカナリア」

心では求めていても表に出す術を知らずに佇むだけ。心はこんなにも鳴いているのに誰も聞き取る事が出来ない。

綺麗な声で鳴く事が出来ないカナリアはいつになつたら己の心を認める事が出来るだろうか。

微笑んだまま彼女はホーリアの部屋を出て行つた。

まだ夜は明けない。

彼は気付かないまま、広がつている安らかな闇に意識を預けていた。

＊＊＊＊

「起きて下さいまし」

何だ、この声は？

声にならない声で問い合わせて、ハツとして考えた。

あの女の侍女かも知れないと思い、煩わしい手を振り払った。

「お兄様、起きて下せいまし！」

「お兄様？ ではあの女の侍女ではない。じゃあ誰なのだ？

ホーリアは声にならない声で問い合わせてみるとやはり聞こえるはずもなく、心地良い眠りから目覚めて軽く辺りを見回す。

「お兄様、やつと起きて下せつたのですね！」

左横を振り向いた時、金色の髪を靡かせた少女が笑顔で此方を見ている。

「……君は？」

「どくさん、どくん。

心臓が激しく高鳴つておさまらない。聞きたくないのに何処か心地良い声が骨の髓まで染み渡る。

ああ、この声は……この声は。

「私？ イリアと言います。宜しくお願ひしますわ、セイシェルお兄様！」

少女は相変わらず無邪気に笑つて名前を言つた後、迷つことなく手を差し伸べる。

「……宜しく、イリア」

心臓は鎮まらない、寧ろ早鐘のように鳴り続ける。もう抑え切れない、この激情は。

（母上……シリウス……カイン！）

繫がつてしまつた輪はもう壊せない。

ホーリアは完全に自分が孤独になつてしまつた事に気付き、抑え切れない憎悪と悲しみで顔を歪めたが幼い少女には何故彼が顔を歪めるのか分からず、ぽかんとした表情で見つめていた。

## 第七節・逆転世界（前書き）

元々は交わるはずの無い世界。

綺麗で眩しい箱庭のような世界にいた僕らは、突然暗く醜く残酷な世界に降りた。

否定しないで、その道を選んだのは紛れもなく僕達だった。

君の心の欠片でも理解出来たら、こんな世界、何も怖いものはない

のこ。

苦しいよ、君の心が全く見えないんだ。

置いて行かないで、破滅でも構わない、一緒に連れて行つて。

## 第七節・逆転世界

「貴方はイザベラ・レイモンドですね?」

シャールの家に突然やつて来たのは黒服の男達だった。

「ええ、貴方達は?」

イザベラは警戒している様子を隠すことなく黒服の男達に向かって問い合わせる。この男達の正体には薄々気付いていたが一応聞いてみる事にした。

「我々はホーリア様から派遣された者です」

「ホーリア……セイシェル・ドウ・アルディ様ね」

「おや、よくご存じで」

「カイン様の父親違いの兄ですものね、セイシェル様は」

「流石はイザベラ・アルベルト。我々の下についていたアルベルト家の娘だけはある」

「甘く見ないで頂戴」

イザベラは黒服の男達を睨みつけながら言い放つた。

彼女は元々そこそここの地位についていた貴族の娘だったがアルディ家の策略によつて吸收され、地位を失つた。

両親も親戚も彼女は失くした。絶望し、命を断とうとした時に偶々出会つたのは当時はまだ院長の助手を務めていたアクロイドだった。そのアクロイドもいなくなり、彼女は再び孤独になつた。

本当はシャールをアルディ家の幹部に渡すつもりはなかつた。幼い彼には真つ当な道を進んで欲しかつた。このよつた歪な中でなく、無邪気な子供でいてほしかつた。

「さて、貴女の御子息であるシャール・レイモンドを此方に渡して頂こつ」

「ええ。言われなくとも」

シャールは諦めたりしないだろう。アクロイドを取り巻いていた環境を知る事を、アクロイドを破滅に追いやった者達を打ちのめす事を、アルディ家に踏みにじられた事に対する報復を。彼は誰が説得しても聞き入れたりしないだろう。

「シャール、出でらつしゃい」

レディシアと野原で遊び、家に帰っていたシャールを呼んだ。

「なあに、母さん」

何も知らない可愛い子供の声を聞いたイザベラは胸が痛かった。

「誰、ですか？」

やや小走りで玄関に来たシャールは黒服の男達を見上げながら恐る恐る問い合わせたが、薄々は何者なのか知っていた。

男達もシャールが自分達の事を把握している様子を見て

「君には今からアルディ家に来てもらいたいんだ」

淡々とした声で端的に言った。

「分かりました」

シャールは頷き、あっさりと同意した。近いうちにこうなる事は分かつていたが、思いのほか早くて少々戸惑つてしまつたけれど。既に手荷物を持つており、行く準備は万端だ。父親の身に着けていたネクタイピンを握り締めて黒服の男達の元へ駆けて行く。

「母さん、行つて来る」

「いつてらつしゃい、シャール」

いつものように言葉を交わし、シャールは男達と共に玄関を出てアーリディ家に向かつてゆっくりと歩き出した。

道中は無言で、機械的に足を動かしていた。がつちりとガードされながら歩く様は非常に惨めで自分には何をする権利もないのかと更に苦しくなつたがそれでも無表情で唇を噛み締めて歩いていた。無意識に手を強く握り締め、自分よりも遙かに高い男達を睨み上げた。

「…シャール・レイモンド」

「何でしじう?」

自分を囲つていた男の一人から声を掛けられ、シャールは少しだけ上擦つた声で返答した。

「疲れたか?」

思わぬ問い掛け。

シャールはどう答えていいか分からず口を泳がせていた。

「答える事が出来ないほど疲れたみたいだな、シャール・レイモン

「ド」

シャールが何も言わないので肯定と受け取った男は立ち止まり、振り向いた。

「なかなか凛としてるな。普通はもっと疲労している筈なんだがそこはやはりアクロイドの息子だな、彼もそんな風にしていた」

アクロイドの事を知っているようだ… シャールは目を見開いて男の話を聞いた。自分達の知らないアクロイドを知っているのだ、聞きたくて仕方なかつた。

「彼はなかなか優れていて尚且つ誇り高い人物だつた。惜しい男を失つたものだな、我々は」

「…何故、知つているのですか？」

シャールは思いきつて男に聞いてみた。すると男はフツと笑つて言った。

「彼はアルディ家でも最高の位置についていた。大抵の人間は知っているからお前の事も知つていて。アクロイドと同じくキレ者で侮れない少年と」

「…」

男の言葉にシャールは神妙な顔つきで聞いていたが、彼は沈黙したままのシャールに向かつて手を差し出した。

「俺はアベル・オージリアス・マクレーン  
「アベル・オージリアス・マクレーン…殿」

シャールは恐る恐る彼の大きい手を握り締めた。

すると黒服を身に纏つていた他の男も彼の方を向いて次々と名乗り

始めた。

「俺はラルク。こっちがルディアスにルキリス」

ブラウン色のショートヘアの男は隣にいる赤髪の男と赤色と茶色が混じつた長い髪を靡かせた女を紹介した。

3人ともアベルの補佐として同行していたらしく、一言も発しなかつたのだ。自分を連れてくるのはあくまでもアベルらしい。

「シャー少年って呼ばれているんだよな、シャー少年、もう直ぐつくから歩いてくれよ」

「あ、はい」

ルディアスとルキリスは会釈をしただけで直ぐに進行方向を向いたがラルクは笑顔を浮かべながらシャールを気遣っていた。

人当たりのいいラルクにシャールは幾らか心を落ち着かせ、頷いてまた歩き始めた。しかし、幾ら人のいい笑顔を浮かべても彼等はシャールとは反対側の世界に住んでいる人間達だ。いつかは対峙しなければならない。

もう戻れない。

逃げる事も許されない虚無の地へ向かおうとしている。

対峙しなければならない幾つもの残酷なシーン。

知らないと言つて投げだす事はもう許されないのだ、自分には。

自分の目の前に広がるのは、やはり真っ赤に染まつた残酷な世界、そう思つと再び悲しみと怒りが込み上げ、表情が引き攣る。

沈黙が訪れ、誰も言葉を発することなくアルディ家へと向かつた。機械的に動く足に感情を失つていく様はやはり歩くことだけを覚えさせられた人形のようだった。

気がつけばもう大聖堂が見えていたのだ。

「大丈夫か、シャール」

問い合わせたのはラルクだった。シャールは首を縦に振つてラルクに答えた。

「もう直ぐホーリア様と謁見する。粗相のないようにな」

今度はアベル、これにもシャールは首を縦に振つて答える。シャールが答えたのを見た4人はシャールをガードしながら大聖堂の入り口まで急ぎ足で向かう。

がやがやと騒ぐ声も祈りを捧げる歌もシャールには全く耳に入らず、全身の神経が大聖堂の入り口に集中していた。それ以外何も見えない、聞こえない。

アベルが扉の取つ手を握り、それを引いた。

「入れ」

淡々と指示するアベルと呆氣無く開いた扉にシャールは脱力しそうになつたが、まだやるべき事は残つていると気を引き締めた。

そしてまた機械人形のように足だけを動かしてアベルについて行った。

「ホーリア様」

気がつけばアベルと自分は何処か隔離された場所にいた。今まで何も見ずにただ歩いていたのだ、きっとかなり歩いたのだろうが不思

議と足は痛まない。

何だらう、この感覚。

「アベルか、その様子ではシャー少年を連れて来たのだな。お前はもう下がれ、私はシャー少年と二人で話がしたい」「了解しました。シャール・レイモンド、早く入れ」

アベルはシャールに入るよう促した直後、踵を返して颯爽と去つて行つた。

「……どうした？早く入つてくれ」

向こうはかなり苛立つているように聞こえる…シャールは慌てて取つ手を握つて回した。

「失礼します」

一言発した後、彼は恐る恐る中へと入る。

息が詰まるほど苦しく辛い…少しでも気を緩めたらその場で倒れそうだ、それ位緊張している。一方、シャールの硬直した様子を見たホーリアは不敵な笑みを浮かべながらゆっくりと口を開く。

「優秀な君にまた会えるとは。私はとても嬉しいぞ、シャー少年」

ホーリアの様子は言葉通りだつた。純粹にシャールにあつた喜びと宿敵と対峙する時の闘志で瞳をきらめかせ、彼はどんな行動に出るのかと楽しみにしていた。  
それがシャールにも分かるから更に緊張する。

「ホーリア様、私も貴方にお会い出来て光榮です」

やや上擦った声でそれだけが言えた。ホーリアは何の緊張もしておらず、余裕さえ見せながら自分を観察しているその瞳は己の心を暴きそうな程澄み渡り、今にも自分の心身を真つ直ぐと射抜きそうだ。

「申し遅れました、シャール・レイモンドです」

やつとの思いで名乗る事ができ、シャールはホツとしながら座つているホーリアを虚ろな目で見ている。しかしホーリアは既に倒れそうなシャールを余所に話を進めて行く。

「シャー少年、これから君には私の元で働いてもらひ。何、心配はいらないさ……部屋の片づけとか床掃除とか……そんなものだ、出来るだろう?」

「え、ええ……」

「……シャー少年?」

返事をした途端、目の前が薄暗くなつていいく。ホーリアの声も聞こえない。体が傾いていくのが何となく分かるが踏ん張る力は全くなかった。

「シャール」

完全に意識を飛ばし、倒れかけたシャールをホーリアが受け止めた。銀色のサラサラとした髪が伝わつてくる。人形のように動かないシャールの顔を覗き込むホーリア。目を閉じた彼の姿は紛れもなく子供、無垢で純粋な子供、10歳の子供とは思えないほど大人びていたがこうしてみるとやはり彼はまだ幼すぎたと思う。

「シャール…」

芽生える罪悪感と背徳感。無垢な子供を生贊にする罪悪感と穢れの無いこの少年が憎悪で壊れる姿を見る事が出来ると言つ歪んだ快感。壊れてしまえ、憎悪に狂い、絶望すればいい。

「……さて、少し寝かすか」

長い間機械のように足を動かし続けた彼の疲労は頂点に達したのか、一向に目が覚める様子もない。今はこのまま眠らせるのも悪くない、本当の地獄を見るのはこれからなのだから少しあらぎを取れなければなるまい。

ホーリアは自分のベッドにシャールを寝かせ、隅の方に丸めていた毛布を掛けた。

「お休み、シャール少年」

耳元で囁く彼は悪魔か、それとも…。

\* \* \* \*

「今日だつたのですか？」

中庭で花畠に座つて居る金髪の少女。童話の世界にいるのではない  
かとさえ疑つてしまつ。

「ええ、今日…」

レディシアは母の用事でアルディ家の最上階に来ており、当主から少女の遊び相手になつてほしいと頼まれたのだ。勿論断る理由はない、ましてや少女はアルディ家当主の娘、イリアである。

「お兄様の元に来る少年は私より幼いのに召使いになるなんて」「え、ええ…志願しましたから。アルティ家の元で働くのが彼の夢だったのです」

イリアはどうやら兄の下についた幼い少年…レディシアことりでは親友であるシャールの事を聞いていた。

興味があるのだろう、純粹に知りたいと言う瞳の輝き。レディシアにはとても言えなかつた。

シャールが此処に来た本当の理由は忠誠心でも何でもない、真実を晒し出して復讐すると云つものだ、そんなこと、とてもイリアには言えない。

「会つてみたいわ、名前は何と云つのかしづら」

ドキリ。

レディシアは一瞬顔が固まつた。

イリアはもう14だ。事情位分かるだろう…シャールの名前なんか出したら自殺したアクロイドの息子である事など直ぐに分かるだろう。そして彼の目的さえも。

「シャー…シャー少年、皆はシャー少年と云つておつまゆ」

「シャー少年?」

「はい」

不意に出た呼び名。

あながち嘘でもない。皆はシャー少年とは呼ばないがシャール少年とは呼んでいるのだから。ホーリアがシャー少年と呼んでいたがあれはわざとだわつ。

ホーリアはきつと見抜いている、その妹のイリアだつてきつと直ぐに見抜く。

「今度お兄様のところに行つてシャー少年に会つてもいいかつて聞こつかしい。私も彼と話したい。だつて有名なんでしょう？」

「え…」

またしても核心を突く言葉にレディシアはドキリとする。いや、イリアは絶対に気付いているだろう。アルディ家の最高幹部の1人が自殺しているのだから気付かない筈はない。

「シャー少年が羨ましいわ」

不意に出たシャールを羨む言葉に驚いてしまう。何故、シャー少年を羨む言葉が彼女の口から出るのかレディシアには分からぬ。裕福で恵まれた生活を送つている彼女の苦惱は分かるけれど、シャー少年を羨む事に繋がる理由が分からぬのだ。

「だつて、彼のお父様やお母様の愛情を感じるんだもの。シャール君はお父様の為に此処に來たのでしょ？お父様の為なら何だつてする、そんな覚悟をしないと此処には來ないなあと思つて。まだ10歳間近なのに此処に來るなんて普通は考えられないわ」

「……」

イリアのそんな言葉を聞いていたレディシアは不意に顔を歪めた。今、自分達のやつている事は彼女を含む全員を破滅に追いやるうとしているのだと直つ事を改めて思い知られた。

「レディシア、どうしたの？…暗い話をしてしまつて」「めんなさいね、でもどうしても言いたくて」

「え、ええ、大丈夫ですよ、イリア様」

イリアは慌ててレディシアに謝罪する。彼女のその声がますます自分の胸を搔き篭られるよつて辛かつた。

シャルを止めなければならない？

シャルの言う事を忠実に従わなければならない？

そのほかに何の選択があるの？

どうすれば憎悪で歪んだ彼を救える？

たつた6歳の彼に答え等見つかるはずもなく、頭の中はぐちゃぐちやだつた。ただ一つ分かるのは、行動するにも代償が伴つ事を知る。

（こんな世界にいなければ良かつたのに）

逆転した世界だつた。貧しくても人の心と対峙する場所と豊かでも人の心を踏みにじる事に何の抵抗もない欲望に塗れた世界。逆転し、絶対に交わる事のない世界がどんどん交わっていく。

降り立つてはならない世界に自分達は降りてしまった。

その代償は、きっと…。

## 第八節・贖罪～相反する感情～（前書き）

止められない憎しみが悲劇へと繋がりゆく。激しくて情熱的なこの感情、抑える術も知らないまま進んでゆく。出会わなければ良かつたのかもしない。

出会った瞬間、この目にはお前しか映っていない。

ああ、それが辛い、苦しい、可笑しくなりそうだ。

やがて、この出会いこそ悲劇の幕を開けるきっかけになるのだ。

## 第八節・贖罪～相反する感情～

「お兄様、そこそこいらっしゃるの？」

イリアは無邪氣な笑顔で此方に駆け寄つて來た。

「イリア」

取り繕つた笑みを浮かべながらイリアに応える。彼女の笑顔は眩しい、思わず目を逸らしたくなる程に。

眩しい程無邪氣なその笑顔が時々苦しくなる。

母を思わせる。

自分を置き去りにした母を思い出させる。

イリアが母の娘で自分の妹だと思つと、じわじわと湧き上がる底知れぬ憎しみと悲しみと劣等感、そして嫉妬心。  
自分は母に愛された記憶などない、疎まれ、恨まれ、憎まれた記憶しかない。

恨まれて憎まれた果てに逃げられて置き去りにされた。

この少女が苦痛に歪む顔を見てみたい、そんな事を考える自分は何処かひねくれてしまつたのかも知れないと思つ。

「お兄様、何の本を読んでいるの？」

不意に問い合わせられた私は困り果てた。  
本の内容など入らない、どんどん流されていく。

「哲学書かな」

わざと興味なさむつな口調で淡々と返す。  
イリアは田を輝かせて再度問い合わせた。

「どんな内容なの？」

ああ、そんな眩しい視線を私に向けるな。

お前やカインを憎んでいるのに、破滅させようとしているのに、や  
んな視線で、そんな笑顔で私に接するのか。

吐き出せない事が尚辛い、深すぎる憎悪を向ける事も出来ないから  
辛い、今すぐその場から立ち去つてくれたら、どれだけ楽になるの  
か。

「…ある心理学者が書いたものだ」

耐え切れない、苦しい。

どうか早く侍女達が来てイリアを此処から連れ出して欲しい。  
実の妹をそんな風にしか見れず、そんな風にしか思えない自分自身  
に嫌悪を覚え、こんなにも苦しい思いを抱くきっかけを作った母と  
伯父に対する憎悪が増す。

（でも、もう憎む対象を失つてしまつた）

母も伯父もこの世にはいない。此処に残された自分は誰を憎めばい  
いのか分からぬから母と伯父の子供であるカインやイリアにその  
憎悪を向けるしかなかつた。

分かつてゐる、カインやイリアには何の罪もない。偶々母と伯父の  
子供としてこの世に生を受け、生まれてきただけなのだ。  
そんなこと、分かつてゐる。

しかし心はそんな正論など通じない、どんどん憎悪が増していく。

(二) こんな世界にいなければ、カインやイリアを愛する事が出来たの  
(二)

「どうしたらカインやイリアを愛せる?」

「どうしたら彼等に憎悪を向けなくて済む?」

抑制できない憎悪、悲しい記憶が容赦なく追い詰める。

耐え切れず眉間に皺を寄せ始めた頃、漸くこの息苦しさから解放される時が来た。

コンコン。

「あら? 誰かしら」

イリアは立ち上がり、扉の方まで歩き、用件を尋ねる。

「イリア様、えっと……シャールです。今からお勉強の時間だから来ること」

「まあ……」

イリアはパツと扉を輝かせながら

「貴方がシャー少年?」

と、扉の向いのシャールに向かつて聞いてくる。

「ええ……」

「やうなの一会いたかったわ、入つて」

「……シャー少年、イリアが会いたがっている……入つてくれ

戸惑い気味のシャールの事など知らないでイリアは扉を開いて彼を招き入れる。

「イリア様、初めまして…シャールと申します、宜しくお願ひ致します」

「ええ、此方こそ宜しくね！」

イリアはシャールの手を握りながら目を輝かせている。勉強を口実に使える事を嬉しく思いながら彼女に向かって注意を促す。

「イリア、シャールとは後でゆっくりと話せばいいだらう…今は行つた方がいいと思うぞ、怒られたら困るだらう」

「まあ、お兄様はいつもきつちりしているのね

「私が怒られるのが嫌なだけだ」

「そうなの、お兄様の為に行つた方がいいわね。シャール、また後で話しましょう」

笑顔でそう言いながら走つて行く彼女の後ろ姿をシャールは相変わらずぽかんとしたまま見つめていた。どうやら私に妹がいるとは思わなかつたようだ。

「シャー少年、何だ」

「い、いえ…妹がいるとは思わず…」

「レディシアが親友なのに知らないとはね」

「…」

シャールは呆然としたまま立ち尽くしていた。

\*\*\*\*\*

ふわり、ふわり。

金色の髪を靡かせながら歩く1人の女。

「私には理解できないわ」

金色の髪に白い肌、形の整つた真つ赤な唇が言葉を紡ぐ。  
そう、ホーリアの叔母にしてはあまりにも若い女性。その名はラザニアことラーナ。

彼女はヒールの音を立てながら険しい道を歩いていた。

「悪く思わないでね、シリウス？」

徐々に計画は進行しつつある、アルディ家の邪魔になる存在は消す。必ず消さなければならない。

目指すはシリウスを匿つた人間、聖職者達だった。

ラーナは冷酷な笑みを浮かべながら進む、先へ先へ進む。暗黒へ、底知れぬ暗黒へ。

程なくして修道院が見えた。シリウスがアルディ家の監獄から脱走する際の手助けをした反逆者がいる場所。

彼女は見上げた。

「…哀れな子羊たち」

戦慄が走るほど冷酷な笑みを浮かべて裏方へ回つた。

悲鳴が木靈する。

次々と流れ落ちる血、傷付ける度に、斬り捨てる度に、本当は今にも狂つてしまいそうな精神。

いつそのこと狂つてしまえば楽だらうと、こんな時に限つて酷く冷静だった。

「終わったかしら？」

ラーナは返り血を浴びたまま、部下たちに聞く。しかしかえつて来た反応は決して喜ばしいものではなかつた。

「いえ、此処にいたはずの女が見つかりません」

「フレアが見つからないの？」

「はつ、如何致しましょうか」

ラーナはしばし考え、そしてこう言つた。

「行くわよ、ディアルト様に報告しなくてはね」

相変わらず冷静なまま、ラーナは再び来た道を戻つて行つた。

\* \* \*

ホーリアは相変わらず部屋について本を読んでいた。

シャルは苦しい状況になり、どうやってアクロイドの死の真相を探れば良いのか分からぬ。

予想以上にホーリアは強敵だ、きっと今だつて自分の考えなどお見通しだろつ。

不思議なのは彼がこの事について一言も発しないこと。

逆に不気味だ、何故問い合わせない？

「ホーリア様、床の掃除が終わりましたよ」

考えながらも仕事をするのは忘れない、適当にするのは嫌いだから。どうせやるのだから「えられた仕事はきちんとこなさなければ。そうするのは彼自身が中途半端な事は嫌いだという性格と一生懸命やることでホーリアが労いの言葉を掛けるだろつ…。

「シャルがいたら部屋が綺麗で落ち着く」と言つてくれて、役に

立つから手放すのは惜しいとか言ってくれるかもしれない。

圧倒的な力の差で足元になど到底及ばないから一生懸命」とえられた仕事をこなすことでの、役に立つ事で彼に向かって僅かな抵抗をしたかったのかもしれない。

「御苦労だった、シャー少年。疲れただろう、暫く休むと良い」

ホーリアはシャールに向かって労いの言葉をかけた。

「…どうした、早く休め」

立つたままのシャールにもう一度問い合わせる。

「あ、いえ。何でも御座いません、でも…」

「レティシアが心配かな？」

「え、な…そ、それは」

ホーリアにズバリと言い当てられてシャールは戸惑った。

彼は全て見透かしている。シャールは体を硬直させながらホーリアの顔を見ていた。

怖い、怖い怖い。

幾つもの刃に切り裂かれて包んでいたものがバラバラにされて白日に晒されそうな感覚を覚える。

いつそのこと、今すぐこの身体を切り裂いて跡形もなく消されてしまつたほうがいい。

こんな恐怖心を味わうくらいいなら。

「シャー少年」

「は、はい！」

ホーリアに突然呼ばれて慌てたシャールは上擦つた声で返事をした。

「復讐とは辛く苦しいものだ、解放してほしいとさえ思つ事だつてある。シャー少年、今のお前はまさしくそんな心理状態にある」

「どくん…どくん…どくん…」

シャールの心臓が五月蠅いぐらいに鳴り響く。自分の目的はおろか心理状態さえ言い当てた。

「何か言い返さないのか？シャール。お前の目的はアクロイドが自殺した理由、自殺に追いやつた全ての人間に裁きを下すことだらう？無知だつた自分自身にもお前は裁きを下そうとしている。言い返してみる、シャール・レイモンド」

穏やかな上司から一変して敵意を露わにしたホーリアの鋭い言葉にシャールは成す術がない、ただ彼に追い詰められていく一方だつた。何故こうなつたのだろう。

わかつていていたのに、ホーリアは自分の事などお見通しで、全てを見抜いていた事など分かつていたのに。

何も言い返せない、歯が立たない。ただホーリアに追い詰められていくしかない。

その時、ホーリアはシャールに近寄つて手を伸ばした。彼の手が伸びた先はシャールの頬だつた。

「…シャール、お前には復讐なんか出来ないよ。あまりにも優しすぎた」

シャールは声を殺して泣いた。

ホーリアに追い詰められて全てを晒されて惨めな思いをした。

父の死を知る事はあるが自分ではビリビリも出来ないことが悔しくて悲しくて堪らなかつた。

「シャール」

何故かは分からぬ、ただそう感じるだけだ。

まるでホーリアがシャールを慰めていたような感じがする。

「お前なんか嫌いだ、ホーリア…！」

するい、散々傷つけておいて最後にはこうして救いの手を差し伸べる。

こいつは悪魔だ。

勝てないなんて考えたらいけない、そもそも10歳の子供がアルティ家の長男と互角に戦える筈もないのだからそんなこと考えたらいけないけれども。

（勝てない）

勝てないと思つた。

＊＊＊＊

「既にうしてあんなに厳しいのかしら…」

イリアは分厚い本を3冊抱えて部屋に帰らうとした。彼女の部屋は中庭を通つて反対側の城の扉を開けて螺旋階段を上つた直ぐ近くに部屋がある。

兄とは対照的に明るくて文句のつけようがない程素晴らしい部屋だつた。部屋の扉を開けて真っ先に机に向かって本を乱暴に置くと呟いた。

「お兄様もこっちに来ればいいのに。あんな薄暗い部屋にいたら可笑しくなっちゃうわ」

彼女はまだ知らないのだ、兄は来ないのではない、来れないという事を。

兄の黒く染まつた憎悪を彼女はまだ知らずにいたのだ。

「さて、外に行きましょう」

直ぐに走り出し、扉を乱暴に閉めて外に飛び出した。

近くの中庭はとても広いので子供達も遊んでいた。しかしイリアがふと見たその先には、遠くから見ても分かるほど美しい中庭とは似ても似つかない光景が広がっていた。

3人のしつかりした体格の少年が今にも倒れそうな程傷ついている1人の少年に向かつて暴力を奮っていた。

イリアは一気に怒りがこみ上げ、少年を助けなければという使命感と共に走った。

「お前、最近生意気なんだよ」

「そうだよ、皆より優れていますからって調子乗ってるんじゃないよ！」

「この卑しいやつめ」

育ちのいい騎士見習いの子供が3人位で1人の少年に向かつて水をかけたり蹴り飛ばしたりしていた。少年は唇を噛み締めて暴力に耐えていた。

「う……」

散々殴つたり蹴つたりした為か少年はうめき声をあげて蹲つた。此れ以上暴力を振るつたら彼等の将来も危ないだろう。

「何をしているー。」

怒声が聞こえて來た。

「げ、あれはアルディ家の長男じゃないか」

イリアが駆けつけるより前に來たのはアルディ家の長男であつたホーリアと呼ばれている男だつた。

少年はもう大丈夫なのかと安堵し、上を見上げた。

「…カイン…大丈夫か…？」

口を開いたのはホーリアだつた。

助けられたカインはホーリアに戸惑いつつもゆっくりと身を起こして頷いた。

（何故、俺を助けてくれた？俺を誰よりも憎んでいる貴方が…いつも憎悪の眼差しを向ける貴方が何故、助けてくれたんだ？教えてくれよ）

「…貴方は、セイシェル様…」

カインは漸くその名前を呼んだ。

幼い弟と両親を失い、妹にはなかなか会えない。そんな彼と血が繋がつている人は目の前にいるホーリア以外いなかつた。ホーリアなどと呼べる筈がない。

「酷い怪我だな… すまない、簡単な手当てしか出来ないが  
… いえ、大丈夫です」

表情を隠すように傷の方ばかりを見ている。決してカインの顔を直視する事はない、ただ事務的に傷の手当てを行はばかりだ。カインの事など興味がないのか、それともカインを見たくないのか。

(憎んでもいい、ねえ、お願ひだから)

“俺の存在だけは否定しないで”

その一言がもう少しで口から出そうになつたけれど警鐘が鳴り響く。その言葉は決して目の前にいる彼に向かつて言つてはいけない。言えないから、カインは彼をひたすら見つめ続ける。

憎まれてもいい、道具のように使つてくれて構わない。  
貴方が俺を見てくれるなら。

兄と少年の様子を遠くから見ているイリアは呆然としたまま立ち尽くしていた。

(…お兄様、どうしてそんなに苦しそうなの…)

遠くから見ているだけだから表情は当然分からなければ、彼の後ろ姿を見ただけで伝わってくる。

カインを目の前にして治療に励む兄が苦しみ、今にも狂つてしまつのではないか。

イリアは此れ以上カインと兄を見ていられなくなつてしまい、身を翻して逃げるよつにして自分の部屋に戻つて行つた。



## 第九節・贖罪～罪も罰も～（前書き）

私に憎悪を向ける貴方の眼差しが辛くて、苦しくて、胸が引き裂かれそうになるけれど、いつしかその痛みが心地良くなってしまった私は狂ってしまった

ああ、薄汚い欲望を持つてしまった私は貴方を闇から救い出すことも出来ない

お前に憎悪の眼差しを向ける事が時に罪だと感じ、心が痛む  
慕われるほど、大事にされるほど、惨めに感じてしまうのにお前は  
そんな事さえ分からず私に手を差し伸べる

いつそのこと闇に溺れてしまえばいいのに

一部、同性間の恋愛に近い描写があります

## 第九節・贖罪～罪も罰も～

愛に溺れて憎しみに身を焦がす。

そんな貴方に私は知らず知らず溺れてゆく。

ねえ、私は貴方を殺してしまつ。

「イリア、すまないな…」

「お兄様、気になさらないで。 それにしてもどうしてあんな事をされていたのかしら…」

イリアの疑問にセイシェルは沈黙を余儀無くされた。  
何と答えていいのか分からぬ。

分からぬから彼はガーゼで巻いたカインの足を見つめるだけだった。

（苦しんで欲しいと望んでいた筈なのに、いざ苦しんでいるのを見たら助けたくなる）

カインは自分をどう見ていたのだろう。

光として見たのか？ そうであるなら自分は何と穢らわしい事を考えていたみたいで胸が痛む。

ふとイリアの顔を盗み見た。

頬が赤い、紛れもなくこれは。

「イリア、すっかり気に入つたのだな……」の少年のこと

「ええ」

カインの寝顔を見たままで何の躊躇いもなく彼女は答えた。  
セイシェルは更に罪の意識に苛まれる。

イリアは何も知らない、何も知らないままカインに惹かれている。  
きっとこれからも彼女は積極的にカインの元に来るだらう。

(……お前達は私から何もかも奪うわけだ)

彼らにそんなつもりはないだろうがカインやイリアが生まれたおかげで自分は何もかも失ってしまった。  
カインのようなカリスマ性や才能もなければイリアのような人を惹きつける魅力もない。  
実力を伸ばしても伸ばしても手に入らないものを彼らは無条件で手に入れた。

「イリア様！」

扉を叩きながら侍女が呼ぶ。

「イリア、気持ちはわかるが外に出てくれ

カインの顔を隠すようにしてイリアに向かって強い口調で言った。

「……分かった」

拗ねたような口調だがイリアもカインが寝ているところを侍女に見せるのは良くないと思ったのか急いで表へ出て行つた。

「……何でお前を助けたのだろうな、カイン」

近くにあつた椅子をカインの傍に持つて来て座つた。  
何もしていなゐのに疲れてしまつた。

イリアには後で思い切りハつ当たりされるだらうがそれも仕方無い  
かと苦笑し、目を閉じた。

いつそこのまま何も見えなくなれ。

そう願つたら案外闇は早く訪れた。

\* \* \* \*

「う……ん……」

ホーリアが座つたまま眠りについた後、カインはゆっくりと目を開けた。

ホーリアが治療をした後の自分はどうしたのだうかと考へた。

「い、いじは……」

見た限り此処は高い身分の人間では入れない。

ホーリアかイリアの部屋かとカインは認識した。

「……助けられたんだ、俺は」

足に巻かれた包帯を見て把握した。

はつきり言えば、直ぐにずれる程拙かつたが懸命に巻いたであらう  
跡は見て取れた。

そして側には椅子に腰掛けてうたた寝をしているホーリアがいた。

「……セイシェル」

やはり自分にはホーリアとは呼べない。

セイシェルと呼んだ事が知られたら媚び売るなどまた殴られるが、それでもカインはどうしても出来なかつた。

「やはり貴方は…」

整つた容姿を見た人はホーリアに注目していた。

無意識だつたかも知れない…そつと手を伸ばし、指先が頬に触れた。

ただ触れただけなのに快樂が進る。

義弟妹は別としてホーリアに会いたいという思いだけでアルディ家  
の兵士として志願した彼の願いは思わぬ形で叶つた。  
しかし叶つてしまつたらそれだけに満足出来なくともつと求めたく  
なるのが人間の性だ。

身を起こし、片手で支えながら彼に触れた。最初は指先だけで頬に  
触れていたが今は掌で頬を包み、親指があちこちを触つていた。  
前髪だつたり目蓋さがだつたりと。  
そして唇に触れた。

カインはいつもしつかりしなければならぬと虚勢を張つていた。  
父と母は人から隠れるようにして自分達を養つてゐる。カインは幼  
い義弟妹の為に弱みを見せてはならなかつた。それを辛いと感じた  
事もある、叫びたくなつた事だつてある。

（俺はこんなに立派じゃない！）

才能がある、もっと成長出来ると言われる度にカインの苦しみは大きくなつた。

こんな時、自分にも兄がいたら良いのだとさえ思つた。上がいたら、

きっと直ぐに助けを求めて、語り合えたのに。

絶対にあり得ない事を望んだまま月日が流れたある日、母から兄がいると言われた時の衝撃はあまりにも大きかった。

(貴方は覚えていないのかもしれない)

そう、母から聞く前からカインはホーリアが兄ではないかと子供心に思っていた。

幼い頃に観光地でもある大聖堂で一度会った事がある。ボール遊びをしていて、そのボールが関係者以外入れない場所に転がって行った時、彼はボールを拾つて現れた。

「はい、どうぞ」

あの時の優しい瞳が忘れられない。

「あ、ありがとうございます…」

思わず声が上擦ってしまった程、彼の優しさが心に染みる。場違いで、他の子供からは笑われたり陰口を叩かれるばかりだったから余計だ。その時は何故他の子から嫌われるのかなんていう疑問は過りもしなかつたけど。

「カイン、こんなところで遊んだらいけないじゃないの…ちょっと目を放したらすぐこいつじゃない」

ほんやりとボールを見つめていたまま立ち去った「」の姿を見た母が息を切らせて駆け付けた時に、ふと彼を見上げた。

「……」

先程までの優しさを微塵も感じさせない位、眉間に皺を寄せて鋭い目で母を見つめていた。

幼い頃は気がつかなかつたけれど今となつては彼が自分達を強く憎んでいることが分かつたから。

それが辛かつた。

（俺が貴方を追い詰めたのだろうか？）

そんなつもりは決してなかつたけれど、自分が一生懸命になる度に彼が陰で苦しんでしまつたのだろうか。

あの時から、知つた時から望んでいたのは唯一つ。

（貴方の弟になりたかつた）

それが叶わない。

気がついた時にはもう歯止めが出来なかつた。

弟になりたくて、彼に認めて欲しくて……。

自分は何と欲深いのだろうと血口嫌悪に陥りつつも一度崩壊した理性は戻らなかつた。

何もかも叶わないならせめでこの手で感じたかつた。

「おい……」

「！？」

カインはハツとしてゅつくりと田を開ける彼から離れた。

「もう、起きたのか…」

「ええ」

何も言わずにそれだけを言つてホーリアは少しだけ身を起こして  
「もう少し寝ていたらどうだ？ イリアが帰つて来るまで待つていて  
といい」

そう言つてホーリアは近くに投げ出していた本を拾つて読み始めた。  
カインのしたことについては何も言わなかつた。

「……」

カインはホーリアに気付かれないようため息をするビッグドに身  
を投げ出した。

暫くすると規則正しい寝息が聞こえてきて、ホーリアは全く読めな  
い本をまた近くに置いた。

カインが自分に触れた事について内心では戸惑つていた。

(分からぬ)

カインが何故触れたのか…思考回路も何もかも滅茶苦茶になつてい  
つた。

ただ、触れてくるあの手を拒む事が出来なかつた。何故だろう？ カ  
インがあまりにも純粋過ぎてホーリアの心は罪の意識でいっぱいだ  
つた。

(罪も罰も覚悟していた筈なのに)

覚悟していた筈なのに、それでもカインやイリアの純粋さが自分の心を締め付けて追い詰める。

無意識に自分の手が自分の頬に触れていた。カインの純粋さが心に染み込んで苦しくなる…これ以上何も考えたくないホーリアはまた目を閉じた。

イリアが戻つて来るまでいつたいどの位掛かるのだろうか？早く戻つて来いとホーリアは心の中で叫び、カインに自分の狂つた憎悪を向けないよう努めていた。

しかし、ホーリアの葛藤を分からぬ程カインは子供ではなかつた。

（やつぱり貴方は優しい）

どんな苦しみもイリアやカインには決して察されないよう努める姿がとても痛々しい。

叶うならこの手で深い苦しみから解放したいとさえ思つけれど、ホーリアのよう自分は純粋ではない。

（やつとこの両腕では貴方を救えない）

兄を救えない、触れる事さえ叶わない。

カインは毛布を頭から被つて声を殺して泣いた。

\* \* \*

「ディアルト様」

アルティ家の最上階に甲高くて冷たさを帯びた声が響く。

「ラーナか、見つかったのかな？」

「いいえ、見つかりませんでしたわ、フレアは上手く逃げているみたいですね。セレナやソフィアはシリウス思いだったから簡単に仕留めましたけどね」

そう言つてラーナはディアルトに向かつて微笑んだ。

彼女の浮かべる笑顔は恐怖と冷酷さを感じるとディアルトは以前言つたものだ。

ディアルトもまたラーナに向かつて微笑み返す。

「…カインの弟が火事に巻き込まれて死んだようだね？先程あの寂れた村で葬儀が行われていたよ」

「レディシアとシャールがいないのはそのためですか」

「…カインは一生知ることはないだらうけどね、だつてセイシエルに今頃足の手当をしてもらつて寝ているだらうか」

ふふ、と笑つたディアルトにラーナは少しだけ目を見開いて問い合わせる。

「全部仕組んでいたのですか、恐ろしい人だわ、貴方は」

「君だつてソフィアよりセイシエルを愛してるじゃないか。最も、君はセイシエルを紛れもなく男として愛してるんだらうけど」

「まあ」

くすくすと笑いながらラーナはディアルトに身を預ける。

「ソフィアとシリウスが憎いからつて子供達を利用してカインを迫害する方がいけないと私は思いますわ」

ラーナはディアルトの膝に腰を掛ける。

美しい女が忠誠を誓つた主に身も心も捧げ、主と己に関わる人間の

為に幾千もの命が散つて行く。

彼等は知らない。

今、この瞬間も悲鳴を上げて苦しむ人々がいることを。

彼等は知らない。

救いたくても救えないものを田の前にしてただ泣いている存在があることを。

彼等は知らない。

彼等の野心の犠牲になり、親を憎み、血の繋がつた存在を憎むこと

でしか立ち上がれない程傷付いた存在があることを。

しかし絶望や嘆き、それらの声は彼等には届かない。

夜が更けてラーナはディアルトに問い合わせる。

「フレアはどうするのですか？」

「探すよ、必ず見つけ出さないとね… ラーナ

「イリアは？」

思わぬ問いにディアルトは一瞬だけ声を詰まらせるが直ぐに元の勝ち気な表情を浮かべると

「イリアも何れ始末するよ、セイシェルを使ってね…」

先程とは打つて変わったように低く唸る声でディアルトは答える。  
彼の答えを聞いたラーナはそれ以上何も言わず、ディアルトの方に身を寄せて眠る。

まだ夜は明けそうにない。

＊＊＊＊

「イリア様、あまり走らないで下をこまし！」

侍女の悲鳴のよくな声にイリアは大丈夫と答えて走り出す。

（だつてあの子にせつと念えるんだもの、じつとしていられないわ）

今すぐ会いたい。

あの少年に今すぐ会いたい。

苛めを受けていた少年を手当でした後ホーリアが連れてきた。

その時に顔を見たけれどイリアにとって少年はとてもタイプだつた。

名前はカインと言つ。

「カイン……格好良いなあ

きっと他の女の子にも注目されているはず。

そんな事を考えたらイリアは更に勢いをつけて走り出し、カイン達の元にたどり着こうと急いだ。

「お兄様！」

やつとの思いで2人のいる部屋にたどり着いたイリアは扉を勢い良く開けた。

「イリア、そんなに息を切らしてどうしたんだ？」

流石のホーリアもイリアのあまりの勢いに戸惑い、啞然とした。

「カインは？」

息を切らしながら「カインはまだいるの」と問い合わせる。

「まだ寝ている… イリア、後は頼んだ」

ホーリアはそれだけを伝えると本を抱えて部屋から去つて行った。

「変だなあ」

ホーリアが妙に素っ気ない。

何時も口数は少ないが「黙れ」とも言わずに自分の話を聞いていてくれていたから余計だった。

口にこそ出さないが「黙れ」と言われたよう少し寂しかった。

「わひと

イリアはカインの眠るベッドに向かつて足音を立てないように歩いて行った。

足音を立てず、ベッドの前まで来るとイリアは思わず声を出して言つてしまつた。

「綺麗……」

美少年と云ふ三文子に相応しく綺麗な顔立ちをしていた。

( 瞳毛も長い… )

胸が高鳴る。イリアは呆然としたままカインの顔を見ていた。  
兄もソソとする程綺麗な顔立ちをしていたがカインにはそれだけで  
はない、声を掛ける事さえ躊躇つような空氣があった。

(いいなあ…お兄様)

初めて兄を羨み、少しだけ嫉妬してしまった。

(そうだ、何か用意しないと…)

頭を軽く横に振つてイリアは再び外に出た。  
廊下には料理を運ぶ侍女達がいた。

「丁度良かつた！」

「ホーリア様がイリアは今日は別室で…」

「嬉しいわ、ありがとう…」

イリアはそう言つて侍女達を部屋に招き入れ、机の上に置いておく  
よう指示をした。

「ふう、手伝つてくれてありがとう」

侍女達は忙しいのか足早に去つて行く。

イリアは持つて来てもらつた料理をカインの眠るベッドの近くまで  
向かつた。

「……!?」

イリアがベッドまで料理を運んで来た事にカインは驚いた。  
彼女は安堵し、カインに向かつて声を掛ける。

「カインさん、目が覚めたのですか？」

カインは目の前の状況が分からず、目を見開いていた。覚えているのはうたた寝をしているホーリアに触れた事と彼に手当をしてもらった事と。

状況が分からず混乱するカインにイリアは説明をする。

「ずっと眠っていたんですよ、お兄様が見てくれていたのですか、先程帰つてしましましたわ」

「… そうでしたか…」

カインは漸く把握した。自分は今まで眠っていたのかと。そして今はホーリアではなく妹であるイリアがいるのだと。

「お兄様つたら今日は素つ氣なくて、さっさと帰つてしましましたわ… どうしたのかしらね。いつも口数は少ないけどあんなに素つ気なくないのに」

イリアが兄の様子を訝しんでいた事にカインは眉間を寄せる。

(やつぱり俺が嫌いなんだ)

カインが暗い面持ちでいることに気付いたイリアは

「多分用事が重なっているみたい。お父様や叔母様が厳しいもの、お兄様はアイシア様からもお父様からも叔母様からも期待しているもの」

と言つた。

カインは絶対に違つと思い、イリアの笑顔に幾らか救われた。

「イリア様はホーリア様が好きなのですね」

「ええ！口数は少ないしあまり喋らないけど純粋な」

「そうですか、羨ましいです」

カインは羨ましく思つてしまつた。

自分には絶対に向けない眼差しをホーリアはイリアに向けていた。

「あ、カインさんお腹空きません？料理があるし食べましょ？」

イリアは机に置いてある料理等を運んで来るとカインにフォークを持たせた。

「お腹が空いたら何もかも上手くいかないもの、私も食べよう」と  
イリアはホーリアが座つていた椅子に腰を掛けてフォークをグサリ  
と差して食べる。

そんな彼女の姿にカインは微笑んでいた。

如何にも気品溢れるお嬢様が豪快に食べ物を頬張る姿が面白くて。

「何笑つてるのよ」

「いいえ、何でもありませんよ、イリア様」

「笑い過ぎよ」

イリアが睨んでもカインはずつと笑つていた。

「カインつたらー！」

あまりにも笑われたイリアは拗ねてしまったのでカインは困つたよ

うに笑いながら

「申し訳ありません、イリア様」

と言つたものだからイリアはわざとカインを挑発する。

「申し訳ないなんてちつとも思つてないくせに」

「本当にそう思つていますよ、イリア様」

「あら、 そつなの？」

「ええ」

カインがあまりにも真剣に謝罪の言葉を述べるから笑つてしまつ。一方のカインも笑つっていた、何故なら彼女と話すことがとても楽しくなつたからだ。先程までの切り裂かれるよつた苦痛はビリにもなかつた。

\*\*\*\*\*

「父上、 お呼びですか？」

突然最上階の部屋に呼び出されたホーリアは憤りを隠せなかつた。此方の事情などまるで無視。

道具のように扱われて我慢ならなかつたが逆らつても無駄だと諦めていた。

「セイシェル、 よく来ててくれたね。 カインを助けたらしいね？」

「……」

「心配いらないよ、 無駄だ。 これからお前には僕の側近として働いて貰わないとね……」

ディアルトが自分にどんな命令を下すのか… ホーリアは直ぐに察し

た。

「私にイリアとカインを始末しようと仰るわけですか、ディアルト様」「何だ、分かっているじゃないか、ホーリア。どんな手を使つても構わない、あの2人を始末してくれ」

ディアルトがホーリアと呼ぶときは大抵何らかの命令を下す時で、自分の手を汚すことなくソフィアやシリウスを始末した時と同様、カインとイリアも自分の手を汚すことなく始末しようとしている。

「……お断りします」

ホーリアはディアルトにそう答えた。

もし従つたら、結末があまりにも残酷だからだ。

しかし此処でディアルトも引き下がるわけではなく笑いながらホーリアに向かつて言い放つ。

「君がフレアを庇つたんだろう？　カインの義弟は庇い切れずに死んだけど……」

「……！」

ホーリアは目を見開いた。その様子にディアルトはあざ笑うように次々とホーリアの策を指摘する。

「シリウスを庇つたのも君。ソフィアは死んだけどね、シリウスは早期に手当をしたら助かつた。カインには間接的に伝えて任務から帰る時間を遅らせた……全部バレバレなんだよ、ホーリア」

「……」

「君がカインを抹殺しなければ僕が直々にイリア諸共抹殺するだけ

だけど……どうする？

イリアとカイン、なかなかいい組み合わせだねえ…心中に見せかけて殺すのも悪くないね

なかなか答えないホーリアに「ディアルトはやや痺れを切らし始めた。

勝てない癖に強情なのはホーリアが憎んでいた母親にそっくりだとディアルトは常々思っていた。

「いつそ相姦の罪で処刑するよう仕向けるかな… 罪人を処刑したら批判は僕に向くことはないだろうし、どうする？」

ディアルトは再度ホーリアに問い合わせる。

分かっているくせにとホーリアはディアルトを罵りたかったがそれも出来ない。

「……待つて下さい、父上

「期待しているよ、ホーリア」

「……仰せのままに」

馬鹿にされたも同然だつた。

ホーリアはディアルトに背を向けて足早にこの部屋を出て行こうと歩き出した。

「……くつ！」

ディアルトのいる部屋から大分離れた場所でホーリアは崩れ落ちた。

「……つー！」

結局何も出来ないと改めて思い知らされた。

そして、自分が父親達の道具として生きてきた事を知らないで何不自由なく笑っているカインが憎くて仕方なかつた。

何でもいい、誰でもいい。

滅茶苦茶にしてしまいたい衝動に駆られたが、ホーリアは立ち上がる。

「……カイン……つーお前さえいなければ……お前さえいなければ良かったのに……！」

カインがいなければ、彼らを憎んだ故に犯した罪も受ける罰も与えられる事はなかつたのに。

カインがいるおかげで自分は何も出来なくなつた。

「セレナ殿もイザも死ぬことはなかつたんだ……！貴様等がいなけば、2人は殺されずに済んだ！」

セレナ……ソフィアにとつて幼なじみでシリウスとソフィアの恋心を知り、2人の逃亡を助けた。

彼女はホーリアが10歳の時に処刑された。

イザはラーナが修道院に放つた火から逃れられず死んだ。

「カイン、お前さえいなければ殺されずに生きた人間だつているんだ！」

自分に親身になつてくれたセレナ、体が弱くて動く事もままならないイザ、そして自分を陰ながら支えてくれたフレアも狙われた。自分を大事に思つてくれる存在は全てカインが奪い去つて行く。

バン！

ホーリアは壁を思い切り叩いた。

「カイン……この手で……！」

憎悪に満ちた声が響き渡る。

カインを憎んだ罪も「えられる罰も懲らんでいく憎悪にはかなわない。

そして、強くなる憎悪は別の感情を呼び起こし、悲劇と繋がる事も知らない今まで。

## 第十節・鳴けぬ金糸雀 鳴いた雛（前書き）

私は鳴けない金糸雀。

ただ、鳴くためだけに生み出されたのに、結局は鳴く事も許されず  
に沈黙するしか出来ない愚かな鳥。

価値のない金糸雀なら消えてしまえ。

絶望に沈黙する私の耳に突如響き渡る鳴き声。

一匹の雛が鳴いた声だと知つたのは  
……。

## 第十節・鳴けぬ金糸雀 鳴いた雛

俺を捕らえて放さない暗黒。

きっと、同じように捕らえられてしまつたのだらう。

俺たちが似てゐるのは、何となく結末を予知出来るからなのだらう。

『俺の身はどうなつてもいいから……』

そんなことを考えられる俺は奴らと同じ最低な人間なんだ、きっと。

＊＊＊＊

葬式は呆気なく終わつた。簡単に文章が読まれたけれども誰がまともに聞いていただろうか。

イザを死に追いやつたのは病氣ではなくて火災。

カインは知らない、いや、長い間知ることは出来ないだらうと薄らりと考えていた。

「シャル君」

悲しみに暮れている己に声を掛けてきたのは俺と同い年の少年であるジャン・ブルネーゼだつた。

「…大丈夫？少し外に出る？」

「…悪いな、ジャン」

「気にするなよ」

ジャンの気遣いには感謝している。流石、家族ぐるみで長い付き合いがあるだけに伝わるものがあるのだらう。

最も、今感じている事は絶対にわからないだらうけど、わからない

までいい。

ジャンと歩きながら外に出たら、不釣り合いなくらい空は青かつた。

「嘘みたいな天気だよな、不釣り合いすぎて不気味」

「天気は人の死を予知出来ないだろ」

「そもそもかな」

こんな事を上を見上げて語り合えるようになったジャンと口は少しだけ大人になつた気がする。

しかし、視線を前方に戻すと、来る人物を見えてきた。

「……シャール・レイモンド」

ジャンも顔を真つ青にしながら見ている。  
しまつた、不意打ちだとシャールは苦々しく思いながらも顔には出さず

「ジャン、悪い。席を外す」

と言つて田の前の人、ホーリアについていく。何しに来たんだ、  
いつたい。

「…何の御用で?ホーリア様」

「いきなりで悪いな、しかしお前にはどうしても伝えるべきだと考  
えたからな」

淡々と、しかし有無を言わざず用件を述べよつとしているその様は  
いつも彼ではない、冷酷そのものだ。

「……カインには一切言つな」

「……！」

「勿論お前に拒否権はない、シャー少年」

あまりの無茶苦茶な命令に田を見開いた。

カインは身内の死を知らないまま、知ることもないまま日常を送る。口封じだ。

何も知らないまま日常を送り、何も知らないまま歩いていく。

「……あまり詮索したらお前やお前に関わる人々の命の保証は出来ない。

黙つて従え、それとも……」

ホーリアは口角を上げて不敵に笑う。

「お前は私を止めようとするのかな？」

挑むような眼差し、真剣な勝負を仕掛けてくるホーリアに「いいえ」と答えられるわけがない。

『お前には勝てない』

そうだ、その通りだと分かっているけれど、彼は自分に仕掛けてきた。

勝負を仕掛けて断れる筈がない、此方も相応の態度を示すまでだ。

「止めてみせる……必ず、お前を止めてみせるー。」

ホーリアを真っ直ぐに見つめ返す。

自ら後戻り出来ないようになした。

例え残酷な結末であれども、破滅へ向かおれども、もつ躊躇つ事はない。

「……良いだれど。ならばやってみるがいい、シャール」

そう言ってホーリアは背を向けて再び立ち去る。

『始まつた…これでもう本当に戻れない』

ホーリアを敵に回すまではもしかしたらまだ戻れたかも知れない。  
だけど後悔はない。

彼は最初から予測していたのだろう。いつか、絶対に自分とホーリアは対峙する。

「……ホーリア」

彼の後ろ姿を刻みつけ、ゆっくりと背を向けてイザの眠る場所、レディシア達のいる場所へ戻る。

カツ、カツ、カツ…

履いている靴の音だけが響く。

急速に回り出す運命は高ぶる感情をも巻き込んで回り続ける。  
何も考えずにただ機械的に足を動かしていると、前方から息を切らして走つて来るレディシアの姿が見えた。

「シャール、やっと戻ってきた」

レディシアはずっと探していたらしい、自分の姿を見つけてパッと顔を輝かせつゝも

「気分は落ち着いた?」

と尋ねる。

相変わらず年相応ではない振る舞いだ。そんな彼がとても頼れる存在であるが、少しだけ…少しだけ苦々しく思つ。

「レディシア、わざわざ探してくれたのか。ありがとう」

この子は健気だ。

きっと知らないのだるつ、この子の気遣いに甘えていり自分の心の醜さなんて知らない。

知らなくていい、この子は何も知らなくていい。

「そろそろ戻るつか

「うん、そうだね」

少年が死んだのに、悲惨な事故に巻き込まれて死んだのに、その少年は自分とも親しかったのに。

普通は悲しみに暮れて泣く筈なのに思考は酷く落ち着いていた。目的が近付く度に何もかも失つていくような気がして、どうしようもない虚しさを覚えた。

少年の眠る場所へ、悲しみに暮れる人々が集う場所へ戻る為に歩いていたが

「シャール!」

レディシアが悲鳴のような声で呼び止めた。

そんな声で呼ばれたらどう返せば良いのか分からず、立ち止まつて小さい声で返すしか出来なかつた。

「なに？」

知られたくない、今の自分の表情なんか知られて堪るものか。

「…ううん、何でもない！呼んでみただけ」

やつぱり。

明らかに何か言おうとしたのだろうけれど、彼は言つのをやめたらしい。

無理矢理明るい調子で撤回したレディシアがとても可哀想に見えて、何か言わないといけないと思つてみたものの。

「そりゃ

自分の口から出たのは淡々とした言葉。

こんなに幼い彼から温かい言葉を掛けられたのに、自分は温かい言葉なんてちつとも思い浮かばない。

虚しくて、苦しいのに。

枯れた頬には涙さえ浮かばなかつた。

\* \* \* \*

葬式が行われていた場所から遠ざかつたホーリアは険しい顔をしていた。

葬式場所はアルディ家に知られたくなかったのだろう、忌々しい惨劇が起こつた刑場のある村より更に遠い場所で行われていた。憶測でしかないが少年は野原で駆け回るのが好きだったのか大陸の東部と西部を隔てる山々の1つに登つて全員が祈つていた。

そう言えばアルティ家が統治する場所は修道院や聖堂が色んなところにあつたなと考える。

(偽善者どもめ)

ホーリアは声にこぼれ出さないが精一杯心の中で罵った。

憎悪を今剥き出しにしたらそれこそ惨めだ、虚しいだけだ。そんな時に考えるのがシャールの事だ。

光と影が入り混じる瞳、理性が感情を制御出来ておらず、知らないうちに恐ろしい事を考えて虚しさを覚えて枯れしていく。

全部、全部枯れしていく。

そして落ちる。

「緩やかに朽ち果てていく…」

見えないけれど朽ち果てていく、自分の中だけの小さくて綺麗な箱庭。

朽ち果てた箱庭にはいられないから外の世界に出て、穢れを知る。

綺麗で思い通りにはいかないのだ。

ホーリアは溜め息をつき、暫くぼんやりとしていた。

何も知らない、ただ父親を失つて悲しみ、全てを憎む少年に醜い世界を見せなければならない。

あの少年は何処まで耐えられるだろう、あの少年は何処まで受け止められるだろう。

……あの少年は何処まで正氣を保てるだらう。

フレアを探さなければならぬという使命を放棄してホーリアはただ考えていた。

シャールがアクロイドの息子でなかつたら、自分がアルディ家の長男でなかつたら、何もかも持つていなくてどこにでもいる平凡な暮らしを嘗む人間だったら。

もしかしたら…。

分かつてゐるけれど自分がアルディ家の長男であることが全てを狂わせているようで悲しかつた。

アルディ家に関わつていなければカインもイリアも大切な弟と妹だつたのに。

『滅んでしまえ、こんな世界なんか滅んでしまえ』

カインもイリアも憎しみの対象でしかないことが、シャールを追い詰めることしか出来ないホーリア自身に一番の怒りを感じていた。『えられた使命を果たす気にもならず、微動だにすることなくぼんやりと田の前に広がる景色を眺めていた。

「ホーリア…様」

フレアの居場所が見つからないという報告をしようとしたアベルはホーリアの後ろ姿を見て立ち止まつた。

今の彼に話しかけてよいのか分からず、ホーリアと同じようにぼんやりと景色を眺めていた。

こんなにも煌びやかに輝く建物が多いのに、見渡す限りの緑が広が

つていて何一つ不満はないのに不満に思つてしまつのは何故だろ？

そしてアベルにはもう一つ苦々しく思つてゐる事がある。

(フレア姉さん)

今、アベルを含むアルディ家の全員が追いかけているのが彼の姉だからである。

何故フレアを？

彼女が何をした？

彼女はソフィアとシリウスに利用されたも同然なのにどうして殺さなければならぬ？

フレアの優しさを利用したソフィアとシリウスがアベルにはどうしても許せなかつた。

幹部という立場上、当主には逆らえないからフレアを追いかけているが、もしも他の幹部より早く彼女を見つけて出す事が出来たら救い出す。

その為にシリウスやソフィアに対する憎悪を抑え、ホーリアに従つてゐる。

ホーリアもフレアを救うために当主に対する怒りを抑えている。

「ホーリア様」

躊躇う暇はないのだから、何事も早々に行動しなければならない。彼も自分も今置かれている状況から逃げ出したい気持ちは山々だが、此處で逃げたらフレアは間違なく死ぬだろ？

これ以上、アルディ家によつて犠牲者を出したくなかった。

「アベル…どうだつた」

「いえ、見つかりません…南部だつたとしたら厄介ですよ、なかな

か

アベルが苦々しく呟くとホーリアも同じく険しい顔で頷いた。

アルディ家側が管轄している地域は大きく分けて4つあった。東部や北部や西部は前からアルディ家に忠実だったのとそれ程でもないが、敵対関係にあるライハーデ家とも接している南部では不満が大きくなつていた。

今、自分達がいるのは大聖堂に一番近い北部であり、シャール達がいた村などは東部と北部に面している。仮にフレアがいるとしたら東部だつとホーリアもアベルも読んでいた。

元はアルディ家幹部の1人、誰かの手を借りなければ南部に行くのは不可能だつ。

「ホーリア様、ラーナ様は恐ろしい回転が早い…迷つてている隙はありませんよ、それに」

アベルには「まかしは通じないらしい。どうやら躊躇う原因はお見通しのようだつた。

「カインやイリアに気を取られたら我々が負ける。おわかりですね？ホーリア様」

「…ああ、そうだな」

アベルには何もかもお見通しで、偽ることも隠すことも出来ないみたいだつた。

それ以上は何も言わず、アベルは背を向けて再び走り出した。

「…フレア殿…」

助け出せるのだろうか？

両親を引き離す手伝いをした人間を許し、助け出せるのだろうか。もしかしたらできないかも知れない、ラーナに結局弱音を吐いてしまい、結果的にフレアを殺してしまうのかも知れない。

敵があまりにも多すぎる。それも全て血を分けた者が敵なのだ。

ホーリアは暫く動かない。否、動けなかつた。

\*\*\*\*\*

「……」

一方のカインは今日も傷だらけの身体を引きずつて寮に帰るところだつた。

昨日、イリアがいつでも休みに来ていいと言つたのだが断つた。彼女と自分は異性である。これ以上一緒にいたら怪しまれるに決まつているだろう。

ホーリアを思えば尚更イリアのそばにいてはいけないような気がする。

ホーリアの事さえ考えなければ、アルティ家の事さえ考えなければ、もう少し与えられる厚意に対しても直に応える事が出来るかも知れない。

しかしカインにホーリアを切り捨てて誰かの厚意に素直になることは不可能だつた。

一番欲しいのは彼の優しさであり、励ましであり、認めてもらひことだつた。最初はただ会うだけで良かつたのに。

ホーリアに会う事だけを考えて此処に来たはずなのに今度は兄としてそばにいてほしいことを望んでいる。

しかし、彼の優しさは決して自分に向けられる事はないのは知つている。

ホーリア以外の人の厚意に甘えることは彼の自分に対する憎しみが増すだけで意味がないと考えたから甘えられない。

自分の望んでいることは、ホーリアに認めてほしいからだ。

「…セイシヨル…」

足の痛みも気にならない。頭の中は彼で侵食されてしまった。

渴望するあまり、彼に憎まれたという事実に苦しむあまり、もう思考回路が麻痺してしまった自分は駄目なのだと自覚する。

「カイン！」

背後から聞こえた声に振り返るまでは。

「カイン、歩くスピードが早いわ。ねえ、カイン」

「……イリア様！」

漸く気付いた時には、イリアが息を切らながら自分の隣を歩いていた。

彼女の呼ぶ声に全く気がつかなかつた自分がとても可笑しいと思つた。

イリアは心配そうな表情で

「カインつたら、さつきまで何度も呼んだのに…何か考え事でもしていたの？」

気遣うように話しかける。

考えていた内容は依存的な望みだつた為にイリアには言えなかつた。それに、自分も彼女とホーリアと血が繋がつてているということなんて口が裂けても言えない。

知らない振りをして、事実を隠し通さなければならない。

事実を言えなかつたのは、彼女に少なからず惹かれていたからとうこともあり、例え言つたところでどうにかなるわけでもないとのんきに構えていたのもある。

「ありがとうございます、イリア様」

辛い環境の中にいたからなのか彼女の笑顔一つで随分楽になつた。険しい表情から一変したカインに向かつてイリアは笑いながら

「カイン、あまり無理はしないでね。

あ、でも倒れたら毎日カインの看病しに行けるからいいのかな?」

そんなことを平氣で言つた。

明らかにからかわれた…カインは少しだけムツとして言い返した。

「倒れませんよ、それに私に見えて今まで大病を患つたことないですからね。仮に患つたとしてもイリア様には頼みませんよ」

「まあ!酷いわ、私の看病が乱暴だというのかしら?」

カインの発言に今度はイリアがムツとして言い返した。

しかし、よく見たら勝ち誇つた笑みを浮かべるカインがそこにいてイリアはますますムツとしてしまつた。

やはり何をしてもカインは格好良いと自覚し、イリアは悔しくなつて何も言い返せなくなつてしまつた。

(悔しいくらいに)

本当に悔しい位にカインに惚れてしまつた。

「イリア様、如何なさいましたか？」

言い返せなくなつてしまつたらムキになつてバカと連呼する声が聞こえなくて訝しみ、声を掛けた。

「カイン」

ふわりと唇が重なる。

多分、自分はこうなることを予測出来なかつた。  
これが最大の失敗であることを予測出来なかつた。  
実の姉であると知りながらイリアとキスをしてしまつた。

……もしもあの時、彼女に声を掛けなければ。

……もしもあの時、彼女に背を向けたままだつたら。

これが、ただの戯れだつたらどれだけ良いだろつ。

カインは子供心に罪の意識に苛まされながらも、イリアから離れなかつた。

\*\*\*\*\*

修道院に戻つたシャールとレティシアは次々と怒られる羽田になつた。

最も、怒りを向けられたのはシャールであり、こんな時にレティシ

アに探させないでという内容が殆どだった。

しかしレディシアはその度にシャールを庇つたので益々逆効果で、シャールが怒られるだけだったが。

その度にシャールは肩を竦めて謝罪しつつ改めて認識する。

(俺、兄貴分失格かもな)

レディシアを助けなければならぬ、守らなければならぬ筈の自分が庇われ、守られていた事を知つて苦笑する。

レディシアと違つて感情のまま走る自分は本当に兄貴分失格なのかもしぬれない。

そして、自分の為に彼を連れて行つてしまつと思つたらレディシアに謝りたくなつた。

(…「ごめんね、レティン。巻き込んで」「ごめんね、君の優しさにつけ込むような真似をしてごめんね）

何度も何度も心の中で謝罪を繰り返す。途端に体が浮くような感覚を覚えた。

「シャール！」

今まで沈黙を守つていたジャンが悲鳴を上げながら真っ先に駆け付けて来たのが分かる。

「…シャール……シャール！」

大丈夫と言いたかったが上手く言えない。

朦朧とする意識の中、浮かんだのはレディシアの無邪氣な笑顔とホーリアの嘲笑うような台詞だけだった。

何も分からぬ、何も聞こえなかつた。

ただ、闇の中に沈んでいくような気がした。

## 第十一節・痛み分け（前書き）

終わらぬ憎しみは廻り、追い詰められて捕らわれる。

苦しい、苦しい、誰か助けて。

お前なんか嫌いだ、嫌いだ、嫌い。

『だけどことおしゃ』

咄嗟に吐き捨てた言葉の中にいる己の意図を知らずに。

## 第十一節：痛み分け

俺を見てくればそれでいい。

憎まれてもいい、道具でも構わないよ。どんな感情でもいい、何時  
までも俺だけを見てくれるなら何でもするよ。見返りなんかいらな  
い。

（でも、本当はね）

俺を憎まないで、認めてくれよ。  
お願ひだから、捨てないで。

声にならない悲鳴が響いて、届く前に消えた。

\*\*\*\*\*

「…暫く待たなければな」

ホーリアもアベルと共に東部へ行きたかったのだが、それは危険だ  
とアベルに止められた。

アルディ家の長男が動き回つたらラーナに察されるかもしれないか  
らだ。

アベルからしたらホーリアは今でも十分動き過ぎて危険だと思つて  
いるのだろうが、己の評価は生まれた時から既に地に落ちているか  
らこれ以上落ちないだろうと思つ。

それにラーナ達は己の事などどうでもいいのだひつ。

（どうせ直ぐに見抜かれる）

ラーナを誤魔化すなど不可能だ。いつでも見抜いてくる。

それが時に疎ましくもあれば時に助かるときもあるから正直言えば複雑だった。

「ソフィアの先輩が何かだつたよな」

よく分からぬ。

思えば自分はソフィアもシリウスもラーナも簡単にしか知らなかつたことを認識する。

多分、彼女達を知らなかつたから憎むことしか出来ないのかも知れない。

母に捨てられた幼い頃から此処まで来る為には、誰かを憎むことしかなかつたのかもしぬれない。

何も知ることが出来ないままソフィアもシリウスもいなくなつたら余計に誰かを憎まなければならなかつた。

全ては事実を受け止められない弱さを認めたくないが故の言い訳であることは知つてゐるが。

知つてゐるが、心がついて行かない。

理性と感情が一緒にならない。

何時になれば誰かを憎むことから解放されるのか自問するがきっと一生解放されないと自答した。

1人でじつとするのも疲れたホーリアはゆっくりと立ち上がり、扉を開けた。

ホーリアは目の前にカインがいることを知り、固まってしまった。しかも彼は途方に暮れている。

「……カイン……？」

何も言わないカインに向かつてもう一度呼び掛ける。

それにして何故ここにいることをカインが知っているのだろうか。シャルにでも教えてもらつたのだろうと勝手に結論つけ、慌てて部屋に招いた。

「とにかく入れ」

ホーリアの後ろをカインはフラフラしながらついて行つた。先程から焦点の定まらないカインを半ば無理矢理椅子に座らせ、向かい側にホーリアが座つて事情を聞いた。

「カイン、どうした?」

カインは一切質問に答えず、俯いたままで何かを考えているようだつた。

それが無性に腹立たしくなつた。

「なにがあつた」

訳の分からない苛立ちに任せて問い合わせば思つたより厳しい口調になつてしまつたことを知る。

どうやら此方が苛立つてゐることに気付いたのか、カインは漸く顔を上げた。

青く澄みきつた瞳が自分の姿を映している。

寧ろ自分以外は何も見えていないように感じてホーリアは思わず目を逸らした。

俯いたままのカインに苛立つていたのに何故だらう。今のカインを見るのがとても怖くて目を逸らしたまま… そんな自分が可笑しいと思しながらホーリアはカインに問い合わせる。

「落ち着いたか？」

出来るだけ感情を抑えて当たり障りのない言葉を選んでカインに言ってみるもの、会話は当然続かない。

どうしたらいい？

気まずい空気が流れ、益々話せなくなる。

何か、何か言わなければならぬのになかなか話せない。  
しかも相手はカインだから下手なことは言えない。

元々話すことが苦手で、愛想がよくて話しやすいと感じじるイリアと  
さえともに会話が続いた覚えがない。

肝心のカインは黙つたままで口を開こうともしない、余計に途方に  
暮れてしまった。

「…す、すまない…」

途端に口から出たのは謝罪の言葉。

ああ、一体何がしたいのか。

こんなにも憎いのに…恨めしいのに…疎ましいの…どうして…こんな  
るのだろう。

思考回路が得体の知れないものに侵食されてしまったような気がし  
て余計に怖くなる。

『セイシェル、もう嫌なの。お願いだから近寄らないで』

不意に思い出したのは母に拒絶されて泣いた幼い自分。

得体の知れないものに支配されるのは御免だ、幼い頃に拒絶された

悲しみを知つて母に捨てられた絶望と憎悪を知つた。

強すぎる感情を抑制する術も知らないまま、大人になつた。

今のかインを見るのが辛いのは……。

(やめよう、もう考えるな)

これ以上何も思い出したくなかったホーリアはカインから田を背けたまま空を見つめていた。

\*\*\*\*\*

ホーリアの苛立つたような声がしてもカインは顔を上げるだけで何も言わなかつた。

何も言わないうが、じつとホーリアを見つめていた。

嗚呼、嗚呼何という感情。

俺があなたの瞳の中にいる。俺だけを映していいる瞳を見て歓喜する。これは一体何だらう。この歓喜を何と呼ぶのだらう。

ねえ、あなたは知つてる?

知つてるなら教えて、お願ひだから黙つていないで教えてくれよ。

先程までホーリアは此方を見つめ返していくてくれたのに今は違う。此方から田を背けたまま違うところを見ていた。

お前なんか見たくないと全身で訴え、はつきりと拒絶されたことを知りました苦しむ。

カインが此処に来た理由は彼にイリアの事について相談したかったのだが、もうどうでもよくなつてしまつた。彼のそばにいるだけで悩みは消えてしまつ、だからイリアの事は話さなかつた。

何故なら「どうした」と言つて心配してくれたから。  
彼から心配されたというだけでかなり楽になつたと同時に絶対に変えようもない事実にぶつかつて苦しみが増すばかり。

そう、彼が俺を憎んでいること。

彼が心配してくれる理由もきっと後でイリアに五月蠅く言われるからであり、偶々此方の様子を見たからであり、心から心配してくれるのはではないこと。

遠くにいたらきっと何も聞かないだろう。

それどころか、俺が苦しむことを望んでいるだろう。

(…セイシール様)

心中で何度も叫んでいても口に出して呼べない。彼の名前を呼ぶこと自体が禁忌であるような気がした。

\*\*\*\*\*

「……此処は

白で整えられた部屋、清潔感溢れるベッドで寝ていたシャールはゆっくりと目を開ける。  
どうやら倒れたようだと把握するまでそう時間は掛からなかつた。  
倒れる直前に何か怖いものが脳裏に浮かんで、それが何であるかわかる前に倒れてしまった。

何か、何かとても怖いものが一瞬だけ脳裏に浮かんだのに、分からぬなんて。

シャールが物思いに耽つていると扉を叩く音がした。

「誰だ？」

レティシアがジャンのどちらかだと思いつつ問い合わせてみると

「僕だよ、シャール」

返ってきた声の主はやはりジャンだった。  
彼はそのまま扉を開けて中に入つて来た。

「気分は良くなつたかい？」

「ああ…お前の方こそ長居は良くないんじゃ…」

「大丈夫だよ」

ジャンはつこりと笑つて返した。

シャールがジャンの事を此処まで心配するのは彼が少し動いたり遠  
出したりするだけで寝込むことが多いからだ。  
それでも幼い頃よりは大分良くなつた方だが昔はアクロイドがずつ  
と付きつきりで看病したこともある。

「もう大丈夫だよ、本当に」

「そつか、それなら良いんだが」

「心配しそぎだよ、シャールは」

ジャンは苦笑しながらシャールに向かつて言ひ。

本当は心配してくれることがとても嬉しいが、素直になれない性格  
が邪魔をしてついこんな事を言つてしまつ。

そしてシャールに心配かけるために来たわけではない、彼に少しでも協力できるかもしないと情報を持つて来たわけだ。

「シャール、ハロルドさんがこの間アルディ家の専属医師になつたの知つてる？」

「…え？」

驚くのはシャールだ。

ハロルド…ジャンの従兄でアクロイドの下で医師になるための修行を積んでいたではないか。

生憎、彼を覚えていないが。

「…ハロルドさんが」

「何かあつたら訪ねて見たら？」

彼は大聖堂にいるから

またまたシャールは驚く。

専属医師でも最初は下級の兵士や修行を積む魔術師達のいるサー里斯シティにいるはずなのに。

アルディ大聖堂にいるとは…。いきなりアルディ家の大聖堂にいるとは、これでは第二のアクロイドではないかとシャールは思った。

「分かった、有り難う。明日戻つて早速訪ねてみる

突如湧き出る焦りがジャンに知られないように取り繕うのが精一杯だった。

「うん、シャール…」

ジャンは再び笑つてシャールの手を握つた。

「シャール、君の背負つものが何なのか分からぬけど、必ず目的を果たして帰つて来てよ。

待つてゐるから、君が帰つて來るのを待つてゐる。

本当は手伝えたら良いけれど、邪魔になるから…」ライハードに住む僕は君の邪魔になるから

ジャンの寂しそうな表情にシャールは後ろめたい気持ちになるが頷いた。

「いざれ母さんとヘレナに戻る

ヘレナ… そう、アクロイドの故郷だ。

シャールはあまり覚えていないけれど、アクロイドがいなくなるまでヘレナには帰つて來ていたのだ。

ジャンの家族ともシャールやジャンが生まれた頃からずっと付き合ひがあった。

今はお互いあまり来れないが。

「あ……ジャン、呼んでるよ。早く行かないと」

前を見れば何時の間にかジャンの両親がいた。

長い間話していたのか気付かず、入つて來たのだろう。

なりふり構わず入つて來たのはもう直ぐ帰る時間だからだ。

「ほり早く

寂しそうな表情を浮かべるジャンを無理矢理促して両親の元へ向かう。

「すみません…」

ノックに気付けば良かつたと少し後悔したがジャンの両親達は全く気にしていなによつた。

「君が謝る」ではない。ただ、私達が何時までも此処にいたら君の立場が良くなる…アルディ家に所属する君がライハードの人間と関わついたらと知れたら…」

「や、そうですね」

「本当にもつと此処にいたいが…」

しかしシャル君、アクロイド様の事は大変無念だと思つたが、決して無理はしないでくれ

「…ありがとうございます、おじれももおざれもお氣をつけて」

シャルは深く頭を下げてジャン達の姿が見えなくなるまで送つた。

ジャンの父親の警告は遅すぎた。限界はずつと前に越えてしまった気がする。

しかし退くわけにはいかない。

父親の敵を討つためにアルディ家をじわじわ崩壊させようとしていたのに、進んでいる方向はとてもない悲劇ではないかとシャルは思った。

\* \* \* \*

「痛い… 今日も厳しかつたな」

「やつれてこんな目に遭わなければならぬ…とは言わない。

こんな痛み位大して気にするほどではない。

( 言つてはいけない )

足を引きずりながら警戒する。

同じ訓練に励む彼らは此方の様子を窺つているのだ、少し気を抜けば終わりだ。

しかし思わぬ人物の出現でカインは大して警戒することなく救われる事になる。

「カイン！」

前方から来たのはやはり彼女である。

「イリア様！」

「折角だから来ちゃつた」

「大丈夫ですか？」

不安そうに聞いてみたら彼女は首を縦に振つて頷く。

「大丈夫よ！ 今田は勉強もないから自由だし…  
カイン、また怪我してるの？」

イリアは下を向いてやや悲鳴のような声を上げた。

「あ、これなら大丈夫です。いつもの事ですからお氣になさりや

カインはイリアに心配させまいと痛みを堪えて笑っていたが、イリアはカインの額をコツンと叩いて言った。

「「とにかく酷いのに心配しないわけないでしょ」

「で、でも」

「せっかく来て。血がたれ落ちる」

イリアはカインの手を引っ張つて歩く。そんな事しなくてもいいのにカインは思つたが、一方では彼女の優しさがとても有り難いと思つた。

「…イリア？」

イリアのこむ部屋がある城まで歩いて来たのを偶々発見したのはホーリアである。

呆然と立ち尽くすホーリアの登場にイリアは感謝した。

「お兄様なら大丈夫ね！カインを治療室まで連れて行つてくれる？

有無を言わせない聞き方にホーリアは仕方無くカインの手を引っ張つて治療室まで連れて行く。

「行ぐぞ、カイン。その足では歩くのも辛いだろ？がもう少ししだ」

治療室は城に入つてすぐのところである。この家は無駄に広すぎると毒づきながらもカインの手を引っ張つて足早に歩く。カインがふらつきながら歩いているのが見えたが止まるわけにはいかなかつた。

歩かなければ、早く治療室に行かなければならぬ思いで必死だつた。

「……ホーリア様…」

カインは待つてくれと言わんばかりに名前を呼んできたが聞く耳を持つわけにはいかない。

この声を聞いてしまつたら、きっとだめだ。

ああ、でも。

「…辛いのか」

立ち止まり、振り向かないで声を掛けた。

カインは足を引きずるようにして隣に来た。

「大丈夫です、ホーリア様」

いつの間にか手を繋いでいる事に気付いて酷く慌てた。

ああ、本当に嫌だ。

綺麗で細い指が絡められていることを知つて更に嫌悪感が増す。

カインのこの手を、この指を拒めそうにない自分がとても嫌いだと

ホーリアは毒づきながら治療室に辿り着く。

(全く… イリアは厄介事を持つて来る)

彼女はきっとカインが実の弟であることなんか知らない。

しかも彼女の父親は今当主として君臨しているディアルトじやなくて弟のシリウス。

でも、でも彼女はきっとカインを弟だと知つて退くだらうか。いや、そんな事はない。

救急箱を取つて蓋を開けて包帯と傷薬とコシトンを探しつつ、物思

いに耽る。

(母上にやつづじやないか)

不覚にも母とイリアの共通点を知つた自分をホーリアは心の中で笑つた。未だに母を求める自分があまりにも滑稽で。

あまりにも愚かで健気な自分を笑い続ける。

(そして、イリアの為にこんな事を思いついたなんてな)

ホーリアはカインの傷を傷薬を染み込ませたティッシュで血を拭き取りながらまた笑みを浮かべる。

ガチャリ

「お兄様、無理言つてごめんなさい」

ほら、彼女はカインの居るところならどんなとこうだつて来るだろう。

「イリアとカインが一緒にいたら問題だからな」

事実を知らない召使い達からしたら親しげに歩くカインとイリアの仲を噂をするかも知れない。

ありもしない噂を流されてラーナに知られたらどうなるだろ。考えただけでも恐ろしい。

「はい、終わった」

カインの怪我を治療が終わり、立ち上がりて救急箱を戻そうとした。

「あ、セイシェル様」

カインに呼ばれて振り向いた。

「どうした、カイン」

声が少し震えていた事に気付く。

カインを田の当たりにすると冷静になれないのは悪い癖だ。

「ありがとうございます、セイシェル様」

本当に、心からの笑顔を浮かべてそんな事を言うなと叫びたい。  
カインやイリアを見る度に自分が如何に薄汚い人間であることを自  
覚してしまうから。

何を返せば良いのか分からず困ったように笑う。

ああ、その笑顔さえ拙いと知っているの。

「イリア様にも感謝致します」

年齢に似つかわしくないカインの振る舞いにイリアは眉を寄せながら「どういたしまして」と言つ。

とても分かり易いイリアの表情にもカインは気付かない。  
いや、敢えてイリアによそよそしい態度を取っているのだろうか。  
カインは複雑な顔をしていた。

「全く気にしなくていいのよ。ねえお兄様」

イリアは苦笑しながら言ったので慌てて頷いた。

「あ、ああ、気にするな。放つては置けなかつたからな」

慌てすぎて咄嗟に出た言葉が嘘かどうかは分からぬ、しかしカイ  
ンは驚いたような表情で此方を見ていたのは確かだ。

コンコン

更に慌ててしまつたのは侍女がイリアを呼んでいたことに気づかなかつた事だ。

「イリア様、先生がお呼びです。すぐ来てほしいと」

「…いきなりびついたのかしら…」

疑問に思い、一瞬だけ止まつたイリアだが直ぐに返事をして部屋を  
出る。

「「めん、お兄様、後は任せますわ」

そつ言つてイリアは出て行つてしまつた。

「…イリア様、大丈夫なのでしょうか」

「大丈夫だ、あまり気にするな」

イリアの勉強を見ている先生は何かとイリアを呼ぶ。理由はイリア  
が勉強を余りしないものだから説教でもしているのだろう。

「イリア様はセイシェル様を本当に信頼しているのですね」

「…え？」

まだ。

カインの言葉はいつもいきなり此方に来るからこんな返事しか出ない。

「私も兄弟がいれば良かつたのに」

どういう意味だろつ。

カインは此方に向かって呟いている。

ああ、答えてしまいそうだ。でも許されない、カイン、私とお前は。

「……カイン、イリアの  
……」

答えられない代わりに口から出た言葉はカインにも自分にもどつて余りに無茶苦茶なものだった。

『イリアの護衛になつてくれ』

カインは目を見開き、呆然としたまま何も言わなかつた。

一方、自分も何も言えずに沈黙するだけだつた。

咄嗟に出て来た言葉に驚き、疑問や羞恥を覚えたのは2回目だつた。

## 第十一節・救済への第一歩（前書き）

気が付いてしまった。

俺は身勝手な憎悪に苛まれていただけだと。

憎しみは何も生み出せないと気が付いてしまった。

途方に暮れた果てに見つけた答えを教えよ。

『救うこと』が俺の使命なのだと

流れ落ちる涙が憎しみを浄化していく。

生温い涙、則ち血の涙。血の涙を拭い去る力をもつ。

## 第十一節・救済への第一歩

俺はお前を許さない。

(だから此処にいる)

何でもしてやる。

(手段を選ばず攻勢に出るのは冷酷か?)

邪魔をするな、邪魔をするなら容赦はしない。

(立ちふさがるなら斬り捨てる)

勝つ為には手段を選ぶ暇などないのだ。

(所詮足元にも及ばない)

\*\*\*\*\*

イザの一件が済んだ後、以前シャールを迎えて来たアルディ家の幹部の一人であるラルクが待っていた。

「よひ、シャール少年!」

修道院から戻る途中、ラルクに会ったシャールは思わず笑った。

「お、レディシア少年も一緒に?」

シャール少年の知り合いとは知らなかつたなあ

「ラルク様、お久しぶりです」

ラルクに挨拶をするレディシア、やはり幹部になるべき者同士の繫がりだらうか。

ラルクは他の幹部とは違つて見えるとシャールは思った。  
少なくともシャールはラルクに好感を覚えたのは確かだつた。

「堅苦しいなあ、シャールもレティシアも。

あ、隣にはイザベラ殿も！」

「…今日は、ラルク様」

イザベラは淡々とラルクに挨拶を述べる。

アルディ家の幹部に対してあまり良い印象を持つていません。  
ラルクに偏見を持つべきではないのだが、そう簡単に信用出来るわけではなかつた。

しかしシャールは村に戻るまでラルクの話に相槌を打つたり答えた  
り、自分からラルクに話しかけたりした。

ラルクの明るい笑顔に重たかつた気持ちが少しだけ軽くなつた。  
その後も戻るまでラルクはずつと他愛ない話をし続けたが、次の彼  
の一言でシャールは硬直する事になる。

「そう言えども、シャールに会いたがつていた人がいたなあ…見るからに医者つて感じだつたが何か心当たりでもあればメモ渡しておぐ  
から聖堂に来たら寄つてみたらどうかな」

そう言つてラルクは紙切れを渡した。

“ 最高幹部・ハロルド ”

シャールは息を呑んでその紙切れを見た。  
確かにハロルドと書いてあつた。しかも、アルディ家に所属する医  
師達を統率する役目もある。

そのための最高幹部…シャールは「クリと息を呑んだ。

圧倒的な力を持つアルディ家にもしかしたら対抗出来るかも知れない。

シャールの顔には徐々に歪んでいく。

父を奪つたアルディ家に対する憎しみを全面に出した表情に。

しかし彼は知らない。

その表情は隣にいるレディシアを震え上がりさせる程のものであることを。

「シャール、顔が怖いよ…」

「あ、ごめん」

レディシアが恐る恐る言つた言葉にも、シャールは棒読みで謝つただけで全く気付かなかつた。

もう一人、シャールの表情を見たラルクは顔にこそ出さないが内心ではレディシアと同じく怯えていた。

（恐ろしい奴だな…たつた10歳の子供があんな顔をするのか…？  
そんなにアクロイド卿を？）

ラルクはシャールが憎悪にとらわれて歪んだ顔をありありと見た。  
そして、その様から目を逸らしたくても逸らせなかつた。

\*\*\*\*\*

一方、足を怪我したカインの治療をしていたホーリアは平然としつ内心は焦つていた。

『イリアの護衛になつてくれ』

場違いにも程がある言葉にホーリアは慌てるしかなかつた。カインも驚きのあまり声すら發せないといった様子だ。どうしてそんな事を言つてしまつたのか分からない。

ただ、カインやイリアを見ていたら彼等を一緒にさせたかったのかも知れない。

互いに惹かれ合つ彼等に何か強い感情を覚えてしまつた。

「い、今の事は忘れてくれ」

居たまれなくなつてそう言つた。

「何だ、イリアがカインの事を気に入つてゐるみたいだから……イリアのそばに居てやつてくれと言いたかつただけだ。ほら、そんな目で私を見るな」

カインは暫く此方を見ていたかと思つたら突然笑い出した。

「……あはははっ！せ、セイシェル様……いや、『ごめんなさい。おかしくてついつい笑つてしまつて……』

「……五月蠅いぞ、カイン。護衛とかそんな役目ではなくて……ただ、イリアを頼みみたいだけだ」

言えば言つほど墓穴を掘るような氣もするが言わなければ恥ずかしくて堪らなかつた。それが本音なのかも知れない。

「……貴方つて本当にイリア様の事を大切に思つてゐるのですね」

しかしそんな事を言つたら更に彼は笑つて言い返した。

「…妹だからな」

それしか言えない事がとても悔しかつた。  
カインの台詞にいちいち振り回される事がたまらなく悔しくて、しかし悪くないなと思つてしまつた。

なあ、カイン。私は多分心の中で望んでいたのかもしれない。  
いや、今も望んでいるのかもしれない。

ずっと、お前の兄になりたかつたんだ。お前の兄になりたくて、た  
だそばにいたかつたんだ。

『叶わないのにな』

どうしてだらうか。

何故、何故。

カイン、お前を憎む」としか出来ないのであつ。

「セイシエル様、どうかなせこましたか?」

「…いや、何でもない」

カインの視線を受け止めるのが辛くて目を逸らした。  
心配してもうう資格などなかつた。  
きっとこれも罰だと思つた。

\*\*\*\*\*

「……もつやるやるなんだけどな、クスクス」

此處はアルティ家の地下室…響き渡るのは悪魔のよつた笑い声だつた。

「ディアルト様…死の契約のことかしら?」

悪魔の隣にいたのはラーナだつた。

ディアルトと名乗る悪魔は笑いながらラーナに問い合わせる。

「ラーナ、お前は恨んでいるのかな」

「ええ、でも」の姿になつて手に入れたものだつてあるから

「…僕もさ」

「……」

彼が一言発したのを最後に2人は黙つたまま答えなかつた。特に、ラーナは答えられなかつた。

(ソフィア…)

ソフィア…カインの母親である。

彼女を手に掛けたのはラーナである。しかしラーナはその事を悔い、ソフィアを殺せと迫つた彼を恨んでいた。

未だ鮮明に残つてゐるソフィアの悲鳴が脳内でこだまする。

(ラーナ!?)

(…ソフィア…幸せそうね)

突然のラーナの訪問に驚いたソフィアの声が。

(……カインとイリアという可愛い子供が生まれて本当に幸せそう。セイシェルを捨ててお兄ちゃんを捨ててシリウスと結ばれて羨ましいわ)

(…セイシェル…)

(あら、セイシェルの事が少しは気になるのね)

ソフィアに対して冷たく返す自分の声が。

(あの子には悪いことをしたと思つてゐるわ…ラーナ)

ソフィアの事は十分に理解していたとは言え、やはり許せなかつた。

彼女はシリウスを愛していた。しかしアルティ家はシリウスとソフィアの結ばれる事を認めなかつた。

正しくは当主になるティアルトがそれを許さなかつた。

分かる、彼女が苦しかつたのは分かる。

(でもセイシェルはね、関係ないのよ。あなたの苦しみと悲しみを子供にぶつけていいわけないでしう…ねえ、ソフィア)

(…ラーナ、聞いて…ねえ、聞いてよ…)

彼女は…ソフィアは気付いてしまつたのだ。  
きっと私の思いも、これから私が何をするのかも。

私はまだ何もしていないのに。

（ラーナ、聞いてよ。ディアルトは正気じやないの。どうして貴女は…！）

（そんなの知つてゐるわよ…）

縋るソフィアの腕を払つて叫んだ。  
有りつ丈の力で彼女に向かつて叫んだ。

（でもソフィア、貴女は逃げただけよ。

貴女が逃げてセイシェルはどうなつてゐるか知つてゐるの？  
貴女とカインを恨むしか出来ないのよ？貴女は逃げるべきじやなかつたのに逃げたのよ！）

しかしソフィアは私を睨み、言い返してきた。

（ラーナ、私は貴女のよつに強くなかつた！私だつて逃げたいわよ！  
ディアルトからも、セイシェルからも！  
セイシェルは人の子じやないのよ！  
ディアルトが力を得るために生み出した子なの！私にどうじりつて  
いつのよ…）

多分、私はあの時。

あの時、ソフィアを撃つたのは。

泣き叫ぶソフィアに向かつて私は銃を突き付けた。

彼女はハツとして私を見上げた。

私は多分笑つっていた。笑いながら彼女に向かつて言つたのだ。

（ソフィア、もう何も言わないで。苦惱する事なんてないから…樂

にしてあげるわ)

彼女を逃がしても良かつた。でも、きっと生きているうちは全てに  
怯えなければならぬ。

彼女を恨むセイシェルが大人になればソフィアを抹殺しようとする  
かもしない。

セイシェルに抹殺されるソフィアも、それによつて苦しむセイシェ  
ルも見たくなかったのかもしない。

(…痛いのは一瞬よ、ソフィア)

ソフィアは何も言わなかつた。

錯覚なのかも知れぬけれど、彼女も私と同じように笑つていたよ  
うに見えた。

それから数分後、私は銃をおろした。

ソフィアは倒れ、辺りには血が飛び散つていて。床にも彼女の頭か  
ら流れる血が広がる。

此処に置き去りにしても構わなかつたが、それはいけないと誰かの  
声が木霊する。

そして更に数分後。

(ラーナ様!)

駆けつけてきたのはアルティ家の幹部だつた。

(ソフィアを刑場に晒せとティアルト様から命を受けてあります)

(…そう…遂行して頂戴)

(はつー)

幹部達がソフィアの遺体を粗末な板に積んで運ぶところを私は見届けた。

銃を撃つ前にソフィアから受け取ったロザリオを握り締め、ゆっくりと彼女の家を立ち去った。

…ソフィア…。

声には出さず、心の中で彼女を呼んだ。

“ごめんね”

撃つた時に聞こえた気がした…ソフィアがセイシェルに対する懺悔の言葉が。

ソフィア、私の方が弱かった。

貴女を、シリウスを守れなかつた。

(私の方が酷いわよね、よほど)

兄の味方をして全員を切り捨てる私の方が冷酷だつた。

そして、シリウスも手に掛けた私は。

「ラーナ?」

「…あ、申し訳ありませんわ」

しまつたとラーナは思った。

「…お前が選んだ結果さ。大切な親友達を捨てられるなら、ね

ディアルトには何もかも見抜かれていたようで、ラーナは観念した。

「…そうですね」

“愚かな私”

ディアルトに身を委ねた理由があまりにも単純で、自分があまりにも惨めでならないとラーナは思った。

\* \* \*

「ラルク様、此処までわざわざ有り難う御座います」

イザベラは淡々とお礼を述べ、頭を下げた。  
ラルクは苦笑しながら

「いえ、当然のことでしたまでですよ。あはは」

と言つて背を向けて足早に去つた。

イザベラにどう思われているのか分からぬほどラルクは子供ではなかつた。

シャルルとレディシアの笑顔が見れて良かつたとは思つたが。  
此処から大聖堂に戻るには近くの街まで出て馬車に乗らなければならぬ。

「此処から一番近い街は…アエタイトかよ。まだまだ歩くぜ」

思えば此処から一番近い修道院も森や険しい道を散々歩き、小さな山を登つたところにあつた。

恐らく馬車は走らないため、最低3時間は歩く。  
一番近い街に行くにも30分は掛かる。

「見離された村っていう名前がつくるも分かるな」

アベルから聞いたことがあった。

“このアルティ家周辺には神に見離された村とも呼べぬ小さな集落  
がある”

神に見離された村の中で一際輝く少年…それがシャール。  
しかしシャールの事を考えたラルクは思わず身震いした。

『あの子の瞳は憎悪と怒りで光っている』

きっとそのうちに田から光も消え失せていくのだろう。  
そして残るのはまるで人形のよつた瞳。

ラルクは拳を震わせた。

（だめだ、だめだ。絶対にだめだ）

シャールには思いとどまつて欲しいと願わざにはいられない。  
踏みとどまつて、考え方直してほしいと。

ラルクにとつてシャールは希望だつた。

彼が初めてだつた…眞実を明かすために追求するといつ志を持つて  
現れたのは。

しかし、高い志を抱いた彼の瞳には光がない。

正しくはざらつく程の負の感情に苛まれていると言つた方が良い

のだろう。

(だめだ、絶対に)

ラルクが首を振っていた時、声は聞こえた。

「ラルク様！」

走つて来たのは村に帰つた筈のシャールである。

「…シャー少年、何故此処に？さつきまでイザベラ様と一緒にだつたのに」

ラルクが不思議に思うのも無理はない。

シャールはレディシアや母と故郷に帰つたはずだ。目を点にするラルクにシャールは説明した。

「ラルク様がいなくなるから慌てて追いかけた。此処まで来るのに時間掛かっだし、もうラルクはいなくなつたかと思ったんだけど」

「こ、こんなところまで…。俺に聞きたいことでもあるのか？」

ラルクが問いかけたのを見たシャールは不敵に笑いながら一言放つた。

「分かっているくせに」

分かっているくせに。

ラルクを罵るような、嘲笑うような声。

ラルクは頭を伏せた。

「ハロルドさんのところに案内してくれって言われるのがいやでさつさと帰つたんだからね、ラルク様は。違うの？」

違うと言つたら彼は今にも…。

ラルクは観念して「そうだ」と言つた。

「やっぱり。だつて当主様から信頼されている医者の1人であるハロルドさんにたかが召使いが会えるわけない…でもね」

続きを言おうとして、しかしシャールは何も言えなかつた。

「…ラルク？」

そうだ、と言つたきり下を向いたまま何も言わないラルクを不審に思つた。

感情的になつてしまつたと気付いた時には遅かつた。

ラルクはガタガタと肩を震わせて泣いていた。

ふと、シャールは下を向いた。

ポタ、ポタ…

ラルクの瞳から流れ落ちた涙を見て、浄化されていく気がした。もつと近付き手を伸ばして涙を受け止めてみる。

“生温い”

シャールの素直な感想だった。

自分の流した涙はどうだろう、きっと凍りついた涙だったに違いな

い。

涙の源は血であると、嘗て父は言った。

自分の流してきた涙には血の生温が無かつたのだろうか。

(アルディ家の次期幹部なのに)

ラルクより自分が余程冷酷だったという結論を改めて突きつけられた。

自分はなんて醜いのだろう。

そんな事を感じたら惨めで苦しくなった。

生温い涙に洗われていく心。

(どうすればいい?)

戸惑つてしまつた。

何故泣いているのかは分からぬ。しかし、一つだけ分かることがあるならば。

(俺の為に泣いてくれている)

自分は誰かのために泣いただらうか。

(父さん、母さん、俺は…俺は)

誰かのために泣いたことなど全くなかった。

歪んだ心も、父を失つた虚しさも、何もかもラルクの流す涙に拭い去られていく。

シャールは何となく目を閉じた。

たつた一筋、生温い涙が流れ落ちるのを感じた。

過ちに気付いてしまった。

凍てついた心が生温さによつて解放されていく。

今更気付いたところで遅すぎた。

後戻り出来なくしたのは憎悪に捕らわれた自分だと。

せめて、後戻り出来ないと叫びなれば。

(ホーリア)

何故かホーリアの不敵な笑顔が浮かんだ。

「……ラルク、泣き止んでよ」

次に頭に思い浮かび咄嗟に言つたのは、目の前で泣くラルクを宥める言葉だった。

(俺なんかのために泣かないでくれよ)

そんな綺麗な涙、自分のために流さないで欲しいと思つた。

「ねえ、ラルク……」

宥めることさえ出来ないほど無力だった事実を知る。今まで見えていなかつたものが見えてきた。

やつ、答えは。

『救済』

父は命と引き換えに自分たちを救つたのかもしれない。

生かされた命、自分も救わなければならぬ。

『少年は一步、また一步と進む。  
死をも恐れず、悲劇に向かつて進む』

墮ちてしまつ。

そして、すぐに消えてしまつ。

棘の道を歩き、その後には何も残らなこと思つていた。

元から何も残つていなければ、失うひとの悲しみや苦しみを味わうこともなかつたのに。

お前の笑顔が

あなたの穏やかな声が

あの子の活発な話し声が

消えずには残る。

『消えてしまえば楽になるの...』

響き渡るのは虚しさを含んだ呟き声のみ。

「セイシェル様、有り難う御座いました」

足の手当でを終えたカインはホーリアに礼を述べた。  
彼は決してホーリアと呼ばないけれど。

「イリア様のところに参ります」

「ああ、イリアも喜ぶ。任せた、カイン

「…ええ」

カインは眉間に皺を寄せて頷いた。命令には逆らえないのだから仕方無い。何より彼はカインに任せたとまで言つたのだから、断るなど出来るはずがない。

居たたまれなくてカインはもう一度深く頭を下げて早々に出て行つた。

パタンと扉が閉まる。

「…カイン、笑ってくれよ、私を

カインが出て行つて少し経つた後、ホーリアは呟いた。  
父親に近付くためにはカインもイリアも消すしかないのだと、仕方無いのだと、何度も言い聞かせた。

『本当に?』

まだ。

不意に問い合わせる声に彼は頷く。

(本題だよ)

そう答えたなら声は笑う。

『違うな、お前はカインとイリアが邪魔で仕方ないのだ。事実、お前の母親はカインとイリアは愛したけどお前は愛していないかったじゃないか』

(違つ)

否定したら、声はまた笑う。

『認めろ、お前はカインが憎いのだ』

何度も何度も声は「」を苛んだ。

認めたくないと頑なに否定し過ぎて頭痛をえ起きしがある。

『認めたら楽になるよ、セイシェル』

囁いた声を無視してバツと立ち上がる。

これ以上聞きたくなくて、用があるわけでもないのに外に出た。

(こんな時に限つて頼るのが架空の存在とは)

行き先は彼にとつて“もう1人の父親”を葬った場所であった。  
現実逃避…正直、今の状況から逃げ出したかった。

自分から、カインから、身内から、全てから逃げたかった。  
そんな浅はかな事を考えていたら何時の間にか出口まで歩いていた。

『おいでよ、セイシェル』

脳内に響いたのは彼を何処かへ誘う声だった。

（…君は何処にいるのだ…）

無意識に声に向かつて問い合わせてみる自分がいた。

『セイシェルが一番知っている場所だよ』

声は問い合わせた後、笑つて言った。

『初めて答えてくれたね、セイシェル』

嬉しそうな声が返つてきて彼は困惑した。

思えば誰からも“セイシェル”と呼ばれなくなつて密かに嘆いた時  
も、声の主とカインは自分が忌み嫌つていた“ホーリア”ではなく  
“セイシェル”と呼ぶ。

希望を持てない自分のただ1つの希望だった：もう母もいないのに。  
自分を置き去りにした母を許せないくせに本名だけは大事にしてい  
た。

（母上…）

心の中だけで言つ。

母に置き去りにされた以来、決して呼ばなかつた。

蔑むように“ソフィア”と呼んでいた。何年か経つて自分が一桁の

年齢になつた際、今度は“シリウス”が自分のそばに来た。

何故来たのかと罵り、お前の顔など見たくないと叫び、母を返せと迫つた日々も懐かしい。

シリウスは何も言わなかつた。謝りもせず、言い返したりもせず黙つて聞いていた。

それが当時の自分には理解できず“何か言え”と叫んだ。

今なら理解できる。シリウスが黙つていたのは償いだつたのではないかと。

「シリウス…」

罵られても泣き叫ばれても恨み言や小言をぶつけても、シリウスは弁解しようとも謝罪しようともしなかつた。

ただ、一度だけシリウスが自分に向かつて怒つたことがあつた。

『…カイン、幸せなんだろうな。何も知らないで』

シリウスはいつも親子3人で撮つた写真を持ち歩いていた。その写真を見て、不意に言つた。

『なあ、あんたとソフィアが逢い引きして生んだ子供がカインだと知つたらどうなるかな? ソフィアには子供も夫もいたのに』

バンッ!

言い切る前にシリウスに打たれた。強い衝撃を受けても倒れなかつたのが幸いだつた。

『…セイシェル、カインには…カインには手を出さないでくれ』

頬を押さえる自分に向かつてシリウスは言った。  
もう、我慢の限界だつた。

『黙れ…貴様になにがわかる…！

ソフィアのせいで…あんな女の息子に生まれたせいで惨めな思いを  
したのに…カインに手を出すな？笑わせるな！』

『……』

『ソフィアは死んだ、貴様を庇つて死んだ。

憎しみの対象を失つた私は誰を憎めばいい？

カインしかいない…あいつさえいなければ、カインさえいなければ  
良かつた！

貴様も、カインも、ソフィアも絶対に許さない…！』

カインさえいなければ良かつた。

何もかも恵まれて育つたカインが嫌いで仕方ない。

一方、自分は努力に努力を重ねながら実力をつけた。

愛されていて、才能にも恵まれていて、親友もいるカインが嫌いだ  
つた。

ソフィアとカインに対する憎悪だけが努力の支えだつた。

『……』

憎悪のままに吐き捨てた言葉を聞いていたシリウスの表情はどこか  
寂しそうだつた。

しかし、シリウスの寂しそうな表情に構うことなく自分は早足で部  
屋を出て行つた。燃え上がつた怒りを鎮めるため、少し歩いていた。

案外、怒りの対象から離れたらすぐに鎮まるものだと実感した後、来た道を通りて部屋に戻った。

『…セイシェル』

部屋に戻って、驚いた。

『ラーナ、何でラーナが此処にいる?』

そう、叔母であるラーナがシリウスの部屋に入っていたのだ。それも、険しい顔で此方を見ていたのだから更に驚く。

何の話をしていたのだろうと気になつたがシリウスは薄く笑つて

『セイシェル、君は此処にいちゃいけない。もう少しだけ、な?』

と言つた。

その笑みの裏にある何かを知りたいが、知る術もない自分は頷いて飛び出すしかなかつた。

かれこれ、一週間も続いたのだ。

\*\*\*\*\*

一週間経つて、臆病だつた自分を漸く奮い立たせた。その位、シリウスとラーナが何を話していたのか知りたいと思つたのだ。自分の事であるのは分かる。ラーナがシリウスの元にわざわざ来て、自分に席をはずさせて話をするのだからそれ以外考えられない。

『シリウス』

いつもならシリウスが此方に話しかける。

(セイシェル、昨日はちゃんと寝たか?)とか(遅くまで勉強に熱心なのは感心するが、もう少し早く寝ないと体を壊してしまひよ)とか、本当の親のように声を掛けるのだ。

その事に、『悪いと母を奪われた怒りとでシリウスをきつく睨みつけ』るのだが、内心ではシリウスを本当の父親のように慕い始めていた。

『何だい、セイシェル』

まだ。

自分に對して優しく微笑むシリウスを田の前にしたら言えない。言つたらどうなるのだろうと、考え始めたら頭が痛くなる。

『え、聞きたい事が、ある……』

聞きたいと言う思いと、聞いたらいけないのではないかと言う不安とで、歯切れが悪い上に途切れたものになってしまった。シリウスも何かを感じたのだろう。

『セイシェル……』

まだ。

カインに対する憎悪を吐き捨てた時に浮かべたシリウスの寂しそうな顔が今、そこにある。

『……それだけは、許して欲しい。君には何も言えないんだ』

許して欲しい?

何も言えないのに、許して欲しい?

……お前が、お前が。

…お前がそんな事を言つのが、シリウス…！

『何も言えないのに、何も教えてくれはしないのに、許して欲しいとお前は言つのか……？私にも聞く権利はあるだろ？ラーナは私の事をお前に話しているのに、お前が私に言わるのはどうしてだ？』

『セイシエル…』

『お前の顔など一度と見たくない…』

『…セイシエル！』

『誰も教えてくれない！私が何をしたのかも！母もラーナもお前も私には何も教えてくれない！突然私を疎ましく思つて、突然私の目の前から消えて、突然弟が出来た…！身勝手だ、母も父もラーナもお前も！』

せり上がる感情をシリウスに向かつて叫んだ後、そのまま飛び出した。

シリウスもラーナも、アルティ家に関わること自体が嫌で体力が続く限り走り続けた。

何時の間にか此処まで走つていたのか。

自分が来ていたのは大聖堂ではなく小さな村だった。

しかし、変わらないのは小さいながら立派な教会があるということ。

“此処は神という架空の存在に頼るしかできない滑稽なところ”

考えてみたら可笑しくて笑つた。

自分から動かない癖に不平不満を抱いて頼る様が滑稽で、滑稽だと

思つ自分もまた架空の存在に頼らうとしているのだから笑うしかない。

一方、すれ違う村人は自分の姿を見るなり怯えたり逃げ出したりしていた。

当たり前か、自分は権力者なのだから。

もう、怯えられることにも罵られることにも孤立することにも慣れた。

……伴う痛みにはいつまで経っても慣れてはくれなくて知らず知らず憎悪に泣き叫んでは歪んでいく。

考えまいとしても無理で、どうしても色々と考えながら教会の中に入った。

何となく予想していた。此処は人がいないのではないかと。答えは予想した通り、誰もいなくて悲しみに暮れるには丁度良い場所だった。

家では吐き出せない悲しみを吐き出すために泣いて、心に渦巻く憎悪を吐き出して泣いた。

こんなに泣いたのは久し振りだ。いつも切り裂かれる痛みに耐えて、何時しか泣くという行為さえ忘れていた気がする。

枯れた頬に伝う涙に心地よさを覚えはじめ、何時までも泣いていた。

\*\*\*\*\*

……たの？

『……ひ』

誰かに呼ばれた？

慌てて顔を上げようとすると机に伏せて泣きすぎたせいか気分が悪かった。

『大丈夫か？』

視界がぼやけて見えないが、心配そうな目で此方を見ているのは…。

『…誰？』

『…大聖堂の酒場で一度だけ会った事があるよ。大人に冷たくされて泣いていた』

『ああ…君か』

そう、目の前にいるのは酒場にいた少年だった。

“自分は冷酷無比な当主の息子である”

アルディ家に仕える一部に自分は毛嫌いされていた。

前当主の次はシリウスが時期当主だったのに、父が無理矢理奪つて当主になつたから、当然その息子も気に入らないのだろう。自分を見てくれる人はいなかつた。

母はシリウスと結ばれる筈だったのに、当主によつて無理矢理身ごもり生まれたのが自分。

母に疎まれ、置き去りにされ、傷ついた心に拍車を掛けるような使人や同級の非情な言葉や暴力に耐えきれず逃げ出した。

少年と出会ったのはその時。

(どうしたの?)

苛められたと言つたら慰めてくれた。

“あの子たちの悪いことは気にしなくていいんだよ”

自分は頷いた。

それから少年とは酒場で何度も出会いと一緒に遊んだが、ある日突然消えてしまった。

その時は悲しくて一日中泣いていた気がする。

『君か…引つ越していたんだね、知らなかつた』

『引つ越した…うん、まあ引つ越したのかな?』

少年は困つたように笑っていた。困つている理由が分からず慌てて謝る。

『もし悪ここと言つてしまつたら』みんなさ

『大丈夫だよ、ちょっと悩んでいただけだから』

自分の謝罪に対し少年は頭をかきながら笑つた。

本当に無邪気に笑うこの少年を羨ましく感じてしまつのは、自分にはこんな無邪気な笑顔を浮かべることなどできるはずがないからだ。

『君はいつも謝つたり考えたり怯えたりしているね』

不意に言葉を発した少年に自分は思考を停止させ、少年を見た。

『君はそんなに怖いのか？孤独が』

『えつ……？』

不意に言い放たれた言葉と問いかけに何と答えたらいのか分からず戸惑つた。

きっと間抜けな顔をしているのだろう。自分を見る少年は可笑しいと言わんばかりの笑顔を浮かべていた。

何故だらう、理解できていない。この笑顔が、とても怖かった。何故恐怖を感じるのか、もう分からぬ。

混乱する自分に少年は手を伸ばした。

『大丈夫さ、君には僕がいるからね』

冷たい手が触れた。

まるで、人間とは思えないほどの冷たい手。

『何者だ…君は』

震える声で問い合わせてみたら少年は更に笑った。笑うだけで何も言わなかつた。

その後、自分はどうなつたのか

……。

ル セイ ル …… ！

「セイシェル！」

「……」

大声で名前を呼ばれ、ハツとした。

今まで自分は何を考えていたのか、シリウスと暮らした短い時間や少年との話を思い出していたのだ。

目の前で叫ぶ彼女、ラーナの声さえ聞こえないほど。

「ラーナか、どうした」

慌てて取り繕つてみるが、ラーナは怒っていた。“何度も呼んだのに気付かないとはどういうことだ”と面wanばかりの眼差しで。

「いや、何でもないわ」

しかし答えたくなかった。何もかも忘れない。シリウスのことも少年のことも忘れない。

……もう、会えないのだから。

「まあいいわ、お兄ちゃんが呼んでいるから早く来てね。来なかつたら私が五月蠅<sup>アマミヤ</sup>へ言われるから」

お兄ちゃん…父上のことか。

「ああ、直ぐに行く」

お兄ちゃん…お兄ちゃん…お兄ちゃん…。  
脳内で何度も反芻する。

ああ、もう一つ忘れたいことがあった。

『お兄ちゃん、拾ってくれてありがとう』

まだ幼かつたカインが母に連れられて大聖堂に遊びに来た。  
転がったボールを拾つて手渡した時のカインの無垢な瞳と声。

（今すぐ忘れたい！忘れさせてくれよ…）

今も昔も変わらない無邪氣な瞳と笑顔が貫く。

シリウスと過ごした日々、少年との会話、カインとの出会い。

それは、思い出を持たない自分の唯一の思い出。

## 第十三節・墜落する小鳥達は歌つ（前書き）

支配われ、墜ちていく。

一度嵌つたら抜けられないと分かっているのに、身を委ねて墜ちていいく。

徐々に大きく響き渡る破滅の歌。その歌は、いつ止まるだろ？

## 第十三節・墜落する小鳥達は限つ

一方、アルティ家にいたカインは戸惑つていた。

一つ目はイリアの護衛として正式に採用されたこと。  
訓練生として今まで動きやすい服装だったのに、良く言えば華麗、  
悪く言えば派手すぎる服を身に付けていたことに戸惑つた。

二つ目は兄のそばにいること。

今以上に兄の近くにいるという現実。

覗いてはいけないものを覗くことができないという歓喜と恐怖。

イリアに対しては守りたい、愛したいという感情がある。兄に対しては救いたい、共有したいという感情がある。

兄に対しては純粋なようで歪んだ感情を抱いている気がする。

もつと憎めばいい。自分だけを見てくれるなら、もつと憎めばいい。

…自分を憎んで、壊れてしまえばいい。

どうして兄に対してそう思うのかは分からぬが、イリアとは違う  
好意を抱いてしまったのかも知れない。

“兄がほしい、兄を返してほしい、兄に会いたい、兄と一緒にいた  
い”

どれも叶わぬ願いなら、自分を憎んで、憎しみのあまり壊れてしま  
えばいい。

壊れたあなたを助けるから。

なんと便利な口実だろ？

そして自覚する。自分は兄を欲するあまり壊れてしまつたのだと。

『セイシェル、イリア様のそばにいる俺は憎いかな？  
憎いならそれでいいよ』

兄には流れているだろ？か。自分と同じ狂気が流れているだろ？か。  
流れていたら、いいのに。

でも彼は純粋だとカインは思つた。

「カイン、いるの？入つてもいい？」

「ンン」とノックが聞こえてきて、問いかける声がして我に返る。

「イリア様…！？え、ええ、どうぞ」

イリアと会つのは何となく気が引けたが、入ることに断る理由もなく、彼女を部屋に招き入れた。

「『めんなさいね、休憩中だつたかしら？』

中に入るなり彼女はこう言つた。

…ああ、そうか。

彼女は自分がこの時間帯は訓練に励んでいると思っていたのだなと  
カインは知る。

「いえ、違うのです。セイシェル様からお聞きにはなりませんでし  
たか？」

「いいえ。それにお兄様はシャール君と一緒に行動しているから、お話を聞く機会がなくて……」

……なんだと？

カインは果然とした。自分が護衛になったことを彼女が知らないという事実など最早どうでも良かつた。

シャールがセイシェルの下についた。これはカインにとつて大きな衝撃だった。

（シャールはセイシェル様を使ってアルディ家に復讐しようとしている）

アクロイドはアルディ家によって抹殺されたのだ。シャールはセイシェルを介して復讐を行おうとしている。

（でも、セイシェル様なら見抜けの筈なのに）

どうして容易く懐を許したのだろう。

カインは悔しかった。セイシェルには近寄ることもできないのに、シャールはいとも簡単にセイシェルに近寄ったことが。

「カイン、顔色が悪いわ……大丈夫ですか？」

イリアが心配そうに見つめており、はっとしたカインは咄嗟に作った笑顔で頷いた。

「何かあつたら遠慮なく言ってね。あと、無理はなさらないでね」

「……！……何でもないですよ、イリア様。申し訳ありません」

カインはまたしても謝罪した。彼はとても生真面目なのだろう、まだ自分は何もカインに言つていなかから気にしなくて構わないのに。

イリアはそんな彼を見て苦笑しつつ

「いいのよ、気にしないで。それよりお茶にしませんか？」

と言つてカインを誘つてみる。

「や、そんな」と……それにあ……私はイリア様をお守りするという任務がありますし……」

やはり彼は生真面目だった。何でも真面目に応えるカインに益々想いが募つていくのが、イリアには分かった。

「じゃあこれも任務ね。少なくとも童話ではお姫様のお誘いを拒否した召使いは見たことないわよ。だから、カインも私と一緒に……ね？」

童話……久しく聞かない単語を彼女から聞いたカインは笑いながら言った。

「喜んで、お姫様？」

「まあ、カインったら。本当にやつてくれるなんて思いもしなかつたわ」

「お姫様の御要望ですから」

カインは笑い、それにつられてイリアも笑う。仲睦まじく寄り添い、笑い合う2人。許されないことは知りながら止められない。

互いの欠けたものを埋め合つよつに、2人は急激に近付く。

＊＊＊＊

シャールたちがいた村から離れた場所でラルクとシャールはひたすら歩いていた。

2人はひたすら沈黙し、道を歩いていたが、目的地が見えてきた。そこで初めてシャールはラルクに対する疑問を口にした。

「ラルク、君は」

「なんだい？」

ラルクはつこりと笑つてシャールを見つめた。

ふわりと柔らかな笑顔にホッとしたシャールは胸を撫で下ろして聞いた。

「ラルクは他の人とは違う。君に会つとき、いつも感じていた。レディンからも感じるものがあるけど、君からはもつと強い何かを感じる。

上手く言葉に出来ないけれど、レディンやラルクを見ると苦しくなる

……

途端にラルクは微動だにしなくなつた。

聞いてはいけなかつたとも思い、聞かなければ良かつたとも思い、思考がぐるぐる回る。

シャルが肩を落とし、俯いているのを見たラルクは口を開いた。

「富仕えは辛いものや、シャル」

「…アルディ家に仕えるのがいやなの？ラルクも…レディンは嫌がつていたけど」

「ああ、毎日上の人間の顔色を窺わなければならぬ……幼い頃からそれを叩き込まれる。

まだまだ遊びたい盛りの頃から『服従』することを叩き込まれ、嫌になるときもある。

少なくともレディシア君は辛いと思つよ……」

ラルクは目を細め、どこか遠くを見つめていた。

彼の話を聞いて、幹部たちの事など何も知らなかつたと振り返つて自分が如何に滑稽で無力なのかを思い知る。

「俺、レディンを利用していた……何も知らなかつた……」

シャルは罪悪感からポツリと呟いた。そばで聞いていたラルクはにっこりと笑い

「君が謝る必要はない。君が愛していた人を失つた。アルディ家が奪つたんだ、アルディ家を憎むなど言う方がどうにかしている」

と言つた。

母以外は誰にも認めてくれなかつた感情をラルクは認めてくれた。

まだ、やり直せるのだろうか。ホーリアに勝負を挑み、引き返せないと思つていたけれど、やり直せるのだろうか。

「戻れるかな、俺は引き返せるのかな

シャールの問い掛けにラルクは首を大きく縦に振つて頷いた。

「こくらでもやり直せるよ、シャール。君はまだ若いのだから

ラルクの手の温かさを感じながらシャールは薄らと微笑んだ。この手の温かさがとてもいとおしくて心に染み込んでいくようではどういうものなのだろう。

湧き上がるこの温かい感情を何と呼ぶのだろう。

「ラルク…俺は変われるよね

「ああ、君は変われるよ」

シャールが泣きやむまでラルクは微笑みながらシャールの肩を抱いた。

ラルクの肩に抱かれながらシャールは思つた。

この手の温もりを忘れないよつて、ラルクの涙を忘れないよつて、何よりレティシアの優しさを忘れないよつて。

「じゃあ、行こつか

ラルクはシャールの前に立ち、ハロルドのところへ向かつた。

\*\*\*\*\*

一方、アルディ家より離れた場所、エタイト。レンガ造りの建物が連なり、アルディ家の権力者達が集う大聖堂とは違つて小規模ながらも多数の人が露店を開いている。

そこから少し離れ、煙が立つている家の前で男が立っていた。

「……ラルク君は大丈夫だろうか」

そう、ラルクが言つっていたハロルドである。

元々は大聖堂にいたが、ラルクの勧めでエタイトに戻つて来たのだ。

「ラルク君ならシャール君を此処まで連れてきてくれるとは思うが、彼まで狙われたら……」

ハロルドが心配するのも無理はない。

自分やシャールに協力してくれているが彼もアルディ家の幹部見習いだ。

何よりラルクや彼に関わる者達に目をつけられたらと思うと気が気でない。

アクロイドもアルディ家の方針に逆らつてああなつたのだから。例え子供であろうと容赦はしないだろう。

様々なことが頭に浮かび、ハロルドは落ち着かなかつた。ラルク達を待つのも限界だつたが、今ここで動くと自分だけでなくラルク達も危なくなるのは明白だつた。

「どうしたらいいのだろう……」

彼らを迎えて行くべきか、今ここで待つべきかと考えたら後者の方

が良いのは誰でもわかる。

それにシャールのいる村からアエタイトに来るまではかなりの時間  
を要する。

焦りすぎだとハロルドは自分自身を戒め、ラルク達を待つことにし  
た。

\*\*\*\*\*

ハロルドが彼らを待ちかねている頃、ラルクとシャールは必死に歩  
いていた。

「馬車が走つてないのは致命的だつた」

ラルクはそう言つて肩を落とすが、アルディ家から身を隠していた  
のだから馬車など走つているわけがない。

「前までは走つていたけど今は走つていないんだ。それに、馬車を  
走らせたら自分達の居場所をアルディ家に教えてしまうから」

「まあ、それもそうか。そう考えたら疲れるけどアエタイトまで歩  
くのが正解だな」

そう、アクロイドが死ぬ前までは走つていたのだが、彼の死を聞い  
た後は此処までの馬車を走らせなくしたのだ。不便ではあるが仕方  
ないと諦め、アエタイトまで歩くことになった。

早く行かなければと思い黙つて歩こうともしたが、やはりラルクの  
性には合わなかつた。

それにも、どうしても聞きたいことがあつたからだ。

「シャール、少し聞きたいことがあるけどいいかな」

「うん、なあに?」

シャールは頷いて続きを言つよつラルクに促した。

「カインってやつ、村にいるよな?」

何故その質問をするのかとシャールは疑問になつた。  
カインとラルクは同じ年であり、アルディ家の幹部実習や武道訓練  
も一緒に受けているだから、カインの事情はある程度把握している  
はずだ。

「うん、村に住んでいていたよ。今はアルディ家のほうにいて帰つ  
て来る機会もなくなつたけど」

「……そつか。いや、あいつ……なんか最近様子が可笑しいからな  
あ……いや、悪かつた。」ごめんな

そう言つてラルクは急に黙つて歩き始めた。

いきなりカインのことを聞かれ、知らないと言つたら歯切れの悪そ  
うな返事をしたラルクにシャールはまたしても疑問を覚える。  
彼は俺達を送るために此処に来たのではない、他に理由があるはず  
だと思った。

もしかして、彼が此処にやつて来たのはカインのことなのかも知れ  
ない。

考え始めたら何が何だか分からなくなつてちらりとラルクの顔を見  
てみた。

(険しい)

いつでも陽気で笑顔の耐えない彼からは考えられないぐらい真剣で

険しい顔だった。

カイン……。シャールは声にならない声でぼつりと呟き、無言で歩くラルクの後を追った。

アエタイトまではまだまだ遠く、酷く疲れた。聖堂に行つた時には感じられなかつた疲れが体を襲つ。

いつからこんな風に疲れを感じるよつになつたのか。この疲れの源は何なのか。

アルディ家に関わらなければ良かつたのに。

アクロイドが関わらなければ、きっと幸せになれたのに。

シャールは眉間に皺を寄せ、歩き始めた。

＊＊＊＊

「ふう……」

溜め息をつくのはイリアだった。

溜め息をつく原因は唯一つ、カインはいつもよそよそしい。理由は何となく分かるが、はつきりはしていない。しかし、セイシエルが関わっていることだけは明白である。

それとも衝動的にカインにキスしたことを気にしているのだろうか。衝動的に行動を起こすのは悪い癖だとよく言われたものだ。

本当に自分はアルディ家の血が流れているのだろうか。あの行動はお金持ちのお嬢様がする行動ではない。どちらかと言うと下品で軽蔑される行動である。

カインを見ていたら得体の知れない感情がどんどん膨らんで、爆発してしまつた。

「……お兄様に聞いてみようかしら」

カインのことが知りたい。彼の全てが知りたくて堪らない。ぶつぶつとわき上がる感情は止まることを知らない。それを止める術も分からず、落ち着かない様子で彼を待つこと数分。

「あ、イリア様」

カインが戻つて来たのを知り、物凄い勢いで立ち上がってしまった。イリアは恥ずかしくなり、座り直した。

「あ、カイン……あの」

「どうかしましたか？イリア様、セイシェル様がお呼びのようですから、晩食が終わりましたら直ぐに……」

どうやらカインは気にしていない様子。少なくとも感情を表に出さないよう振る舞えるらしい。

自分よりも年下なのに大人っぽいことを知り、イリアはがっくりとしてしまった。

不思議というべきか、見えない何かがあるから引き付けられるのか、カインには惹かれるものがある。自分も引き付けられてしまったのかも知れない。

「……イリア様？」

すっかり黙り込んでしまったイリアを見たカインは心配そうな目で見ていた。

「あ、」めぐなさい。ぼーっとしてしまつていて。呼びましたか?」

「い、いえ……落ち込んでいらした様子ですので……」

カインは薄く笑いながら再び部屋の掃除に戻つた。

(……嬉しい)

イリアは素直にそう思つた。嬉しいと感じた。相手をいちいち意識してしまつて、離れない。

これが、恋なのか。  
恋……それはとても綺麗で美しく、とても恐ろしい。

## 第十四節：闇を纏つ青年（前書き）

力になりたいのに、なれなくて。

泣いて、泣いて、啼いて、崩れ落ちた。

支離滅裂になつた思考に新たな悲しみを覚えさせられ、ついに泣き崩れて壊れた。

光に住む僕と、闇に住むあなたの心が一つに重なり、創られた世界は歪む。

## 第十四節・闇を纏う青年

兄に呼ばれたということを知り、イリアは急いで向かう。あまり言いたくないが兄が可笑しいと彼女は思っていた。

普段から何も話さないが、最近は更に口数が少なくなっている。それだけならまだいつも通りなのだが、違うのは表情に影があること。何時からだろう、彼の顔に影が見え始めたのは。

（……もしかして、カインのことかしら）

長い間アルティ家を離れていたイリアだが、事情位は知っている。

勿論、カインが自分の弟であることも知っている。

知っているが、家族として全く時を刻んでいない彼女からしたらカインが弟であることなど理解出来るはずもない。

世間的にはまずいが、退くつもりなど全くない。それにカインと自分は全く似ていらない。しかし、兄とカインの共通点を見つけられるわけでもない。

いつだつてそう、兄と会つときは様々なことを考えてしまい、彼のいる部屋まではあつという間だった。

本家は2つあり、兄は2つ目の中にある最も離れた部屋にいた。今までの部屋とは違い、深い茶色の重苦しい扉を目の前にしたイリアは思わず腰を引いてしまった。

今までこんなことはなかつた。戸惑いはあつたけれど、恐怖を感じることはなかつた。

（お兄様は何を考えていらっしゃるのかしら……）

そう言えば兄のことがよく分からないとイリアは思った。何を考え

ているのかも、自分のことをどう思つてゐるのかも。一番氣になるのは同級生から暴力を受けていたカインを見ていた時の顔。安堵とは違う何かを感じたのは事実。あれは、一体何なのだろう。

自分は様々な感情に一々振り回される気がする。

今更ではあるが、アルディ家に来た途端に様々な感情に振り回され、疲れ果てていた。

あの少年…シャールは振り回されとはいひだらうか？

不意に、初めて彼を見た時の事を思い出した。

年相応の子供らしい顔立ちではあつたが、時々此方が驚くほど無表情になる。

いや、正しく表現したら人形のような表情だった。兄と同じ、人形のような表情をして何処かを見ていた。

何処かという表現も正しくないかも知れない。

彼の瞳に、光などないのだから。

「……お兄様、入つてもいい？」

意を決して扉越しから声をかける。

「……ああ」

直ぐに兄から返事が返つて來た。イリアはノブを回して扉を開き、中に入った。

「……お兄様、お話とは？」

そつ言いながらもイリアは兄が何を言おうとしているのかわかつてしまつた。そして、恐れおののいた。

(怒りを露わにしている)

どうしてだろう。

何故彼が怒りを露わにしているのか、そこだけは全くわからなかつた。

\*\*\*\*\*

一方その頃、漸く険しい道を越え、エタイトに続く街道を歩くラルクとシャール。

ラルクは相変わらず黙つていたままで、何か彼の気に障つてしまつたのではないかとシャールは不安になる。

「……ホーリア様が……」

不意にラルクはぽつりと呟き、シャールは目を見開いた。  
そして彼は気付いた。シャールがとても不安そうな表情で此方を見ていることだ。

「シャール、ごめんな。ずっと考え方をしていたから……」

「そつか……ホーリアがどうかしたの？」

「……シャール、カインの事は知つているだろう」

「うん」

シャールが頷いたのを見たラルクの表情は相変わらず重苦しい。  
その理由が何であるかはラルクのこの後の言葉ではつきりとする。

「ホーリア様が、カインの兄であることは知つているかな」

……知らなかつたと言つのが本当のところである。しかし、そこでシャールは思い出した。

（……人気のない刑場の跡地に向かう時だつたような……ホーリアとすれ違つた時）

そう、家に戻る自分とレディシアは反対方向に歩くホーリアを見た。もしかしたら、あの時ホーリアはカイン達のところに行つたのだろうか。

「……知らなかつた……」

シャールはぽつりと呟いた。勿論、カインの兄がホーリアであることを知らなかつたと言う意味での呟き。もう一つはホーリアが虚ろな目をしながら歩いていた理由。シャールが考える間もラルクは話を進める。

「カイン……実際にアルティ家に来たのはホーリア様に会つ為じやないのかな。でも人はカインを近付けようとしないだろう。何故なら彼は『死の子供』だからね」

「死の子供？」

シャールは理解できなくてラルクに問いかけた。

それが、ホーリアの虚ろさを象徴せるものなのだろうか。きつとそれだけではない、あくまでもそれはきつかけに過ぎない。彼の心を破壊した原因があるはずなのだ。そう、直接破壊した原因が。

「……彼は、ディアルト様の実の子供で、ソフィア様が母親なのだ

けど……彼は生まれるべき子供ではなかつた。本来生まれるべきではない子供が生まれたら、光がなくなるつて言われているから

……「ラルクの言つている意味が分からない。シャールは理解できないと思うと同時に怒りがこみ上げてきた。もしかしたら、ホーリアも理解できていないのに、絶えず疎まれ続けたのだろうか。

（許せない）

「……アルディ家の血を引く子供がたくさんいたらアルディ家の秩序が乱れるらしい。権力を巡つて争うことを恐れているからな……なのにディアルト様は……」

そんな大事なことを何故教えてくれるのだろう。ラルクは流暢に話すが、本来これは秘密ではないか。シャールの不安を察したラルクはにっこり笑つて言った。

「秘密でも何でもないさ。みんな知つてる、ディアルト様が自分の血を引く子供を当主にして更に権力を手に入れようと画策していることはね」

……本当に？

本当に、そうなのだろうか。

ラルクは、自分の身を犠牲にして教えてくれているのではないか。彼が直接知るのは難しいだろう。彼の後ろに誰かいると考へるより外はない。恐らくハロルドなのだろうが。

自惚れかも知れないがハロルドとラルクは自分を犠牲にして協力してくれているのだと思つた。

自惚れなら良い、いや、自惚れであることを願わずにはいられない。もしも自分に協力したと、ディアルト達に知られたら末路はアクロイドと同じだ。

「ホーリア様はカインを追い詰めるだろう。恐らくイリア様も同時に……。ディアルト様はホーリア様の怒りを利用しているに決まつてる。

だから、ハロルドさんに協力してもらつてある方を保護した」

早歩きで進むラルクだったが、ぴたりと止まり、シャールに向かつて言った。

「シャール、君は全てを知る義務がある。アクロイド様は全てを知りうとして逝つてしまつた。

君は、アクロイド様の意志を継いで全てを知るべきだよ」

そして、ラルクはシャールだけに聞こえる程の小さな声で言つ。

（例え、残酷な結末が待ち受けているとも、君は逃げられない）

アルディ家の事情、ラルクの言葉、そんなものは先程の言葉で全て流れた。

（…………やつぱり）

逃げ場など、どこにも存在しないのだ。アルディ家はアクロイドの息子であるシャールをどこまでも追いかけるだろう。例え、父に無関心であつても、絶対的な権力を手に入れる為には邪魔な存在は全て排除しなければならない。

「でも、君は大丈夫だよ。逃げられないけれど、捨てる」ことはできるから」

にこりと笑いながら残酷な結末と救いを与えるラルクは味方なのか。彼の言葉全てがシャールの行く道を表しているようにならなかつた。

（ラルク、レディシア、ホーリア……みんな、みんな……）

ふと、顔を上げてラルクを見つめていたが、自分は選択を迫られている。分かつていて。

逃げるということは自分が守るべきもの全てを捨てる事であり、ホーリアに挑むということは自分を投げ捨てる事である。

（どちらもない道はないの？）

初めて、アクロイドの息子として生まれたことを悔やんだ。そして、改めて自分が無知で無謀で、無力であるかを思い知らされた。

一方、シャールの隣を歩くラルクは曖昧な答えしか与えられない自分に嫌悪していた。

アクロイドの死に隠された真実を探ることから引いてほしいと思う一方で、どんなことがあっても引かないで真実を突き止めてほしいと思う。

アルディ家に関わらなければ自分もシャールも、カインもアクロイドも、誰もかも苦しみを抱える事はなかつたのに。大人だつたら、自由に変えられたかも知れないのに。

ラルクは自分が子供であることを悔しく思つた。何よりシャールを守れないことが堪らなく悔しかつた。

（もう考えたらだめだ。ハロルド様に会つてから、シャールが決めるべきだ）

ラルクは今までの思考を振り払つようて首を横に振る。全てはハロルドが教えてくれるのだ。

アクロイドが何故アルディ家の幹部になつたかも、何故自殺したのかも、イザベラのこともシャールのことも何もかも。自分の役目はシャールの不安を煽ることではなく、彼をアエタイトまで連れて行くことだ。

ラルクは自分自身を叱咤した。いちいち考えてしまふのは自分の悪い癖だと苦笑し、不安そつについて来るシャールを見ながら言つた。

「俺、おかしいよな？」

「……いいや」

一瞬間を置いてシャールは一言だけで答えを返した後、言つた。

「いつもお喋りばかりしてはしゃぎあがなラルクのイメージしかなかつたから驚いているけどね」

「あ、そうか…あははは、いつもそういうのはいかないさ……」

ラルクは力なく笑つて返した後、シャールの手を引いて言つ。

「早く歩かないとアエタイトまで辿り着かないね。君と話すのは色んな意味で楽しいけど」

シャールはにこりと笑つて言い返す。

「うん、俺もラルクと話していると楽しくて……最初は疑つてごめんね、ラルク」

やはりかと、ラルクは苦笑しながら肩を落とす。  
普通はそうだらう。例え、幹部の息子で何も知らなくともアルディ家とは繋がつてゐる。

「疑うのは当たり前や、瓶が氣にする」ことはない。さあもつ少し歩こうか、エコタイトまでもう少しよ」

先ほどと同じように、力なく笑つたラルクにシャールは不安になつた。

ラルクの元気な笑顔が密かにシャールの心にあつたのに、今の力ない笑顔がとても気になつた。

\*\*\*\*\*

一方、ぼんやりと天井を眺めるのはレティシアである。  
シャールは何処かへ行つてしまい、隙を持て余していた。  
故郷で過ごす時間はあつという間に過ぎ、アルディ家に戻つて堅苦しい勉強をする日々……とても詰まらない、疲れてしまつ。

「シャールはずつと別行動だよな……ラルクさんと何処かへ行つてしまつたし……僕はどうしたらいいんだらう」

そんなことを呴いては溜め息ばかりついてゐる。故郷に戻つてラルクとシャールが出て行つて以来戻つていない。その後直ぐに両親が用意してくれた馬車に揺られながら戻つてゐた。

「もつと休みたいけどやうなきやな……」

ゆっくりと起き上がり、厚本を開き始める。

そこにはアルディ家の慣習やら理念やら規律やらがびっしりと詰まつたものが沢山あった。

「……こんなのは、どうやって理解したらいいの

一時は勉強しようと思つたが、結局厚本を読むのをやめて寝転がつた。

シャルは今頃どうしているだろう、ホーリアの側に近付いて以来シャールとは余り話していない。

ホーリアとはどうなつてしているのか、ラルクとはどうなつてしているのか、イザベラ達は元気にしているだろうか。

考え出したら止まらなくなる。

「気分転換でもしてこようかな

レディ・シアはそう呟いて立ち上がり、外に出た。幹部候補生は比較的自由に歩いても良いとされている。

勿論制限はあるが、召使や兵士達に比べたらずつと少ない。レディシアは中庭にでも行こうと決め、廊下を歩いた。

華やかな装飾に白く大きい扉が幾つも存在し、部屋の中央に螺旋階段がある。

そこを降りたら中庭である。

大聖堂と言つより最早宮殿に近い。昔は全て神を奉るところだつたから大聖堂と呼ばれるだけで、今は中心でもある。

出入り口である扉を押すと、これまた広大な中庭がある。相変わらず広大な場所で頭が痛くなりそうだ。中庭に行く人が多くて迷うことが少なかつたが、途中入り口は此処だろうかと思つたことも何度あるだろう…数えたらきりがない。

## 「座るつか」

中庭に思い切って突撃し、草村にペタリと座る。噴水や銅像…ビニカの絵画に描かれるような庭が目の前に広がる。

そこでまた一つ、ため息を零しながらぼんやりとする。

（シャール、会いたいよ。君に会つて、自由になりたいよ。今、とても泣きそうなんだ）

そんなことを思いながら空を見上げた。

空を見ると活発で頭が良くて自由なシャールに無性に会いたくなり、彼のハキハキとした声が恋しくなる。

自分には決して出来ない。

自由に動くことも考えることも積極的に動くことも出来ない。だからシャールに会いたい、会いたくて堪らない。

レディシアにとってシャールは憧れであり、逞しくも優しいヒーローだった。

でも今は会えないから、悲しい。

また一つため息をついて、ふと後ろを見る。

（……あれは？）

後ろを向いて、レディシアはハツとした。

金髪の少女に茶髪の青年……イリアとホーリアだ。

（ホーリア様にイリア様、一体何故？）

此処は彼らの場所なのだから気になることでもないが、気になつた。理由はいつもホーリアは一人で行動しているからだろう。イリアは

カインと行動していようと見ていたが、ホーリアとイリアが行動しているところは全くと言って良いほど見たことがない。そして、彼等が此方に向かつて歩いてくる。

（……ホーリア様の事を知つたら、シャールに何か言えるかも知れない……）

レディシアはそつと動き、見つからぬところに隠れた。他の少年達に紛れたら良かつたのだろうが、今日は勉強のため誰もいなかつた。

身を屈め、耳をすませた。すると間もなく、ホーリアの声がこちらに聞こえてきた。

「イリア、話とつのは他でもない。お前もわかつてゐるだらうが、カインのことだ」

「……わかつてゐるわ、カインと私は姉弟だから結ばれたらいけないといふことじょう？」

「……道徳心に基づいて言えばそうだがな……母もシリウスもラーナも同じようなことをしてゐるからどうもこい……今回は別のことだ」

「……何かしら」

イリアはパツと顔をあげ、ホーリアの言葉を待つた。

（……カイン側につくなら、お前もカインと共に葬り去つてやろう……私にとってカインは邪魔だ、目障りだ。忘れるな……あまり、度が過ぎないようにな）

「……お兄様」

イリアは顔を覆いながら帰つて行つた。ホーリアが何を言つたのか、イリアは何故顔を覆つて泣いたのか、全く分からぬ。レディシアは少し安堵し、肩を下ろしたが、ホーリアは早足でレディシアの方まで歩き、肩に触れた。

「……盗み聞きとは悪趣味だな、レディシア・キース」

その様子では最初から知つていたようだ……レディシアは自分が如何に愚かであることを知る。

ホーリアを欺くことなど出来ないのは知つていたのに、どうしてこんなことをしてしまつたのだろう。なにをされるのだろう……もしかしたら、しかしホーリアは手を放した。

(えつ……)

大事な話を聞き出そうとしたのにとレディシアは思つた。

しかしホーリアはまるで興味が無さそうな様子で、とくに咎めることもしない。だから不可解で恐怖心が増していく。

彼は何を考えているのか、頭が混乱する。分からなくて顔をしかめていたら通り過ぎようとしたホーリアが振り返つて言つ。

「レディシア、シャールを守つてやれ……闇に呑まれる前に」

## 第十五節・悪魔の覚醒（前書き）

いい子にしないと喰われるよ、僕の言つこと守つていい子でいてね

言つこと聞かない悪い子は、罰を引きて躰しなくちゃいけないな

躰をしても聞かぬなら、この子は僕の子じもじやないな

僕の子じもじやないのなら、僕を欺く悪い子だ

人を欺く悪い子は、僕が倒してあげなくちゃ

ああ悲しき哀れな兄弟よ

僕を欺いた罰により

君たち2人は朽ち果てるその時まで

あらゆる痛みに耐えなくちゃ

それが僕が君たちに下す罰なのさ

## 第十五節・悪魔の覚醒

自分の心は壊れた。

ただ、虚しくて、苦しくて、悲しくて。

壊れた心と身体の行き先は分からぬ。

鳴くことさえ忘れた鳥が静かに流した涙を受け止める術もない。

\*\*\*\*\*

この子ならシャールを救える。

ホーリアはそう思った。この子の瞳は嘘をつかない、嘘を許さないものだと感じていた。

闇に呑まれそうなシャールを、この子ならきっと救える。まだ幼いから分からぬだろうが。

「早く戻れ」

「……ホーリア、様？」

「責任は取れぬ、早く戻れ」

ホーリアの声さえ聞こえず、レティシアはぼんやりとしていた。

嘲笑うような、悲しんでいるような、喜怒哀楽全てが表情に現れるホーリアの笑みに、胸をかきむしりたくなるような痛みを覚えた。

(こんな笑顔、怖いよ)

恐怖だけではない何かで動きがとまる。この笑顔は一体何だらう、泣いてしまいたくなる。

「今の君の立場を考えろ。両親に叱られたくないだらう? 早く戻れホーリアは何故そんなことを言つのだらう。レディシアにはよく分からなかつたが、彼の笑顔が怖いということだけはわかつた。

「……あ、あの……」

「……何だ」

呼び止められたホーリアは眉間に皺を寄せて立ち止まる。彼の態度に圧倒されたレディシアは、やはり何も言えなかつた。

「……いえ、ありがと」「やれこまく」

ホーリアは黙つて去つていく。その後ろ姿が、とても寂しいとレディシアは感じた。

そして何より気になるのは、彼が何故シャールを守つて欲しいと言つたのか。

シャールよりも何もかも劣つていて、足手纏いでもある。そんな自分がシャールを守る事など出来るはずがない。

(僕には無理だ)

レディシアは呆然としたまま動かなかつた。ただ、彼の脳裏にはホーリアが寂しそうに笑う姿と、妹のイリアと二人で歩く姿が刻まれた。

(ホーリア……セイシェル)

果たして彼は敵か、味方か。

レディシアはある決意をした。きっとシャールの顔は青ざめるに決まっている。

でも、止まらない。

(行くしかない)

レディシアはゴクリと息を飲んだ。そして決意したように立ち上がり、急いで部屋に戻るため歩いた。先ずは勉強をしなければいけない。もう直ぐ両親も戻り、どこまで読み進めて覚えているか確認してくるだろ。」

(シャール……)

レディシアも自分の居るべき場所に戻った。決意を胸に、今は自分の果たすべき事をするために。

\*\*\*\*\*

長き道を歩いたラルクとシャール。時には険しい道にうろざりしたこともあるたが、歩き続けた。

最初にアベルの提案を無視したことがいけなかつたとラルクは思つたが、後悔しても後の祭りである。

道中は他愛もない話で盛り上がつたり、シャールが語る父親の自慢話を聞いたり、本家内にいる女子のことを話し合つて笑い合つたりもした。

つい先程までシャールはラルクの事を疑つていたのに、今では前からお互い親友ではないかと思うほどにまで距離は近くなつた。

「ラルクは家族とか、いないのか？」

話をしているうちにシャールはラルクの家族に興味を持った。明るく面白いが、意外と彼は自分を明かそうとしない。

知りたい。シャールは心からそう思つたが、ラルクは苦笑しながら

「そうだなあ、話すと長いからまた今度にしよう。さて、もう直ぐアエタイトだよ」

と言つて指を指す。

確かに街並みが見える…此処まで歩くのに何時間掛かつただろうと考えたが、意外にもそんなに時間が立つていらない事が分かる。あの村からアエタイトまでかなりの距離はあるものの歩き慣れている為か、予想していたほど時間はかかるない。

「そうだね。ハロルドさんも待つておるだらうから

シャールは前を見て歩き始めた。

きっとハロルドはラルク達が来るのを待ち切れない様子でいると思うと申し訳なくなる。それに最近のアルディ家が不穏な空氣に包まれていた。シャールが住むよ小さな村には馬車も走らなくなり、港町の船も乗船券が必要である。券自体は購入も可能だが前の2倍近くのお金が掛かる。したがつてシャール達では購入する事も不可能である。

(ジャンはどうしているだらう……)

広大な海を隔てた大陸の向こうにある、ライハード家の地にあるヘルナの村に住む少年が心配になる。

あの村にはあまり行かないが、父や母はヘルナの事を沢山話してい

たのを思い出す。緑が豊かで静かな村だといつ。

いつか、あの場所に行く事が出来るだろうか。

愛する母と父、親友のレディシアと共に、憧れたあの場所に。

ラルクとアエタイトを田指すシャールの脳裏に、幸せだった思い出が過つた。

\*\*\*\*\*

シャール達の目指すアエタイトではハロルドが暗い顔で座つていた。毎回訪ねて来るアルディ家の使徒の対応である。前は頻度が少なくなつたが今では毎日位此方に訪問する。

聞かれる事は揃つてカインの状況だ。

最近、カインはイリアと親密な仲になつてゐる。この状態は非常にまずく当主の思惑通りである。

(こ)のままではカインもイリアも消される。その次はホーリア様だ……あの2人が消えたらホーリア様も邪魔でしかならないからな。

当主は彼も必ず抹殺する。そうに決まつてゐる

シリウスとソフィアの間に生まれた子供の存在は当主にとつては邪魔でしかない。きっと幼かつたホーリアに「母は自分達を捨てて他の男と駆け落ちした」とでも吹聴したに違いない。

ホーリアの近くにいて尚且つ彼を説得できるだらシヤールに、どうしても彼を説得して貰いたいと思つてゐる。

不思議だがシヤールならホーリアを説得できるという確信がハロルドにはある。

(おや、いらっしゃったようだな)

足音がしたと同時にハロルドは思考を停止し、偵察する使徒に話しかける。

「どうでしょ？ 怪しいものなど私の家には御座いません。これだけ探し回つても疑いがなければ解放して下さいませんか？」

「可笑しなことを言ひ、貴殿はシャールだけでなくライハード家の連中とも関係がある。それにアクロイド殿とも親しい関係にあつた……疑いの目を向けるのは当然です。当主様は貴殿を警戒していらっしゃる」

「アクロイド殿が亡くなつてからは私はシャール様とは滅多に会う事もない。ブルネーゼ一家の事ですか？ ましてやライハード家の村に行く事も出来ないと言ひたジヤンに会つ事など出来る筈もありません」

ハロルドは事実を伝えるが使徒は相変わらず不審そうに見てくる。シャールやアクロイドと近い関係にあり、ライハード家の領地に住むブルネーゼ一家と親しい関係にあるのだ、疑つて当然である。勿論ハロルドもアルディ家に疑いの目を向けられるのは承知の上だが、此処まであからさまに調べられるのは我慢ならない。

これでは自分が反逆者であることを決めつけられていふやうなものだ。

「まあそんな嘘をよくもまあ言えたものですね。ハロルド殿、笑つていられるのも今のうちです……そのうちどうなつても知りませんからね」

使徒は嘲笑うよにハロルドに言ひ放つと足音を立てて出て行つた直後、バタンと大きな音がした。使徒が苛立ちに任せて扉を閉めた

のだと把握する。

「……死刑宣告でもされたようだな……どうせ私も長くない。シャークに全てを伝えて、後はカイン様とイリア様をお助けしなければならぬ。だからジャン……許しておくれ」

天井を見上げ、彼はそう呟いた。そして周りを見回すと先程の使徒が部屋を散らかした為、無残な姿になっていた。

「片づけるか……」

ハロルドは重い腰を上げ、部屋の片づけに取り掛かる。  
アクロイドと作成した論文や医学書、趣味で集めている本や服まで散らばっている。

そこまで疑われなければならぬ理由などある筈がないのに。考える限り当主は焦っているのだろう。

シリウスとソフィアは抹殺したが、まだフレアとレイが見つかっていない上にカインとイリアが親密な関係にある。  
イリアがカインを恋い慕っているのを利用して始末するつもりだろう。血の繋がつた姉弟の恋など許される筈がない。  
それにイリアは駄目だと言つても聞かないだろう。

何故なら彼女はカインを弟と言つ存在で過ごした事がない。カインも同様だ。姉弟と理解はしていても意識出来ないのだろう。

「ラルク達には早く来て貰わなければ」

1人呟いてハロルドは上を見上げ、また物思いに耽る。

自分はアルティ家に狙われている。

しかしそう彼等は自分を消すことはしないはずだ、まだ使い勝手のよい道具だから。

それに自分はまだカインとイリアを守る義務がある。フレアが身動き出来ない以上、2人は守らなければならない。

誰もいないこの空間で、ハロルドの思いつめた表情と溜め息の音だけが響いていた。

\*\*\*\*\*

ホーリアにはつきりと言われ、泣きながら自室に戻ったイリアだが、どうしたら良いのか分からなかつた。

何故カインを恨むのか、目障りだと思っているのか、イリアには全く分からなかつた。

彼女からしてみればホーリアがカインを目障りだと思っている素振りすらなかつた。

カインを助けたホーリアが何故？  
イリアの脳裏には疑問しかなかつた。

「……イリア様？」

扉越しからカインの声がした。いつものよつに彼は様子を見に来たのだろう。

「……カイン？」

イリアは上擦つた声で答えた。その声に異変を感じたカインは扉を開き、部屋の中に入る。

「イリア様？」

中に入った途端にカインは驚き、固まってしまった。

（泣いている……）

一体何があったのだろう。何故、彼女は泣いているのだろう。カインは黙つてイリアの傍に寄る。

落ち着いたらきっと何があったのか話してくれるだろうから、それまで待とうと思つた。

「カイン……！」

落ち着くべきか益々泣き出したイリアは縋るようになにカインに身を預ける。

いけないと分かっていても、彼女の腕を振り払つとも拒絶することもカインには出来なかつた。

そろり、そろりと。

恐る恐る腕を伸ばした。

華奢な身体を引き寄せて、抱き締めた。泣いている彼女を見ていられないで、何かに動かされるように彼女を。

（ああ、貴女に出会いたくなかつた。許されるはずはないけれど、今だけは）

一目見た時から彼女を愛してしまつたと自覚していた。

優しく笑う彼女を、黙つて傍に居てくれる彼女にいつの間にか惹かれ、愛してしまつたのだ。

（貴女が姉だと知つてゐるのに、姉と思えない愚かな弟を許して下さい）

しつかりとイリアを抱きしめるカインに応えるように、イリアも腕を伸ばしてカインの背中に手を回した。

許されるはずはない、祝福もされない。  
しかし、愛してしまったら止まらない。本能のままに、姉弟は踏み越える。

恋とは、愛とは恐ろしいものだ。

『あなたを……』

本能のままに互いを求め、ふと気がつけば夜が更けていた。

「カイン……」

イリアは身を起こしてカインを呼ぶ。

カインは既に立ち上がっている。

イリアの方には振り向く事もしなかった。否、出来なかつた。

触ることも愛することも許されないのに、愛し、とうとう触れてしまつた。

「私には、貴女を愛することは許されない。もつ、貴女の傍にはいられない」

後ろを向いたまま、カインが辛そうな面持ちでこいつ言った。

「……何故？私は貴方の姉だから？」

「……それだけではない」

姉であることも一つだった。しかし、もう一つカインにはイリアを拒絶しなければならない理由がある。

自分はアルティ家とは永遠に関わってはいけないと、カインは思っていた。

兄に対する罪悪感と両親を奪われた憎悪を抱える自分とイリアは交わってはならない。

兄は決して自分を許しはしないだろう。

イリアまで、自分の抱えるものの犠牲にしたくなかった。

「貴女には何も言えない。でも、もう貴女の傍には来ない」

はつきりとイリアを拒絶し、カインは足早に部屋を立ち去った。引き止める隙もなく、彼はいなくなつた。

「…………お兄様」

イリアは泣いた。

カインが自分を拒絶するのか、兄はカインを田障りだと言い放ったのか。

両方の事情や想いを把握できない弱さが憎らしい。

泣いた。

唯、自分の無力さに泣いた。

\*\*\*\*\*

いつものように部屋について、本を読みふけるホーリアは何かを待っていた。

何かとは、先程中庭にいたレディシア少年である。

彼は何かを言おうとした。でも、シャールのことが脳裏に過ぎたのか、何も言えなかつたと思われる。

キース家の一人息子は華やかな両親とは違い、かなり控えめで純粋な目をしていた。

年の割には冷静に行動出来るようだが、両親には逆らえないことと、アルティ家の慣習や規則、その他諸々に嫌気がさしてきたのだろう。見るからに真面目な少年が、勉強も規則も放棄して中庭でぼんやりとしていたのだ。

普段から遊び呆けている者なら氣にすることもないが、レディシアは規則や命令には極めて忠実である。健気としか表現出来ないぐらい、彼は忠実に従う。

そんな彼が勉強を放棄し、規則を破つた事が不可解なのだ。

コンコン

扉の音が響いた。

ホーリアは自分の予想が的中したとニヤリと笑つた。

「どうぞ」

返事をした次の瞬間

「レディシア、早く行くわよ」

聞こえたのは彼の母の声だった。

不敵な笑みから一転、予想外の事に驚きを隠せないホーリアは緊張で固まってしまった。

不意をつかれたホーリアのことなど知る由もないレディシアと母が扉を開き、中に入る。

「ホーリア様、レディシアがどうしても貴方に習いたいとのことで連れて参りましたわ。

是非とも貴方にレーディシアに色々と教えてくださいます？  
アルディ家の事を一番ご存知である、貴方ならレーディシアを……ね  
？」

見下したような言い方にホーリアは腹立たしくなる。

レディシア少年は知らないだろうが、ジェイソンやヘレンには昔から腹立たしい思いをさせられた事がある。

彼等は当主の後継者になれないホーリアをいつも陰で罵っていた。勿論、陰で罵つていただけなら彼等を不快に思つたりはしない。他の連中と違い、露骨に態度に出してきたのだ。

当主の後継者になり得ず、母に見捨てられたホーリアの有りもしない噂を広めた。

それだけではない。ソフィアが殺された理由も勝手に作り上げ、シリウスが謎の死を遂げた理由もホーリアの所為だという噂を広めたりもしていた。

有りもしない噂が広まり、ホーリアは孤立した。アルディ家の何処にも居場所がない彼は、アルディ家を飛び出して近くの村に逃げ込んだこともある。

「ホーリア様、後は宜しくお願ひ致しますね。はあ……もつと帰らなくちゃ。息が詰まりそうだわ！」

ヘレンは眉間に皺を寄せて早足で歩き、バタンと乱暴に扉を閉めた。

「……ホーリア様、申し訳ありません」

「気にするな。しかし君も母に散々文句を言われただろう？  
これに懲りたら今度からは案内する人を選ぶことだな」

「はい……」

レディシアは頷いた。

彼を見るホーリアは不可解だと思わずにはいられなかつた。あの横暴で腹立たしい両親から、どうしたら純粹で健気な少年が生まれるのか。

しかし、今はこのような事を考へている場合ではない。

彼が此処に來た理由を聞かなければならぬ。

警戒するレディシアにホーリアは言つた。

「……心配するな、誰も居ないから。用件は何だ、遠慮なく話してくれ」

笑顔でそう言つたホーリアに、レディシアは安堵を覚えた。そして、幼い少年はホーリアを真つ直ぐ見つめて問いかける。

「母と父にイリア様とカイン様を消せと命令したのはホーリア様ですか？」

……果然。

ホーリアは立ち尽くすしかなかつた。確かに当主に命令はされた。

しかし、これは内密ではないのか。

「レディシアつー匕つこう事だ！」

ホーリアは詰め寄り、レディシアに問う。

「ジョンソンとヘレンが、そつ言つたのか！？確かに、そつ言つたのか！？」

嘘であつてほしい。

これは、父と自分だけの間に交わされたものであつてほしい。  
しかしホーリアを嘲笑つよつて、彼を更なる絶望に突き落とすよつて。

」

「……え、ええ」

レティシアは詰め寄られ、戸惑いながらもほつときつと頷いた。

（……イリア……カイン………）

絶望の淵に突き落とされたよつな、苦しみと怒りに呑まれるよつな、  
そんな感覚だつた。

\* \* \*

「父上、どういう事ですか？」

当主と身内、当主に呼ばれた者のみが入る事の出来る部屋で、アイ  
シアは当主に問つ。

「カインとイリアを排除するとは……それもホーリアではなく、キ  
ース夫妻に頼むとは」

アイシアは不可解でならない。ホーリアに命令した筈の当主が、キ  
ース夫妻にも同じ事を頼むのが。

「……アイシア君、君にはわからないかな？」

当主は楽しそうに、アイシアに言い放つ。

「ライハードのアレンとホーリアが繫がつてもうつても困る。ホーリアは、もう余の言いなりにはならない。？」

アイシアは血の気が引いていくのを覚えた。

「……この人は、手段を選ばない。

顔青ざめながら当主を見るアイシアに、当主は勝ち誇ったように言い放つ。

「……私は『死』を超越し『固有』を破つた。私は最早固有の物体にあらず……私と同じ意志を持つ『暗黒』がライハードにいる。アイシア、意味がわかるね？」

「……それは」

バタン……。

アイシアは膝をついて、当主を見上げる。

今まで味わった事のない恐怖を、圧倒的な力と野心を、目の当たりにした。

「シリウスを庇つたホーリアも、もう僕には不要だ。アイシア、君もあまり僕を困らせないでくれ」

絶対的な力の前に、成す術も持たない。何も言えず、何も出来ない。

「……ア、ル……様」

これほどまでに恐怖と絶望を覚えたのは、生まれて初めてだった。

(兄上……一)

義兄と共に消されてしまう。成す術も、抗う隙もござらず。

## 第十六節・僕等は何も出来ない（前書き）

僕達は、自分の事で精一杯だった。

見えていなかつた、ずっと潜んでいた歪みを見ることが出来なかつた。

一度、歪んでしまつたら、きっと戻すことは不可能だ。

所詮、僕等は何も出来ない。

何一つ、出来ることなんてあるわけがなかつた。

## 第十六節・僕等は何も出来ない

僕等は何も出来ない。田の前に危機が迫つても、僕等は何も出来ないんだよ、所詮。

\*\*\*\*\*

シャールの住む名もなき村からゆっくりと歩いたラルクとシャールは漸くアエタイトに辿り着いた。

しかし、漸くと言つても出発してから意外と時間は経つていないと感じたのはシャールだけではなく、ラルクも一緒だった。

「ハロルドさんは何処にいるの？」

アエタイトに来たシャールはキヨロキヨロしながら探している。ラルクはシャールの手を引きながら

「いじつちだ」

と言つて真つ直ぐ進む。

アエタイトの街はとても入り組んでおり、真つ直ぐ進んだといひで煉瓦で組み立てられた壁に当たる。

そこを右に曲がつて少し進むと、短いトンネルがあった。ラルクはそのトンネルの中に入り、シャールを連れて行く。

「このトンネルの先に大きな家があるはずだ。そこにハロルドさんはいるよ」

「うん

「ちょっと速いかもしないけど我慢してくれないか」

「わかった

早口で話すラルクにシャールは頷くしかなかった。

何か大変なことが迫つていると、シャールにもわかったからだ。ラルクやハロルドが何を話してくれるのか、彼等は何を背負つているのか。そう考えたらシャールは黙つてついて行くしかなかった。ひたすら沈黙。

ラルクも口を堅く結んだまま目的地へ向かっている。

アエタイトを手指していた時は、あんなに楽しそうな表情で他愛もない話をしていたのに、今では何一つ話さない。

ラルクが緊張している様子がシャールにも伝わってくる。

重苦しい雰囲気を纏つたまま真っ直ぐ進み、トンネルを抜けると街の中にある家の中でも一番大きな家があつた。此処がハロルドの住む家らしい。

「ハロルドさん、いらっしゃいますか」

扉の前まで歩き、ラルクは扉を叩いてハロルドを呼び出す。

ガチャリ

ハロルドは直ぐに扉を開いた。

「ああ、ラルク君…来てくれましたか。シャール君も待つていたよ。さあ入つて」

ラルクとシャールは中に入り、ハロルドの後を追う。数メートルはあるだろう通路の壁には珍しい絵画が飾られている。ハロルドは意外と美術品が好きなのだとシャールは感心しながら進んだ。

奥まで進み、扉を開いたハロルドはラルクとシャールを右側のソファへ案内し、ハロルドは向かい側に座る。

「急がせてしまって悪かったね。特にシャール君にはホーリア様の下につかせてしまって……何も出来なくて申し訳ない」

「そんな前置きはいい。ハロルドさん、シャールはアクロイド様に何があつたのかを知りたいんだ」

ラルクはきつぱりと言つてハロルドに全てを話すよう促す。シャールもハロルドの話を聞こつと背筋を伸ばして座り、待機していた。

「もう時間がないんです。俺にも、シャールにも。アルディ家は動いている」

苛立ちと不安。

抑えきれない感情からラルクはハロルドにぶつける。

ラルクは危機を感じていると、ハロルドは呼吸をして話し始めた。

「あれは、もう10年経つのだろつか……アクロイド様は

ハロルドは昔を思い出しながら一つ一つ、話していく。

\*\*\*\*\*

あれは、10年近く前の話だった。

若くして高い医療の技術をもつたアクロイド様はアルディ家に呼ばれ、当主と謁見する事を許された。とても名誉な事だったらしい。

当主の名はデイアルト。

「やあ、アクロイド殿。此処まで御苦労だった。

ここ的事はホーリアに案内させるから少し待つてはくれないか？」

「か、畏りました」

アクロイド様はデイアルト様の言うとおり、待っていた。数分後、アクロイド様の前に現れたのは少年だった。

そう、アクロイド様にとっては、目の前に現れた少年の姿を忘れるわけがなかつた。

少年の名はセイシェル。シャールの住む村にいる、カイン様の兄だつた。

正確にはセイシェル様の父はデイアルト様、カイン様の父はシリウス様、2人は異父兄弟だった。

「アクロイド様、ホーリアと申します。以後お見知り置きを」

「あ、此方こそ宜しくお願ひ致します。ホーリア様」

アクロイド様はセイシェル様を恐れた。

彼の母はセイシェルだけを置いてアルディ家から逃げた。しかもそ

れを手伝ったのはアクロイド様だった。

セイシェル様は恨んでいるだろう。母を引き離したシリウス様と、それを手伝った存在全てを。

しかし、当時のアクロイド様はソフィア様を見ていられなかつたのだと推測した。

もう正しい事は何も分からぬが、こう思つたに違ひない。

ソフィア様はシリウス様を愛していらっしゃる。しかし、ディアルト様はそんな2人の仲を許さなかつた。シリウス様からソフィア様を奪い、身ごもつたセイシェル様はディアルト様に瓜二つ。憔悴し、荒れるソフィア様は幼いセイシェル様にハつ当たりなさる。

アクロイド様は、そんなソフィア様を痛々しくて見ていられなかつたのだろう。

シャール、君が生まれる前、アクロイド様はアルディ家に仕えていた。

彼はレイモンド家の息子、レイモンド家はアルディ家の下につき、アルディ家を守る役目を担つていた。

勿論イザベラ様の生まれであるアルベルト家もアルディ家の下についていた。

レイモンド家とアルベルト家は昔から深い繋がりがあり、互いの家に男女が生まれたら婚約させようという約束まで交わしていた。

アクロイド様とイザベラ様は、成長したら当然のようにアルディ家に仕え、イザベラ様は若くしてソフィア様の召使になつた。

アクロイド様はお父様の後を継ぎ、医者になる勉強もしていた。イザベラ様に会いに行く傍ら、ソフィア様とも交流が出来た。

そして、いつしかイザベラ様とアクロイド様とソフィア様はお互い

を親友と思つ仲になつていつた。

「え、父達3人は親友だつたのですか？」

ハロルドはそこで一旦話を止めてシャールの方を向いた。シャールが問い合わせたからだ。

「ああ、正確には4人だよ。フレア（ニケ）様の姉に当たるセレナ様とも交流がありました。セレナ様はお亡くなりになつたので、フレア様がセレナ様の代わりにアルディ家に來た」

「えつ」

シャールは驚きの声を上げた。アクロイドだけでなくイザベラがソフィアと関わりがあつたとは。

「フレア様はイザベラ様よりソフィア様と関わる機会は少なかつたが、セレナ様とのことで親しくなつていつたかな。悲劇に繋がるとも、知らずにね」

そう言つてハロルドはまた話し始める。

ソフィア様の異変に気付いたアクロイド様とイザベラ様、そしてフレア様。

一体何があつたのか、どうしたのか、アクロイド様とイザベラ様は問うとソフィア様が身ごもつていた。もう分かること思つがその子がイリア様だ。

シリウス様については3人とも言わず、ディアルト様の目につかなければ、レイモンド家とアルベルト家の力を借りてソフィア様を保護

した。

実はシリウス様はレイモンド家のところにいて、姿と名前を変えて住み込みで働いていたらしい。もうシリウス様もいないからよく分からないけれど。

でも、ソフィア様に複雑な事情はあれどセイシェル様を捨てたのに変わりはない。成長したセイシェル様を見たアクロイド様は自分を責めた。

しかしセイシェル様はアクロイド様に何も言わなかつた。

セイシェル様が知らなかつたのか、理解していたのか、私にはよく分からない。

セイシェル様に問い合わせられるのか、デイアルト様に抹殺されるのか、恐怖と罪悪感にうなされながらアクロイド様はアルディ家で過ごしたに違いない。

でも、異変が起こつたのは5年目。漸く帰ろうとしていた時に、アクロイド様の前にある人物が現れた。

「セイシェル様か？」

「いや、違う。ラーナ様だ」

「……！」

シャールは目を見開いた。ラーナ、聞いたこともない女性の名前で

混乱した。

「ラーナ様はセイシェル様の叔母にあたる。そうですよね？ハロルドさん」

「ああ、そうだよ」

ラルクの説明にシャールはホッとした。アクロイドはイザベラだけなのだ、シャールは無駄な心配をしたことを恥ずかしく思った。しかし、シャールの戸惑いに同意を示したハロルドはこう言つた。

「シャール君の思うとおり、アクロイド様のところにいきなりラーナ様が現れるなんておかしな話だね。ラーナ様についても少し説明しちゃう」

ラーナ様はティアルト様の妹でセイシェル様の叔母にあたる。ソフィア様とも当然関係がある。

それにソフィア様がセイシェル様にあたる様子もラーナ様は見ていたに違いない。

そしてソフィア様がセイシェル様を捨ててアルディ家を去った事も知っていたに違いない。

アクロイド様に問い合わせたが、或いは責め立てたか、それはラーナ様とアクロイド様だけだったから分からない。

アクロイド様の中で何かが壊れてしまったのは確かだ。

故郷に帰る前に私の家に寄り、他愛ない話とこの事を話し、私が場所を離れた間に彼は……。

「……アルディ家にさえいなければアクロイド様はきっとまだ此処にいたかもしない。」

でも、アクロイド様にとつての罪が暴かれてラーナ様に責められ、シャール君やイザベラさんにまで影響されたら彼は困るだろう。多分、シャール君とイザベラさんことを考えた結果、自分がいなくなればと思ったか、もう責められるのは沢山だと思ったのか

ハロルドの話がよく聞こえなかつた。

ラーナ、その女が父を追い詰めた。

でも父はセイシェルを置き去りにするソフィアを支持した。ソフィアがセイシェルを置き去りにした。

『皆、自分勝手だ』

シャールは何かを吐き出したい気分だつた。

ソフィア様が可哀想？

セイシェルに何の罪があるの？

ただ父親が違うだけで、母親に疎まれて置き去りにされるの？

「ハロルドさん、ホーリアはどう…ホーリアはどうにいるんだ！」

「シャール！」

身を乗り出したシャールを宥めようとするラルクをハロルドは制止して言つた。

「シャール君、君ならそう言つてくれると思った。君なら『痛み』がわかると思つていたんだ。

君を待つていたんだ、ずっと。まあ、こつちだ」

ハロルドはシャールとラルクの2人を連れ、通路を一気に駆け抜け

て外に出た。

外に出て、再び来た道を歩く。トンネルを抜けた後、右に曲がる。そのままアエタイトの街は遠ざかっていく。

2人は何が何だかわけが分からぬままついて行つたが、程なくして馬車が見えてきた。

「ハロルドさん！」

そこで声をかけたのはラルクにとつては嬉しい人物の声だった。

「アーサー兄さん！」

そう、ラルクの兄アーサーだった。

「お、シャー少年にハロルド様も？馬車を動かすの苦労したんだぞ」アーサーはラルクと同じように明るい笑顔を浮かべ、3人に乗るよう促した。

ハロルドは苦笑しながら、ラルクは拗ね、シャールは戸惑つていた。

「ラルク、お兄さんがいたの？」

馬車に乗り込んだシャールはラルクに問い掛け、彼は頷いた。

「ああ。2年前に母親が亡くなつて今はアルディ家に行つたきり帰つて来ない父とアーサー兄さんの2人が俺の家族だ」

シャールは納得し、アーサーとラルクを交互に見ていた。

確かにアーサーはラルクとよく似ていた。互いが互いを大切に思つているところも垣間見えた。アーサーはラルクが心配でたまらない

のだろう。

「 ああ、行こうか」

ハロルドの声に頷くアーサーとラルクとシャール。彼の声と同時に馬車は動き出した。

本当に、後には退けない。もう逃げられない。

\*\*\*\*\*

アルディ家の稽古場。

カインはイリアに対する想いを断ち切る為、ただひたすら剣を振るっていた。

イリアを愛することは決して許されない。姉であり、彼女はアルディ家の誇りだと。

（セイシェル様……）

断ち切らうとすればするほど引き付けられる。

セイシェルの軽蔑の眼差しとイリアの笑顔が交互に浮かび、カインは眉間に皺を寄せる。

イリアの笑顔を失うのは怖い。セイシェルから軽蔑され憎まれるのも怖い。

アルディ家にも関わりたくない。

結局どれも捨てられず、対峙することも出来ない己が心底腹立たしいとカインは思った。

（……だめだ、こんなことでは）

闇雲に剣を振るい、時には舞いながら剣を振り下ろす。高く飛び上がり、降下と同時に剣を勢いよく下ろす。

素早く走って背後に回り込み、斬りつけた。

正にカインは今、見えない何かと戦っていた。

気がつけば、夜更け。

カインは汗を流しながら何かを見据えていた。  
誰も存在すら確かめられない姿なき何か。カインだけが存在を確かめられる。

「今日は此処までだ」

何かを見据え、言い放つたカインは素早く身を翻し、立ち去った。

中庭を歩きながら自分の部屋へ向かうカイン。

「カイン！」

彼を呼ぶ声が響き渡る。今まで彼が拒み、会いたくないと思っていたイリアの声。

「カイン、待つて！待つてよ」

悲痛な声で訴えるイリアにカインはどれほど心を痛めたか分からない。

でも彼女は姉、血の繋がった姉なのだ。  
愛することはおろか、姉弟と名乗ることさえ許されない。  
しかしイリアは違った。

「カイン！」

真っ直ぐに、彼を追い掛けるイリアの声にカインは拒み切れなかつた。

イリアに引っ張られカインは戸惑つたが、結局彼女を愛する想いが強かつたと負けを認めた。

何も見えない、前を歩くイリアだけが彼の瞳に映つてゐる。

セイシェルの事さえ忘れていた。

部屋に辿り着き、イリアはカインに待つよつ命令し、近くにあつた椅子に座る。

「カイン、私が嫌いなの？」

单刀直入に彼女は問い合わせる。カインは目を見開き、首を大きく横に振る。

「じゃあ、私の命令には何でも従つてくれるのね。だつてあなたは私の」

「イリア様！」

カインはイリアを制止し、言い放つた。

「あなたは私の姉です。血の繋がつた姉弟なのです、あなたの命令には従いますが、あなたを愛することは出来ません」

誰が認めるだろつ。実の姉と弟が恋人になることを。  
誰も認めない。誰一人として認めない。  
しかしイリアは反論する。

「私はあなたを弟だなんて一度も思っていないわ！勝手に決めつけてないで！」

「イリア様！」

「私はあなたが好き！愛してる！アルティ家なんて関係ないわ！」

カインに訴えるイリアがあまりにも痛々しい。彼女は泣き崩れ、カインはイリアに駆け寄る。

「カイン、私はあなたを……」

弱々しい声で何度も訴えるイリアに、カインの中で何かが崩れた。

そう、それは理性。

「私もあなたを愛している……イリア、一目見た時からあなたを姉と思つた事は一度もない」

……ああ、嗚呼。何という愚かで悲劇的だろう。  
彼らは禁忌を犯した。

理性を壊し、獣のように混ざり合つ男女。

誰も、彼らを止められない。

\*\*\*\*\*

その頃、ホーリアは当主のいる部屋へ向かっていた。  
レティシアの言つことが正しければキース夫妻は既にカイン達を始

末する準備にかかっている。

「悪く思わないでくれ、イリア」

道は違えた。きっと彼らは境界線を壊し禁忌を犯すと、ホーリアにはわかつていた。

人を威圧する扉もホーリアの目には入らない。

「父上、私です」

「……入れ」

直ぐに返答が来た。ホーリアは扉を開け放ち、当主に詰め寄る。

「キース夫妻にカイン達を始末させるとはどういうつもりですか！カイン達の始末は私の役目ではないか、キース夫妻に任せるとどうこうことですか！」

当主はホーリアを見て、甲高い声で笑った。

「シリウスに洗脳されたお前にカイン達を始末することは不可能だらう？カイン達には最も惨い死に方をしてもらわなければならぬ！ホーリア、カイン達に情を抱いたお前では不可能だ」

「……不可能？」

ホーリアは真っ直ぐと、当主を見据えて言い返す。

「血の繫がつた姉と弟が結ばれることは死に値する。彼らはアルティ家に大きな災いをもたらすでしょう……彼らを裁くのは同じく血の繫がつた私がすべきこと。何人足りとも介入することは許さない

……裁くのは私だけだ！」

ホーリアの目が鋭く光る。

当主は不敵に笑い、ホーリアに向かって再び言い放つ。

「ではお前に全て任せよう。ホーリア……彼らを裁いてみせよ、私の目の前で！」

ホーリアは、当主を真っ直ぐと見ていた。  
きらりと光る視線は刃の如く。

（2人には地獄に落ちてもらひつ）

聞こえるは、哀れな兄の嘆きのみ。

## 第十七節：一瞬の消失（前書き）

一瞬で、跡形もなく消えてしまった絆。  
それは、兄弟という証しだった。

私は、何一つ守れない。

ああ、出来るなら、私を恨め。

願わくば、お前が私に罰を下してくれたなら。

……でも、贅沢な願いだろう。

さよなら、私の全て。

## 第十七節：一瞬の消失

悪魔に呑まれないで。

あなたはまだ立ち上がり、助けなくてはいけない。  
逃げないで、向かい合つて。

\*\*\*\*\*

アーサーの手配した馬車は他とは違い、かなりのスピードで走るようだ。大聖堂に辿り着いたハロルド達は降り、アルディ家へ向かう。そもそもアエタイトから大聖堂まではそれ程遠くないとアーサーは思つたが、口に出すのは止めようと思つた。

大聖堂内に入るとアーサーは言つた。

「ラルクと僕は幹部達のところへ向かい、レディシアのところに行きます」

「ああ、任せたよ」

ハロルドとシャールは左へ、ラルクとアーサーは右へ向かつた。  
左に向かうハロルドとシャール。ハロルドはこう言つた。

「私はイリア様とカイン様のそばに居ようと思つ。君はホーリア様のそばに」

「わかつています」

シャールは一刻も早く、ホーリアを止めなければならぬと思つて  
いた。

初めて会つた時から彼は悪魔に呑まれそうな気がしたからだ。

（同じなんだ、ホーリアは。身勝手な理由で見捨てた全ての存在に怒っている。

俺だって、勝手に自己完結をせて逝つてしまつた父さんに怒つていた。

今なら分かるんだ

だからこそ、今にも墮落しそうなホーリアを救いたい。救わなくてはならない。

「シャール君、私はイリア様の部屋に向かう。君はホーリア様のところに」

ハロルドに頷き、シャールはホーリアのいる部屋へ向かつた。出来ることは何一つ無い。でも彼を救いたいという思いがシャールを駆り立てる。

アクロイドを失つたことに対する復讐心などもう残つていなかつた。ホーリアを救いたいと思ったに違ひない。謝罪したいと思っていたに違ひない。

彼がアルディ家に来たのはホーリアに対する贖罪を果たすためだ。

「ホーリア様！」

シャールはホーリアがいつもいる居室に辿り着いた。  
……誰からも見向きもされず、孤立した場所に。

「ホーリア様、シャールです」

必死に彼を呼んだ。

彼に会わなければ、対峙しなければならない。アクロイドが遣り残したこと自分が果たさなければならないのだ。

「ああ、シャールか。入りなさい」

でも、アクロイドのことも何もかも関係ない。ただ、会いたかった。

……ガチャリ。

そろり、そろりと中に足を踏み入れる。いつ入つても、恐怖心が募るこの部屋に、恐る恐る足を踏み入れて先に進む。

「……シャール、どうした」

返事をしたホーリアが第一に見たもの。

強張つたような表情でホーリアを見るシャール。

今まで彼は敵意を露わにしてこちらを睨んでいた瞳が印象に残りすきでいて戸惑つた。それが今では強張つた様子で、その中には悲しみも滲ませている。

「ホーリア様……」

言わなければならぬのに言葉が出なかつた。何一つ言えず、どう言い表したら良いかも分からず、感情だけが溢れる。

「シャール、どうかしたか？」

いつもの強気な彼は、怒りに燃えている彼は、一体どこに行つたのか。

悲しそうな顔で、じつとホーリアを見つめ続けるシャールの瞳から涙が零れる。

怒りでも憎しみでもなく、静かなもの。何も言わなくても、彼の想いが伝わってくる。

静かな涙は、蓄積していた激しい感情を自覚させれる。

「……シャール、行くのだ。もう此処にお前はいってはならない……」

そう言い放つてシャールから背を向け、ホーリアはある決意を固める。

湧き上がる怒り。

偽りの話を刻みつけられ、弄ばれた屈辱。

都合よく偽られ、思い通りな人形を作り出した父に対する憎しみ。

気に入らないと、愛せないと、いとも簡単に手放した母に対する怨み。

「ホーリア……」

シャールは引き返すべきだと判断し、ホーリアに背を向けた。ゆっくりと扉へ向かう。もう一度ホーリアの後ろ姿を見て、出て行つた。

(彼が、無謀な真似をしなければ良いのだけど

それだけを考えながらハロルドの元へ向かう。

まだまだ行動しなければならないのだから、自分には立ち止まる時間など全くない。

そう考え、走りながらもホーリアの後ろ姿が頭から離れなかつた。

\*\*\*\*\*

出て行くシャールの後ろ姿を見たホーリアは何かを待つよつに、じつとしている。

(もうすぐ、来るか)

そう、ホーリアが待つていた人物。

ガチャリ。

「お兄様……」

いつもは入る前に許可を取るが、今日は違つ。部屋に入つて来たのはイリアだつた。

「イリア、体は大丈夫か?」

ホーリアは声を掛けるが、その表情は暗くて険しいものだつた。

「お兄様、そんなことはどうでもいいわ。

さつきシャールを見掛けたから……もう、シャールは此処に来ないのでしょ?」

あなたと話がしたいの」

ホーリアに向かつてそつと声を立てる。ホーリアの声や表情もまた険しかった。

＊＊＊＊

シャールがホーリアのところへ向かつている数時間前、イリアはカインと歩いていた。

カインは躊躇していたが、護衛なら一緒にいるべきだと強く言つたイリアにはかなわなかつた。

彼と歩いているうちにイリアにはある疑問が浮かぶ。

それは、カインがホーリアを見る表情についてだ。

「カインはお兄様を見る時、とても悲しそうな瞳をするのね」

少し的好奇心と大きな疑問。

ホーリアと接しているカインの瞳はとても悲しそうで苦しそうだったから。

「お兄様のこと、嫌い？」

「いえ！そんなこと……寧ろホーリア様のことは大好きです。

偉大ですし、優しいですから」

カインはきつぱりと否定した。

それでは、あの表情にはどのよつた感情が込められているのか。真剣な眼差しで、答えを待つてゐるイリアを見たカインは話そつと決めた。

「……そうですね、セイシェル様の方が私を嫌つてゐると思います。

私は、彼から大切なものを全て奪つてしまつたから。

彼は母のことをとても慕っていたから、それを奪った私が憎くて仕方ない……それから、私を選んだ母も憎いのでしょうか。

私は、彼を愛していますが、彼は私の事を消したいと思っているのかもしれない」

カインはホーリアを愛しているのに、ホーリアは何故彼を憎むのだろうか。

「でも、その時まだカインは」

母がいなくなつた事は前に聞いたことがある。

カインが生まれる前に母は逃げたのだと。イリアはその話を育ての親から聞いていた。

勿論母とも時々会っていた。カインは父親と一緒にいたから会つたことはなく、弟がいることも知らなかつたが。

「カイン、それはあなたのはいじやないわ……」

「……そうでしょか……でも、彼にとつて私は疎ましい存在で」

イリアに話した直後、カインは泣いた。

どうしたら良いのか分からなくて、ただ泣き続けた。

認めて欲しい、自分をもつと見て欲しい。

憎まないで、捨てないで。

言葉にすればするほど浅ましくて、愚かな。

（カイン）

泣いているカインの姿を見ているつむぎ、イリアは兄を心から嫌悪した。

弟であるカインを田障りと言い放った兄が、平氣で見捨てよつとする兄が、イリアには理解出来なかつた。

「……イリア様？」

立ち上がつたイリアに今度はカインが驚いた。  
もし、今から兄のところへ行くことをカインに話したらきっと彼は止める。

「ちょっと用事を思い出したの。早く行かないと怒られてしまうわ

「や、やひ……行つてらっしゃいませ」

カインは寂しいと思つたが、仕方ないと考え直し、彼女を見送つた。

「すぐ戻るわ」

扉を開ける前にイリアはそう言つた。

何もかもお見通しらしい。カインは悔しくなつたが、頷いて再度見送つた。

勢いで飛び出したのは良いが兄の部屋がよく分からぬ。

いつも彼の部屋に行く時は案内してもらつてばかりだつたためだ。

「はあ……どうじよひ」

何故か分からぬが、氣分が悪くなつてきた。吐き氣がする。

「……なんか、気持ち悪い」

手で口を押さえながら走った。田舎と吐き気と共に苛まれながら、必死に。

兄はきっと“悪魔”に囚われてしまったのだ。

彼は優しい……カインのことを本当は大切に思っている。

信じたかった。彼は優しいと、信じたかった。

通路を道なりに進み、階段をゆっくりと降りた。兄の部屋は本館の離れにあり、此処から中庭を走っていかなければならない。

階段を降り、別館を出て本館へ向かう途中。

「あの方は……ハロルド様？」

本館中央に向かっているハロルドの姿を見た。

兄のいる部屋は本館左側の離れにある。中央から行かなければ左側には行けない。

「よし」

気持ちちは急ぐが走ってはいけないと、何となく思った。ゆっくりと、余裕を持つて歩く。

相変わらず吐き気や目眩はするが、動けない程ではなかった。

兄に会わなければならない、伝えなければならない。

彼はきっと分かってくれる。

イリアは、心から信じていた。

それだけを胸に歩いた。

広い庭や長い通路を、ただひたすらに歩いた。

(遠く感じる)

アルディ家は広いところとは前々から思っていた。  
しかし、1人で歩いていると改めて思つ。

とても広くて、隣に誰かがいなければ不安になる。  
誰でもいいからそばにいてほしかつた。

そんな気にせざるほど、アルディ家は広かつた。

歩いて、歩いて、歩いて。  
時間的にはそんなに経っていない。しかし、イリアにとつては長い  
距離だつた。

やつとの思いで本館に来たのだ。

「お兄様」

イリアは、また歩いた。

\*\*\*\*\*

そして、イリアはホーリアの前に立つていた。  
お互に何も言わず、ただじっと見つめている。

張りつめた空氣、沈黙。

彼は一向に何も言わない。  
だからイリアも何も言えなかつた。

(何か言つてよ)

沈黙し続けるホーリアに苛立ちと不安が募る一方で、それを抑え切

るのにもかなりのエネルギーが伴う。  
それでも、彼女は何も言い出せなかつた。

声すらも、発するにじが出来なかつた。

(…怖い)

何故か分からぬが、怖いと感じた。  
容姿が彼の父に似ているからだらうか？

イリアは考え込んでいたところ、ようやくホーリアがゆっくりと浮  
ぶ。

「イリア」

ゆっくりしていく、はっきりした声。その中には険しさも含まれて  
いた。

「話とは何だ、イリア」

イリアに問い合わせながらもホーリアには話の内容は分かつていた。

『カインのことだらう』

そう考えた。ただ単純にカインの事だけでは無をせつだが主な内容  
はカインだらう、と。

彼女の怒りの声を、ホーリアは待つていた。

時計の針が動く音、足音すら響かない空間。  
拳を震わせながら、イリアは真っ直ぐとホーリアの瞳を見ながら言  
つた。。

「お兄様、お聞きしたい事があります」

「……ああ、何だ」

「……カインのことですわ」

「……カインをどう思つて居るのか。 そう聞きたそうだが」

ホーリアは笑いながら言った。

読まれている。自分のことなど全て見透かしている。  
しかし、自分からは絶対に牙を剥かない。  
相手が牙を剥いた頃には彼は先回りしている。

「そうね。でも、もっと聞きたい事があるわ」  
ホーリアの表情を窺いながらイリアは更に続けた。

カインの事よりも長い間、彼女が疑問に思つていたことを。

「いつも、当主様やラサーニア様と何を話しているのかしら」

一瞬だけ、時間が止まつた気がする。

「……ははは、ただの世間話さ。特にラサーニア様は私の母親のよう  
なものだ」

ホーリアの表情が一瞬だけ曇つたのをイリアは見逃さなかつた。

「私がこちらに来たすぐ後、ラサーニア様がお見えになつたから氣  
になつてしまつて……カインと関係があるのかしら」

……見られていた。

ホーリアは表にこそ出さなかつたが、しまつたと思った。イリアが来た後には必ずラサーニアが此方に来る。彼女にとつてはイリアもカインも警戒すべき存在だった。何故なら、彼女はソフィアとシリウスのことを、イリア達に知られることを何より恐れたからだ。

まずい、偶々とは言えイリアが見ていたとは思わなかつた。

「……ラサーニアは私を見ていただけだ

ある意味、間違つていない。

ラサーニアのことはイリアには知られたくなかった。

兄の困つた様子を見たイリアは、改めて疑問をぶつける。

「もう一度質問するわ……アルティ家のことについて聞きたい。あなたも、ラサーニア様も、当主様も、みんな、何を考えているの？アルティ家は私達に何を隠しているの？あなたにとつてカインと私は何なの？全てを知りたいの、答えて」

……答へられない。

ホーリアは思つた。

イリアが理解できるよう答える術を自分は持つていない。

当主にとつてイリア達は忌々しい存在で、自分にとつて厄介な存在で。

……本当に？

自分にとってイリアは、カインは厄介な存在だったか？

ただ、父が言うから憎んだ。それだけではないのか？

イリアもカインも守れたのではないのか？

彼らを破滅に追い込むのが自分の望みなのか？

（違う……違う。私にとって、イリアとカインは……）

ああ、心のどこかで気付いていたの。）

……自分は、父の野心の為に都合よく作られた道具だと。

いずれ、自分も消される存在なのに。

「……父にとって、ラサーニアにとって、私にとって……お前たち  
は何れ災いとなる。

……災いは、芽のうちに摘まないといけないだらう？」

懷に隠していた刃を出して告げる。

「イリア、お前とカインは私が葬り去つてやるぞ！」

バタン！

「セイシェル！」

勢いよく扉をあけ、イリアを庇つようにしてホーリアの前に立ちはだかる人物。

「……カイン」

ホーリアは、カインを睨んだ。

「セイシェル、どうして兄であるあなたが、イリア様をして、どうしてこんなことを……。  
答える……どうしてこんなことをしたんだよ……答える……」

詰め寄るカインに、ホーリアの中で何かが壊れた。  
ああ、なぜだ。なぜ、これほどまでに。

「……お前など、いなければ良かつたのに。  
お前さえいなければ、私は……母に愛されていたのに。  
お前さえ、お前さえ、いなければ、私は……！」

ホーリアは持っていた刃をカインに突きつけた。それを見たカインも剣を構える。

「……お前たちにはいづれ死んでもらう。先ずはカイン、お前からだ」

不敵な笑みを浮かべるホーリアに、カインとイリアはハツとして後ろを振り返る。  
……隠れていたのだろうか。  
兵士たちがカインに銃を向けている。

「カインを連れて行け……ラサーニアの指示だ。いいな？」

「お兄様、やめて！」

イリアは止めるよう訴えるが、ホーリアは嘲笑うだけだった。

「……誰にも、私は止められないよ。

イリアにも、シャルにも、誰にも邪魔はさせない。さあ、カインを連れて行け！」

……カインはホーリアを見ていた。しかし、無理矢理兵士達に連れて行かれていく。

イリアは勝ち誇ったように笑うホーリアを見て言った。

「お兄様、私はあなたを許さない……！」

そう吐き捨ててイリアは部屋から出て行つた。

……カインを助けるために。

慌ただしかつたこの部屋に独り残されたホーリア。

「…………私に、お前達を庇う事など出来ないさ」

もう誰もいなくなつた。

結局、自分を変えられなかつた事実を知つたホーリアは崩れ落ちた。暫く放心したように周りを見つめていた。

止まつた思考。

それでも思い浮かぶのは、母とカインの笑顔だつた。母に愛されていたカインが羨ましくて仕方なかつた。

「……カイン、私を恨め

ホーリアはやうなへとおりへ立上がり、歩き始めた。

ハロルドの元へ急ぐシャールを追つた。

## 第十八節・混沌の始まり（前書き）

全てはうまくいく。

無力でも、結束すれば対抗出来ると信じていた。

少しずつ、いい方向に向かっていくと信じていた。

うまく進めば進むほど、疑わなければならないのに、過信する。

自分は警戒していたはずなのに、少しずつ計算が狂っていた。

しかし、その狂いに気づかず、ただひたすらに前を進む自分が愚かだったのだ。

自分の愚かさと無力さに気づかないほど、過信していた。

## 第十八節：混沌の始まり

なんと愚かで醜い。

それでも、私は願ってしまうのだらう。

決して私とお前は交わらない。

分かっているけれど、私は伝えたい。

伝えられたら、もう、何も……。

お前は自由になれ。  
全てを忘れる。

\*\*\*\*\*

カインが連れて行かれた事は直ちにアルディ家の間で話題になつた。  
勿論、シャールの耳にも入つていた。

たつた、2時間。

カインが連れて行かれてから、たつた2時間。

(ホーリアは何を考えているんだよ)

問い合わせなくて仕方なかつた。

未だハロルドの姿を見つけていないシャールは悶々としていた。

迷つて、迷つて、迷つて。

くるつと向きを変え、シャールはホーリアのところへ行こうと決意した。

(ホーリア、待つてくれよ)

シャールは急いだ。

ただ、一心不乱にホーリアのもとへ急いだ。

\*\*\*\*\*

一方、ホーリアのところから早く離れたくて歩くイリア。  
兄には通じない。

彼はずっと前にラサーニアや当主に取り込まれていたのだろう。  
悔しくて、悲しくて。

結局カインがいなければ何も出来ない自分の無力さに泣いた。

(カインを救えるのはお兄様だけなのに。

彼はお兄様を愛しているのに、どうして田障りだと言うの?  
お母様だつてきっと)

そんなことを考えながら、ふと気がついたら泣いていた。  
どうして伝わらないのか。

それどころか自分が行動したばかりにカインは捕まった。  
自室に戻る気分にもならず、イリアはずっと当てもなく歩いていた。

「イリア様……？」

遠くから聞こえて来た声。イリアはぼんやりと遠くを見つめる。

視界が霞掛かつて来た。今にも、倒れそうになる。

「やはり……！ イリア様、しつかりしてください……。」

「ハロルド……様？」

倒れるイリアを受け止め、必死に呼び掛けるのはハロルドだった。

＊＊＊＊

相変わらず、薄暗い空間。  
ホーリアは眉間に皺を寄せつつ広間へと急いだ。  
カインは捕らえた。

一応父は信じるだろうが、それからどうするかが問題だった。  
欺く事など出来ないかも知れない。下手をしたらカインやイリアだけではなく『子ども達』まで犠牲になる。  
どこまで父を欺けるか、どこまで守れるか。

(……母上)

自分の顔を嫌いと言つた母の悲しそうな表情が消えない。  
偶々、カインと一緒にいた母の幸せそうな表情も消えない。

……母が好きだった。

母に愛されたかった、認めてもらいたかった。

言つことを聞いていたら、いつか母は愛してくれると言じていた。

「お前の顔を見るといつもぞつするの……。」

望まれて生まれた子供ではないと知ったのは、母がカインを連れて来た時だった。

溺愛と表現するに相応しい。

カインには心からの笑顔を浮かべていた。  
自分とは違う母の態度を見た時の衝撃は今でも忘れられない。

母がいなくなつてから、父も豹変した。

「あの女は僕達を捨てたんだ。まるで『ゴミ』が何かのように捨てたんだ」

呪いのように繰り返す、母に対する憎悪。

子供ながらに、父の母に対する感情は歪だと感じていたが、これほどまで歪んでいたとは思わなかつた。

毎日毎日聞かされて、そのうちに父の言つことを信じていつた。

『母は私を捨てた。私はいらない子供だつた』

頭の奥に焼き付いて離れなくなつた。

でも、信じたままではいられない。自分は変わつたのだ。

『セイシェル、ソフィアは君を間違いなく愛していた。

ソフィアは君まで道連れにしたくなかったんだ、私達と一緒にいたら君も死んでいた。

ソフィアは、君を守りたかったんだ』

『シリウス、どうしたらしい？私はどうしたらしい？』

『……カインを、いつか、あの子は兄上に目をつけられる。カイン

を、兄上から守ってくれないか』

『……ああ、分かつた』

『……セイシェル、出て行きなさい。君は此処にいたらいけないよ』

…シリウスとの、最後の会話だった。彼は確かに言つた。

カインを守つてほしいと。

(カイン、お前は私にとつて大事な存在だった。誰か、カインに伝えてくれないか)

じつと待つていた。シリウスとの約束を思い浮かべながら、じつと待つていた。

バタン！

……扉が盛大な音を立てて開いた。

「よくやつてくれたね？セイシェル」

嘲笑う、悪魔の帰りを。

「……父上」

今では父が怖くなつた。何を企んでいるのか、どれほどの力を持っているのか。父を恐れて服従した者も多い。

「僕の目の前でカインを斬り捨ててくれ。出来たら苦しみながら死ぬようにしておくれ。

僕のかわいい息子よ」

「……」

ただ、静寂するしかなかった。

＊＊＊＊

此処は劣悪な環境だと誰かが言った。

当主に逆らえば、此処に連れて行かれ、のた打ち回りながら死んでいくとさえ言われた。

イリアは大丈夫だろうか、彼女の中には新たな生命がいる。

イリアは言わなかつたが、カインは何となく気付いていた。子供を見るまで死ねない。例えホーリアが遮ろうとも。

「セイシェル、俺は貴方を助けてみせるよ

アルディ家の呪縛から、彼を解放してみせると決意した。

（セイシェル、悪魔に呑まれないで。あなたは今にも墮ちそうになつていて。

あなたは呑まれないで、どうか立ち上がって……セイシェル）

祈るような想いで、彼が来るのを待っていた。  
必ず彼は来る……此処に必ず。

カインは身構えた。

兵士達と彼が来るのを予測して。

「カイン」

見張りをしていた兵士がカインの名前を呼んだ。

「……」

罵倒されるに違いないと更に身構えたが、兵士が次に呟つた台詞は意外なものだつた。

「抱いている感情が強ければ強いほど、動けないものだよ」

…どうしたことだ？

カインにはよく分からなかつたが、兵士は一回りと笑つて言つた。

「今しづまく耐える、カイン」

\*\*\*\*\*

一方、最近では勉強を放棄していたレディシアは母と父に呼ばれていた。理由は勿論、同じ幹部を目指す子たちと比べて成績が一気に下がつたからだ。

「レディシア、最近どうしたの。規律も守れていないし、勉強そつちのけで遊んでばかりで」

レディシアには特に理由などなかつた。  
ただ、今の勉強がとてもつまらなかつただけなのだ。  
多分、シャールに出会い、彼の見る世界に惹かれたからだ。

自由に動ける彼が見る世界に触れたら、両親達が言つ勉強が一気につまらなくなつた。

それに、両親達がカインを抹殺しよう計画している噂まで流れている。

レディシアにとつてカインは憧れであり、彼の身に何かあれば助けたいとも思つていた。

とどのつまり、両親達に不信感を持つてゐる。その不信感は日に日に大きくなるばかりだつた。

「……申し訳ありません」

それでもレディシアは謝つた。両親の言ひつけを守らなかつたのは事実だ、それに対しても謝罪しなければならない。

「……まあいいわ。レディシア、お前のこととはホーリアに頼んであるから。今後はホーリアの言ひこと聞くのよ」

呆れたよつに言ひ母に溜め息をつく父。

レディシアは2人の態度に不快感を覚えた。

ホーリアに対する振る舞い、カインを疎ましいと言わんばかりの表情、傲慢で見下した態度……全てが腹立たしかつた。

彼らにとつて自分は何だろつ。

自分は何のためにこんな勉強をしたりしているのだろつ。

「分かりました……」

レディシアは返事をして部屋を後にした。早く両親から離れたかったのか、歩くスピードが上がる。

思つていたより両親を嫌つていたことを知る。

(シャール、君のところへ行くよ)

両親の姿も見ず、レティシアはシャールの元へ駆けつけようと急ぐ。

\*\*\*\*\*

(ホーリアはどうしているんだよ)

シャールはあちこち見回しながらホーリアを探していた。彼の姿が見当たらない、彼はどこに行つたのだろう。

「まさか、もうカインさんを……」

いや、そんなはずはないと首を振る。  
確証などどこにもないが、彼がカインを殺せるとばかりしても思えなかつた。どうしてそう思うのか、自分にも分からなかつた。  
ただ、彼はとても優しい。

一心不乱にホーリアを探すシャールは、前に入がいることに気がつく。

もしかしたら、ホーリアの居場所を知つてゐるかもしね。

「すみません!」

歩こうとする人を呼び止め、シャールは問いかけた。  
どうやら向こうも気が付いたようで、立ち止まつた。  
シャールは走り、漸く追いついた。

「……すみません……」

「……」

息を切らすシャールを黙つて見つめる那人。不意に那人から問いかけられた。

「……君は……シャール・レイモンド……？ アクロイド殿の「」子息？」

不思議に思ったのはシャール。

「え、どうして知っているのですか？」

田の前にいる人はシャールの問いかけに答えた。

「……だって、君のお父さまは有名だから。あ、自己紹介が遅れた  
ね……」

クスクスと笑いながらその人は顔を上げてこう言つ。

「僕はアレン。ホーリア様に会いに来たんだ」

「……！ あ、あ……」

アレンという名前にシャールは田を見開き、足を震わせた。

「それより、ホーリアを探そうか。君も探しているのだろう？」

シャールが呆然としていることに構わず、彼はシャールの手首を  
引っ張つて走り始めた。

「ホーリアがどこにいるかは大体察しがついてる」

\*\*\*\*\*

ハロルドは何人かの召使いを呼び、イリアを近くの医務室のベッドに運んだ。

医務室は何力所があり、ホーリアがいる所にもあった。

「イリア様、貴女だけのお身体では御座いません……もう安静に」

「……ありがとうございます……ハロルド」

「……カイン様とは……」

「ええ、もう半年前かしら……」

月日が経つのは早い。とても早い。短い間に様々な変化が訪れていた。

「……カイン様は「存じなのですか?」

「……彼は、薄々気づいています……。分かっているわ、こんなこと、許されないのは……でも」

「……もう何も言わないでください。ああ、私は勿論、侍女や医師たちも待機しておりますので、何かありましたら遠慮なくお申し付けください」

「ありがとうございます……」

イリアは弱々しく言った。

そんなイリアから離れたハロルドは焦りを覚える。

(イリア様は衰弱しておられる……このままではまずい)

健康に思われがちなイリアだが、幼い頃には重病を患い命を落とした事もあった。

今は幾分丈夫にはなったようだが、元々体力がないのに食事もあまり取らないためなのか。

それと同時にこの家でかなり気を揉んでいるのか、イリアは前よりやせ細っていた。

「……ハロルド」

イリアが突然呼んだので、ハロルドは駆け付けた。

「イリア様、どうなされましたか?」

「……」迷惑おかげしてしまい、申し訳ありません。これからは気をつけます

起き上がったイリアはそう言つてゆつとベッドから降りる。

「……ちゃんと食事、してくださいね」

「分かっているわ

先ほどまでの弱々しい表情から一転、イリアは明るい声で返事をした。

\*\*\*\*\*

父と分かれたホーリアはある場所へ向かっていた。

勿論イリアの場所だ。少し前に合流したアーサーがイリアのことをホーリアに告げた。

アーサーが言うには、イリアが突然倒れ、ハロルドに保護されらしい。

計算が合つていれば半年ぐらいだろう。倒れるにしても少し様子が可笑しいと感じたのはホーリアだけではない。

アーサーもイリアを心配していた。

「……さて、行きますか」

「……ああ」

アーサーはにっこりと笑い、ホーリアの隣を歩き始めた。

父はこの事を知つたらカインとイリアを何が何でも始末するに違いない。

考えるとホーリアは気分が暗くなつていいくのを感じた。

実の姉と弟が結ばれたという事実に対して少し複雑な心境だが、良いのかもしれないと思う。

しかし、問題はカインだ。イリアは相応の年齢だが、カインはまだ子どもだった。カインが背負い込めるとは思えない。

「……許せ」

歩きながら、もつとすぐ来るだらうと思しながらひたすら歩き、通路に出ると。

「ホーリア様！」

シャールの声が聞こえた。ホーリアは呆気にとられ、じつと彼を見ていた。

「シャール……」

その後ろに立てる青年、アレン。

「ホーリア、やつと説得出来たんだ」

「……来たのか」

「当主を説得するのは大変だつたからな？さて、僕はどうしたらいい？」

「……ひからで話そひ。もつとすぐ父が帰る。アレン、フードを被れ」

アレンは毛皮のフードを被り、ホーリアの後をついて行く。

全ては少しずつ、計画通りに進んでいた筈だった。  
……進んでいた筈だと、信じて疑わなかつた。

## 第十九節：相反する兄弟（前書き）

ああ、離れて行く。

失いたくないのに、離れたくないのに、一緒にいたいのに。

俺の願いを奪うのはなぜですか。

泣いて欲しくないのに、笑って欲しいのに、彼は泣いている。

なぜ、彼は泣いているのですか。

どうして俺達は、分かれてしまったのだろう。

## 第十九節・相反する兄弟

離れるなんて、耐えられなかつた。

これ以上、引き裂かれるなんて耐えられなかつた。  
冷酷に罵るあなたの表情が苦痛に歪んでいるのを見るなんて、耐えられなかつた。

つまらなそうに日々を過げし、今にも泣きそうな顔をして居るあなたを、ただ助けたかつた。

ねえ、どうして俺たちは兄弟になれないの？

俺は「」にも、あなたにそばにいてほしいのに。

\* \* \* \*

「……こつまでも隠せるわけがなから」

ホーリアはアルディ家内にあつた稽古場にアレン達を案内し、そこで話していた。

「気付かれているかもね。恐ろしい人だから」  
さらりと言つアレンにホーリアは溜め息をついた。

「……お前、分かつてゐるだらうな」

「分かつてゐるよ、ホーリア。それに、ライハードを敵に回す程愚

かじやないぞ」

「……お前に任せる」

呑気に話すアレンと切羽詰まっているホーリア。アーサーとシャー  
ルはポカンとしながら2人を見ていた。  
するとアレンは思い出したように言った。

「それよりイリア様、半年だろ?」

「いや、もう少し経つていい筈だ。カインと出会ったのが約2年前  
だからな、それにイリアは今、殆ど動けないらしい。私は彼女に最  
近まで会つていなかつたから」  
ホーリアはそう言つて下を向いた。彼女が痛みを耐えながら自分と  
対峙したのに、それを無視した。

「うーん、それはまずいね。半年ぐらいかなあと思つていたのに、  
もつと前に踏み越えたわけか」

「……」

黙つているホーリアに向かつて、アレンは突然「こんな」と言つた。

「の方は世界征服とか、そんな恐ろしいこと考えてるのではな  
いかな? 魔術書、読んだことあるだろ?」

魔術書と言われ、ホーリアは思い出した。否、彼にとつて忘れられ  
ないものだった。

「……死の、契約？墮胎した子どもを復活させて自分の命令通りに動かして世界を破壊する。あれはお伽話ではないか」

死の契約……シャルはさっぱりわけが分からなかつた。  
魔術は知つてゐるが、実際に見たことがなかつた。

それを見たアーサーが説明する。

「死の契約つていう小説があつて、内容は王国に住んでゐる少年が自分だけの世界を作りたくて人々を惨殺する話」

詳細はこうだつた。

少年には愛する人がいて、その人と結ばれることを願つていたのだけど、両親や友人は少年の弟と少年が愛する人を結ばせてしまつたんだ。  
それだけじゃなく、少年が愛する人は、少年の弟を心から愛していた。  
少年は嫉妬に狂い、愛する人を弟から奪つて自分の物にしてしまう。

愛する人は少年の危険さを知り、弟と離れて少年の元に行く。  
喜んだ少年はその人に毎日会いに行つては着飾らせる。

そして、その人と少年の間に子どもが誕生した。

……その人は少年との間に生まれた子どもが愛せなくて拒絶した。

子どもは傷つき、自分の殻に閉じこもつた。

「……悲劇的な話だね」

詳細を聞いたシャルはアーサーに言った。

すると、アーサーは苦笑しながら言った。

「……そうだね。俺は嫌いでその話を読むのをやめてしまった」

アーサーが死の契約について話していた間、アレンとホーリアは沈黙したままだったが、シャールは気づかなかつた。

重苦しい雰囲気が漂う中、ホーリアは一人呟いた。

「……父上は、復讐しようとしているのかもしない……。母とシリウスが幸せになつて、カインとイリアが幸せになつて、更に幸せになるから……父上は、母上に捨てられたと思つていてるから」

「……ホーリア」

アレンは心配そうな表情でホーリアを見る。

「アーサー、2人を頼む。私は少し父上に会いに行つてくる」

そう言つて立ち上がつたホーリアは後ろを振り返る事なくその場を離れた。

「……アーサー、案内頼むよ」

止めても無駄だと思ったのだろう、アレンはアーサーにそう言つた。前を向き、立ち上がつた彼を見た。

……彼の表情が青ざめていた。彼もホーリアが心配なのだろうが、立ち止まるわけには行かないようだ。

「行くよ、シャール」

不安を残したまま、シャールとアレンはアーサーについて行く。

＊＊＊＊

広い広い、童話に出でくるように広い城。

ホーリアは通路を歩いていた。

その瞳には涙が溜まっている。

：シリウス、私は守れそうにない。

シリウスと幸せだった日々。

母に愛されたいと願っていた日々。

カインやイリアと会つてから共に過ごした日々。

カインを守れるなら、守りたい。それが出来ないならカインと戦いたい。

ホーリアは悲しそうに笑った。

きつとカインには勝てない。彼の手で死ねたら幸せだと思つ。

カインは憎しみを込めて自分を見下すだろうか。それとも、あり得ないとは思うが、悲しんでくれるだろうか。

そんなことを考えながら直線だった通路は右と左に分かれている。

ホーリアはまた自嘲氣味に笑い、右に曲がった。

右に曲がり、少し歩くと部屋があつた。武器倉庫である。

ホーリアは部屋の前に立ち、扉を開けた。

「……あつた」

目の前にあるのは立てかけている槍と飾られている短剣。ホーリアは白く装飾した槍の隣にあつた短剣を掴んだ。

「……行くしかあるまい」

短剣を2本持ち、武器倉庫から出て行った。

行き先はカインの待つ牢屋、そこでホーリアはカインと対峙する決意をした。

カツカツと音を立てながら歩くホーリアの瞳には一筋の涙が流れていた。

此処から牢屋までは近い。先ほど2つに曲がっていた場所を左に曲がれば牢屋だ。

また、此処なら殆ど人は通らない。幹部や幹部候補生なら素通りできるぐらいだ。

幹部も好き好んで此処に来る者はいない。また、牢屋から出て曲がり角を行つた先には、もう使われていない広間があり、その玉座の裏側に抜け道があつた。

あまり知る人も少なかつたが、此処からアルディ家の外に出られることを偶然に知つたホーリアは、ラーナと父の目を盗んで抜け出していた。

随分幼い頃に知つたが、どんなきっかけがあつたかは分からぬ。

「……カイン」

（なあ、カイン。どうか私に罰を与えてくれないか）

それだけを願つた後は荒々しい音を立てて歩き始めた。

階段が近付く度に、ホーリアは怯みそうになつた。

引き返そうか……それが脳裏を過ぎつたが、懸命に振り切つた。

……大事な弟とこれから殺し合いをするのに……。

何度も何度も恐怖心と戦いながら、やつとの思いで階段に辿り着いた。

此処からは覚悟を決めて、ゆっくりと一段ずつ降りていく。階段を降りた後、誰もいない牢屋を見ながら安堵した。見張りもない。

「……カイン、不様な姿だな？」

「セイシェル、あなたは……！」

カインは睨みつけた。

その目には、はっきりと敵意が表れていた。

\* \* \* \*

目の前に現れたホーリアを見たカインは睨みつけた。カインには分からなかつたのだ。イリアを手に掛けようとした兄が。

「どうしてそんなことをする？俺が、イリアが、何をしたんだ！」

母を憎んでいたのは知っている。自分を恨んでいたことも知っている。

でも、イリアを殺害して、どうなると云つのだ？

「……お前は母から何も聞いていないのか？」

笑いながら問い掛けているホーリアだが、彼の目には憎悪がはつきりと表れていた。

「俺の母？俺の母があなたに何をしたと言つんだ

「実際には、理由がよく分からなかつたのかも知れない。

「……そうか、お前の母は酷い女だつた。自分の子どもをあつさりと捨てる女だからな」

「……俺の母を侮辱するな……」

睨み付けるカインを見たホーリアは嘲笑いつように言つ放つ。

「言いたいことはそれだけか？私は母を憎んでいる……だから母の子どもも憎い。

お前をえいなれば良かつた。私はお前を認めない……誰が認めても、私はお前を認めない！」

「……なら、どうしてあなたは俺を助けた…どうして、俺を……最初からこうするつもりだつたのか？」

「……ああ、お前にもイリアにも死んでもう。どうせ、お前たちは死ぬ運命だからな？」

「セイシェル！」

カインは怒りに顔を歪めてホーリアを睨み付けた。

「……では、戦わないとな？」

そう言つたホーリアは床に置いていた剣を拾い上げ、カインに向かって投げつける。

「……………ビリヒー、ビリヒー、こんなことをする？」

カインは再度問い合わせる。

……彼の表情が一瞬だけ、歪んだから。

冷酷に言い放つ彼の本音ではないと感じたから。

「……………セイシェル、ビリヒー？」

答えは返つて来なかつたけれど、彼の目に迷いが見えたのは分かつた。

＊＊＊＊

カインと対峙していたホーリアは呆然と立つたまま動かなかつた。

否、動けなかつた。

彼に見抜かれたのだ、結局のところ。

何もかもカインに負けていた。彼と戦うことさえ出来なかつた。

ホーリアは自分の弱さを笑うしかなかつた。

しかし、こんな時に限つて何も言えない。

カインは真つ直ぐと自分を見ているのに、見返すことも出来なかつた。

逃げたくて仕方なかつた。来なければ良かつたと後悔した。でも自

分がカインと戦わなければ彼は赤の他人に無惨な形で殺される。

失いたくない、誰にも介入されたくない。

相反する感情が入り交じり、眉間に皺を寄せる。

「……！」

何かを思い出したように目を見開いたホーリアはカインに向かって

「……氣を付けることだな、お前は狙われている」

と言つて踵を返した。

「……セイシェル！」

カインは呼び止め、それを聞いたホーリアは一瞬だけ立ち止まつた。しかし、彼は早足で歩きだした。

……彼の姿は見えなかつた。

ただそこにあるのは、下に転がつてゐる剣だけだつた。

「……セイシェル、ごめん。俺は何も知らなかつた……知つたよう  
に振る舞つていただけだつたんだ……」

彼は辛い思いをしながら過ごしていたのに、自分は何不自由なく過ごしていた。

彼を救うどころか、彼を追い詰めていつた自分が嫌になつた。自分の無力さを改めて思い知り、絶望のあまり崩れ落ちた。  
下に転がつてゐる剣だけを見つめながら。

＊＊＊＊

逃げるよひにして、牢屋から出て来たホーリアは急いで走っていた。

アレン達は無事だらつか？

アレンはああ言つたが、実際に父が命の保障をしてくれるとは思えない。カインにも見抜かれ、父にも逆らえず、何も出来ない自分は馬鹿だつた。

「……馬鹿みたいだ」

『みたい』ではなく、正真正銘の馬鹿なのだら。

カイン、どうしたらいい？

答えてくれるはずもないのに、また問い合わせる。もつ何度もカインに問い合わせたのだろうと、ホーリアは思つていた。

(セリには、いないのに)

苦笑しながら歩いていたその時だつた。

「……ホーリア」

誰かの声がした……まずい、どうしよう。

焦つたのは言つまでもない。父親やラーナだつたらどうしたらいいのだろう。

「ホーリア、ホーリア」

一回続けて誰かに呼ばれた。

聞き覚えのあるよつな、なによつな、誰なのが分からなかつたが呼ばれていたことだけは確かだ。

「……？」

振り向いても誰もいない。

姿が見えなくて、きっと氣のせいだと思い、歩くことにした。

「……ホーリア！」

一段と強い声で呼ばれた。

「……ーク……？」

何故こうなるのか分からなかつた。ただ、ぼんやりとしていた。意識が遠退していくのがわかる。

( お兄様！ )  
( セイシェル ! )

浮かんだのは、名前を呼ぶイリアの苦痛に満ちた表情と、カインの悲しそうな表情だった。

「少し、休みなよ。なあ……セイシェル」

誰かが優しい声で言ったのを聞いただけだった。

\*\*\*\*\*

昨日、ハロルドの手配により別の医務室に移ったイリアはカインの身を案じていた。  
以前と比べてぐつたりした様子で話す。

「ハロルド……」

「イリア様、どうしましたか」

「……カイン、無事……？」

彼女はどこまでもカインが好きなのだろう。  
そう考えたら、ハロルドは悲しくてならなかつた。

「……ホーリア様が何とかしてくださいますよ」

そう返すしかなかつた。頼りなのはホーリアだけなのだから。

「……そうだといいな」

寂しそうに呟くイリアの瞳には涙が溢れていた。それを見て、ハロルドはたまらなくなつた……イリアがあまりにも痛々しくて。  
もつと言えばホーリアとカインも痛々しくて、こみ上げるものがある。

「……どこで、間違つたのでしょうかね。

ホーリア様とカイン様が引き裂かれなければ、こうならなかつたかもしれない。とても仲のよい兄弟になつたかもしれない

「

「……そう思つわ……2人ともお互いを求め合つてゐるもの……お兄様は、お父様に……」

ハロルドそこでふと、イリアがホーリアのことについて誤解しているのではないかと思つた。

「……あんなことを言つたけれど、ホーリア様はカインが一番大切なことです。

誰より、何より大切なのです」

カインを妬み、恨んだこともある。それ以上に、ホーリアにとつてカインは掛け替えのない存在でもある。ハロルドはホーリアの近くにいるのか、彼の思いが分かるのか、はつきりと断言した。

「慰めるのがうまいのね」

イリアは笑いながら言い返した。彼女にはどうしてハロルドがそう言つのか、全く分からなかつたのだろう。首を傾げるばかりだった。

「……！？」

再び前を向いた時、彼女の顔が変わつた。

「……！」

痛みに顔を歪めながら、悲鳴を上げ始める。

「イリア様！誰か、誰か……！」

ハロルドの慌てた声と、イリアの悲鳴が響き渡る。それに気付いた召使達がバタバタと駆けつける。彼女の身に何かが起こったなら駆けつけられるように傍に待機していたのだ。

「ハロルド様、イリア様！」

召使達と看護婦達がバタバタと急ぐ。

\*\*\*\*\*

アーサーはアレンとシャールを連れて、ある場所に向かっていた。第二棟と第一棟の間にある中庭である。複数の建物が合体しているアルディ家の本部だが、基本的には一棟を使っている。その間にある大きな中庭に案内する理由は一つである。

「レティシア……？」

「ああ、あの子も連れて逃げないと」

シャールの問いにアレンが答えた後

「彼は、君の親友だらう？」

再度問い合わせる。

アーサーは、思い出したようにシャールに言った。

「彼は君と一緒に行きたいようだよ。

前に会つた事があつて、シャールのところに行きたい？って聞いたら頷いた。それに此処に残すこともできないだらうし

アーサーの言うとおり、レディシアを此処に残す事は出来なかつた。何故なら、彼は裏切り者である自分に力を貸したのだから。その事を両親達が知れば彼は追い詰められる。

自分をアルディ家に入れた時、彼の両親達は悔しそうな顔で睨んでいたのだから。

「レディシア……早く会いたいな」

彼は自分にとつて親友だから、彼に何かがあつた時は救いたかった。……彼が、最初に自分を救つてくれたから。

アーサー達はレディシアと待ち合わせてゐる場所まで歩いた。待ち合わせ場所は、中庭の中でもひと際目立つ噴水のところである。

アーサーはホーリアからそう聞いた。

理由は初めて出会つた場所だからと、彼は言つた。

よく分からなかつたがホーリアの言葉を信じ、アーサーは向かう。

「……アーサー様、シャール！」

遠くから声が聞こえる。それも、前方からだつた。

「……アーサー、あればレディシア君じゃないか？」

アレンが前を指差した時、深緋の髪色の少年が走つてくるのが見えた。そう、レディシアである。

「レディシア！」

どうやらレディシアの様子が可笑しい。3人も走り、レディシアの

ところへ向かつた。

「アーサー様、よかつた！」

漸く追いついたレディシアは息を切らしながら膝をついた。何か重要な事があつたに違いないと3人は更に走る速さを上げて行く。  
……嫌な予感がする。シャールは自分の額から冷や汗が流れ落ちるのが分かつた。

膝をついたレディシアにアーサーは問い合わせる。

「何があつたんだ？」

「……アーサー様、ど、どうしたらいいの……助けて！」

レディシアは答えず、ガタガタと震えながら助けを求めた。

「どうしたんだ、話してくれ」

彼が何に怯えているのか、一体何があつたのか、急いで此処まで来た理由は。

それを知らないとどうすることもできない。アーサーの代わりにシャールが問い合わせた。

「……力を貸すから」

シャールはそう言つてアレンとアーサーを見る。勿論2人も力強く頷いた。

「……イリア様が……子供を残していなくなつたそうです……」

「……！」

3人は呆然とした。

彼女が子供を授かっていた事は知っていたが、その子が生まれて、その後イリアが消えたのだと。

「……怯えている場合か！」

真っ先に叫んだのはアレンだった。

「レディシア、君しかいない。イリア様を連れ戻しに行くんだ。きっとハロルドさんも追っているだろ？……アーサー、君も行つた方がいいよ」

アレンの顔色も真っ青だったが、恐怖心1つ見せずレディシアに言う。アーサーは頷き、レディシアを連れて走つて行つた。

「……分かるのですか？」

シャールの問いにアレンは答えた。

「彼女は、カインを助けに行つたんだよ」

自分の命も顧みず、弟であり恋人でもあるカインを助けに彼女は向かつたのだ。

アレンはそのまま中庭へ向かう。

「医務室へ向かうぞ。実は君の助つ人もこいつそり呼んでもらつていたんだ」

アレンの意図と行動がよく分からぬ。準備が早過ぎて追いつけない。  
シャルは感心しながらアレンの後ろをついて行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1631m/>

---

緋の剣士に捧ぐ交響曲

2011年11月17日17時21分発行